

活 動 報 告

国際シンポジウム 「日本の文化変容と異文化——近世から近代へ——」について（報告）

はじめに

1. シンポジウム「プログラム」
2. シンポジウム「報告の部」概略
3. シンポジウム「パネル・ディスカッション」全記録

鳥越輝昭

はじめに

2007年11月17日（土）、国際シンポジウム「日本の文化変容と異文化——近世から近代へ——」が開催された。これは神奈川大学人文学研究所が主催した催し物で、会場は神奈川大学23号館201教室だった。

シンポジウムの論題「日本の文化変容と異文化」は、「日本文化」が固定的なものでなく異文化とかわるなかで変容を続けてきたという基本認識を示したものである。なお、明示してはいないが、変容のなかを貫流する特徴もあっただろうとの認識も背後にあった。

日本文化の変容に際して大きな力として働いたのは、ひとつは中国文化であり、ひとつは西洋、とりわけ英米の文化だった。それゆえ、このシンポジウムでは、報告者・パネリストとして、中国から2名の日本研究者、英米から1名ずつの日本研究者を招き、中国文化・英米文化とかかわるなかで日本文化が変容した局面を照射しようとした。報告者・パネリストたちは、いずれも日本文化を外国文化との関連で研究している第一級の研究者である。また、コメンテーターには、世界のなかでの日本文化の来し方を専門としている研究者を招き、変容してきた日本文化について総合的認識を得ようとした。

報告者・パネリスト、ならびにコメンテーターは以下の諸氏（発表順）である。

＜報告者・パネリスト＞

- (1) タイモン・スクリーチ氏

ロンドン大学アジア・アフリカ研究院・教授、江戸視覚文化史専攻

- (2) 王 勇氏

浙江工商大学日本文化研究所・所長・教授、中日文化交流史専攻

- (3) 陳 小法氏

浙江工商大学日本文化研究所・准教授、明代中日関係史専攻

- (4) マーティン・コルカット氏

プリンストン大学歴史学部・教授、日本史専攻

＜コメンテーター＞

田中優子氏

法政大学社会学部・教授、日本近世文学・近代文化・比較文化専攻

なお、司会進行役は、人文学研究所長である関係で、わたくし鳥越が務めた。

結論からいえば、このシンポジウムは意図した上記の目的をじゅうぶん達成したと思う。聴衆のひとりによるアンケートの感想、「ほんとうにすばらしいシンポジウムでした」は、目的が達成された表れと見ることができよう。

充実した発表・討論・コメントをしてくださった方々に心よりお礼申し上げるとともに、シンポジウ

ムの準備・運営に尽力くださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

以下に、このシンポジウムの「報告の部」の概略を記し、「パネル・ディスカッション」全体を収録する。

1. シンポジウム「プログラム」

シンポジウムのプログラムは以下のとおりだった。

(1) 報告の部

10:00-11:50 タイモン・スクリーチ

「日本におけるイギリス東インド会社の文化的影響, 1613-23 年」

11:00-11:50 王 勇

「新史料『太平抗倭図』について」

13:00-13:50 陳 小法

「『初渡集』からみた日本五山における漢語の変容」

14:00-14:50 マーティン・コルカット

「新生日本のための教育—— 1872 年の米国およびヨーロッパの教育・文化に関する
久米邦武の観察」

(2) パネル・ディスカッション

15:30-17:30

パネリスト:

タイモン・スクリーチ

王 勇

マーティン・コルカット

陳 小法

コメンテーター:

田中優子

司会:

鳥越輝昭

2. シンポジウム「報告の部」概略

シンポジウムは、ほぼ上記のプログラムどおりに進行し、10:00 に開始され、17:30 に閉会した。以下に、「報告の部」の概略を記す。

(1) タイモン・スクリーチ氏の報告

スクリーチ氏からは当日の報告に先立ち、つぎの「報告概要」が提出されていた。

「日本におけるイギリス東インド会社の文化的影響，1613-23 年」

タイモン・スクリーチ

イギリス東インド会社はオランダ東インド会社に2年先立って設立され、それよりはるかに大きな組織となった。日本における役割はオランダに比べると小さく、また10年間しか経営されなかったとはいえ、その存在は不当に軽視されてきたといえる。

周知の通りオランダの商人たちは1600年に日本に入学した（ちなみにそのときの水先案内人はイギリス人だった）。オランダ東インド会社自体がやって来たのは1609年になってからだったが、ただちに平戸で歓待を受けて商館を設立した。イギリス東インド会社はその4年後に到来し、浦賀に商館を開設するよう勧められたが、平戸の方を選んだ。シャムのアユタヤやジャワのバタムなど世界の他の土地での例に漏れず、二つの会社はここでも隣同士だった。両者はときには協力し、ときには争った。本国同士が戦争中であることさえあった。

この報告ではイギリス人の与えた文化的意義のすべての側面を扱うことはできないが、次の側面に注目することにする。両者は当然ながらカトリック教徒のイベリア人たちから自分たちを区別する必要がある、それには成功した。しかし総じて日本人はイギリス人とオランダ人の違いを必ずしも完全に意識していたわけではなかった。そこでイギリス人は自分たちの国民性を示す試みにとりかかった。さまざまな方法が試みられたが、その中の一つは平戸の大名にイギリスの食べ物を提供することだった（のちに何度も求めていることからすると、当時実権を握っていた大名の祖父のお気に召したようだった）。しかしもっとも重要なのは、ロンドンのイギリス東インド会社の役員会が1614年に大量の絵画と版画を委託販売品として送る決定を下したことだ。これらの絵の主題はイギリス国家の諸相を示すことだった。まずはロンドンの絵があり、中世の世界における驚異の一つとみなされていた壮観なロンドン橋が描かれていた。次に肖像画と家系図の形で王室を描いた絵も送られていた。三つ目はイギリスがスペインと戦った戦争画であり、それらはオランダがスペイン支配下にあり、イギリスは意味深長にも神聖な嵐、つまり「神風」という奇跡によってスペイン人から護られてきたことを示そうとしていた。これらの絵は概してイギリスを豊かに栄えてうまく管理されている国、神に護られたプロテスタントの独立君主国として掲げるものだった。

船荷の中にはより想像的な絵画も含まれており、ギリシア・ローマの神々を描いたものなどもあったが、特に壮観なのはガリレオの最新の発見を描いた一連の惑星の絵である。私はそのうちの一枚が日本に現存していると信じている。

（訳：村井まや子）

シンポジウム当日のスクリーチ氏の報告は、イギリス東インド会社から日本へ派遣された船舶の積み荷の特徴を中心とするものだった。氏の話の要点はつぎのようなものである。

①イギリス東インド会社が日本と交易をしようとした理由

イギリス東インド会社は、特産品のウールをジャワで売って香料を入手しようとしたが、温暖の地ジャワではウールが売れなかった。ところが、ジャワにいた日本人から、日本ではウールが売れだろうという示唆を受けた。そこで、会社は、日本でウールを売って黄金を入手し、その黄金でジャワの香料を買おうと計画したのである。その際、北極回りという短距離航路の可能性も考慮された。

②イギリス東インド会社船舶の積み荷の特徴

イギリス東インド会社が第三回目に日本に派遣した「ニューイヤーズ・ギフト号」の積み荷には、毛織物、鋏・ナイフ、望遠鏡などの他に多数の油絵が含まれていた。油絵のうち、半数は裸体画、半数は

肖像画だった。裸体画が積み込まれ理由は、第一回の派遣船が平戸に入港した際、現地の「殿のレディーたち」がヴェヌスの絵に感心したからである。

肖像画は、貴族の肖像や英国王の肖像だった。英国王の肖像画は他の国王への贈答用に使われた。「ニューイヤーズ・ギフト号」はアフリカを経由し、インドのムガル帝国を訪れたが、英国王ジェームズ一世の肖像画はムガル皇帝への贈り物にされた。また、ムガル皇帝の先祖ティムールの肖像画も贈られたのである。

「ニューイヤーズ・ギフト号」はジャワに到着したが、船体に問題があったらしく、積み荷の積み替えがなされ、平戸へやってきたのは「トマス号」と「アドバイス号」である。これら二隻の積み荷の記録をみると、大量の油絵が積まれていたことがわかる。ただし、日本にもたらされた油絵のなかに肖像画はなく、エロティックな絵が多数を占めた。また、安価な版画も大量にもたらされた。

版画の主題の特徴は三つある。第一に、英国は日本と同じ反カトリック国であることを宣伝するもの、第二に、英国は日本と同じ王国であることを示すもの、第三に、ロンドンの繁栄ぶりを示すものだった。

(2) 王勇氏の報告

王勇氏の報告は、「倭寇」の本質、「倭寇」を描いた日中の図像、という2点に関するものだった。

「倭寇」の本質につき、王氏は、16世紀という海路による世界的文化交流が活発化した時代背景のなかで、日本側の押し出す力と中国側の吸引力とが作用し、人の異常な移動が引き起こされたものだ、と分析した。日本側の押し出す力は、軍勢力・武器の過剰蓄積、中国の文物へのあこがれ、幕府統制力の低下だった。中国側の吸引力は、商品の過剰蓄積、海外貿易への機運だった。

「倭寇」を描いた図像に関する氏の論点は、つぎのようなものだった。

『倭寇図巻』と称されている有名な絵巻（東大史料編纂所蔵）は、じつは倭寇を描いたものではなく、明代の台湾戦役を描いたものである。ただし、描かれているのは日本人である。

『倭寇図巻』の複製画と考えられている中国側の『抗倭図巻』（中国国家図書館蔵）は、じつは複製ではなく、船・服装・兵器などが相違している。その一方で、ふたつの絵巻には共通点もあるから、これら二点は同一画家によるセットの作品である可能性が高い。

中国にある別の倭寇図、『太平抗倭図』は温州の町、太平の攻撃に失敗し捕虜とされた倭寇を描いた絵で、文字史料や考古学的発掘とも照応する正確な記録である。

従来、歴史研究では図像史料が軽視されてきたが、倭寇研究についても未整理の史料が多数あり、今後の研究の宝庫である。

(3) 陳小法氏の報告

陳小法氏からは、シンポジウムに先立ち、つぎのような「報告概要」が提出されていた。

『初渡集』からみた日本五山における漢語の変容

陳小法

一. 策彦周良と『初渡集』

策彦周良（1501～1579）、諱は周良、別号は怡斎・怡雲子・謙斎、丹波の出身。天文八年（1539）遣明船副使として入明し、天文十六年（1547）遣明使正使として再度入明した経験がある。著述に『策彦和尚詩集』・『南遊集』・『謙斎雜稿』・『城西聯句』・『初渡集』・『再渡集』などがある。

『初渡集』は策彦周良が始めて勘合貿易に携わった時に書いた朝貢日記である。明の嘉靖十七年（日

本天文七年、1538) 七月一日から起筆、嘉靖二十年(日本天文十年、1541) 十月二十六日まで擱筆。あしかけ三年余りの歳月に跨り、ほぼ十六万字に達し、日明関係史においては貴重な一次史料である。

二. 「東坡」と「味噌」

『初渡集』での用例：

- (1) 天文七年(嘉靖十七年、1538) 霜月六日：正使恵予以東坡十斤。
- (2) 嘉靖二十年(日本天文十、1541) 七月十二日：大光遣平五郎賜米並東坡等。
- (3) 嘉靖二十年七月十五日：正使致使恵東坡三器、廬陵一袋。
- (4) 嘉靖二十年七月晦日：又携才伯贈物之数目、米一俵五斗、東坡三升、買臣貳担。(策彦周良『初渡集』、『大日本佛教全書』73巻・史伝部十二、東京講談社、1972年、同日条)

- (一) 『花園遺臭録』：「尾濃間末醬(ミソ)曰玉堂、蓋五嶽雅言称東坡、蘇氏故蘇音近醬(ソ)、俗作味噌。」(野村常重『鹿苑日録雑話』、『史学雑誌』第四十九編第七号)
- (二) 『鹿苑日録』：「大豆涵水、東坡之用意。」(野村常重『鹿苑日録雑話』、『史学雑誌』第四十九編第七号)
- (三) 安原貞室(1610—1673)『片言』：味噌のからなを東坡と付たるやうのことは。やさしく侍る。かやうのさかひよく心得べしと云う。(『片言・物類稱呼・浪花聞書・丹波通辭』巻四、日本古典全集刊行會、昭和六年、77頁。)
- (四) 大田南畝(1749—1823)『一話一言』(一四)：「三蘇(みそ)といふことか。」
- (五) 『広辞苑』「東坡」②：(蘇軾及びその父の蘇洵、弟の蘇轍を「三蘇」というが、ミソともよめるので)味噌の異称。

三. 「丁々」・「廬陵」・「八八」と米

(一) 「丁々」

中文の意：①壮健ぶり、②長く遠いさま、③冷やか顔、④擬声語、元々は伐採の音。『初渡集』での用例：

嘉靖十七年(1538) 七月二日：移居於龍華、携以一束一本。正使新篁和上見贈丁々一俵。(策彦周良『初渡集』、『大日本佛教全書』73巻・史伝部十二、東京講談社、1972年、同日条)

「丁々」というのは「お米」の異称で、出典は『詩経』：「伐木丁々、鳥鳴嚶嚶。」(野村常重『鹿苑日録雑話』、『史学雑誌』第四十九編第七号)

(二) 「廬陵」

『初渡集』での用例：

嘉靖十七年七月十五日：正使致使恵東坡三器、廬陵一袋。(策彦周良『初渡集』、『大日本佛教全書』73巻・史伝部十二、東京講談社、1972年、同日条)

「廬陵」はお米の異称でもあり、出典は「廬陵米価」。宋朝僧道原『景德伝灯録』巻五：ある僧が、六祖慧能の法嗣である青原行思禪師に仏法のことを聞いたたら、青原行思は「廬陵米の値段は？」と答えた。

(三) 「八八」

『初渡集』での用例：

嘉靖十七年七月八日：阿野備后守宅有小齋、予亦赴之。午後、朴中座元見恵八八一盆。(策彦周良『初渡集』、『大日本佛教全書』73巻・史伝部十二、東京講談社、1972年、同日条)

「八八」もお米の異称である。

四. 「煙景」・「一指」と「銅錢」

『初渡集』での用例：

- (1) 嘉靖十八年（1539）二月四日：神屋壽禎設齋，蓋統公上司北堂之父春叟元仲三十三百忌辰也。新篁和上有焼香偈。一座見和之，予亦備其具。打囀予煙景。
- (2) 嘉靖十八年七月廿三日：辰刻就於東禪家裏，有百座梭嚴咒，正使和上已下赴之。施襯金，正使及予煙景，餘一指。
- (3) 嘉靖十八年九月八日：池永宗巴設小齋，蓋亡親十三年諱也。日頭宗永，一休書之。襯煙景。
- (4) 嘉靖十九年（1540）七月廿四日：午時吳通事俾藏人贈煙景，蓋為來廿六亡子吳霖周忌也。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73巻・史伝部十二，東京講談社，1972年，同日条）

（一）「煙景」

「煙景」は銅錢五百文の隠語である。山岡浚明（？-1780）『類聚名物考』：「煙景，五百文，五湖煙景有誰争という句より名付しなり。」

（二）「一指」

「一指」は銅錢百文の隠語で，出典は「一指頭禪」という公案だそうである。『五灯会元』：師（俱胝）がある日，袖に刀を隠し，童子に「仏法ができるそうだと」聞いたら，童子から「はい」と返事した。師曰：「じゃなんか」，童子が指を立てて応じた。そのとき師は刀で童子の指を切り，童子は忽ち叫んで飛び出した。師は童子を呼び，童子が後ろを振り向き，師は再び「仏法はなんか」と聞き，切られた指を立てたがった途端に，童子は大悟した。示寂の前に，師は衆に「吾れ天龍一指頭の禪を得て，一生使い切れず。」と嘆いた。（『四庫全書』子部十三『五灯会元』（宋釈普濟撰）巻四「杭州天龍和尚法嗣」）

五. 「買臣」と「薪」

『初渡集』での用例：

嘉靖二十年七月晦日：又携才伯贈物之数目，米一俵五斗，東坡三升，買臣貳担。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73巻・史伝部十二，東京講談社，1972年，同日条）

「買臣」は「薪」の隠語で，出典は「買臣負薪」である。

シンポジウム当日，陳氏は，「報告概要」に則しながら，本来の中国語にはない日本的意味で使用された漢語について報告した。氏が資料にしたのは，16世紀の禅僧，策彦周良の『初渡集』で，この日記には，見かけは中国語だが，じつは日本語・日本俗語・日本語文法であるものが散見されるのである。

氏が，取り上げたのは，①「東坡」＝味噌，「八八」＝米，②「煙景」＝銅錢五百文，「一指」＝銅錢百文，③「買臣」＝薪，という用例である。いずれも中国語にはない意味で使用されている。

氏は，意味が変化した原因を，言葉の使用される環境が変化したなかで，使用者の直感が作用した結果だろうと推理した。

（4）マーティン・コルカット氏の報告

氏からは，シンポジウムに先立ち，つぎのような「報告概要」が出されていた。

「新生日本のための教育—— 1872 年の米国およびヨーロッパの教育・文化に関する久米邦武の観察」

マーティン・コルカット

1871 年 12 月、岩倉使節団に随行して横浜を出発したとき、久米邦武（1839-1931）は 33 歳（数え年）でした。1873 年の夏に帰国するまでに、久米は世界を旅し、アメリカ合衆国および 10 カ国ほどのヨーロッパ諸国について文化と文明を観察しました。岩倉使節団は単なる外交使節団ではなく、「修学する使節団であり、西洋文化と社会への入門」でもあったのです。

久米は、歴訪した国々で見る西洋文化のさまざまな側面に魅了されました。『米欧回覧実記』には、風俗習慣、男女の関係、オペラなどの音楽、美術館・博物館、大衆向けの新聞などに関する久米の観察が記録されています。しかし、久米の関心をかき立てた「文化」のあらゆる具体的現象のなかで、教育ほど注目を引きつけたものは他にありませんでした。

若く聡明で学識豊かな元武士で和漢の古典を学んでいた久米邦武。日本を出発したときには英語もその他の西洋語も流暢に話せなかったこの人物は、米国（およびヨーロッパの）教育をどのように捉え解釈したのでしょうか。久米はどのような教室や生徒・学生を訪れることができたのでしょうか。目にしたものをどのように解釈したのでしょうか。米国の教育のどのような側面を久米は特筆し、それによって日本人読者に何を訴えたのでしょうか。使節団の旅行記のなかで、久米は「教育」をどのような広がりを持つものと解釈したのでしょうか。久米は教育を西洋文化全体のなかのどこに位置づけたのでしょうか。日本の将来にとって教育がどのような重要性を持つと考えたのでしょうか。

久米が旅行記の冒頭から明言しているのは、西洋諸国の教育施設と教育方法とを視察することが岩倉使節団の使命の肝心な部分であり、そういう視察を記録するのが自分の責任だった、ということです。久米の見方によれば、教育に関する観察こそ日本が変化を遂げてゆくために不可欠な情報を与えてくれるのであり、外交上の議論の詳細より注目すべきものでした（ですから、久米は外交上の議論の詳細に関する記録作業は他人に委ねることにしました）。

しかし、岩倉使節団員たちは、都市から都市へと（しばしば足早に）旅を続けながら、米国ならびにヨーロッパの学校と大学とについて正確には何を見たのでしょうか。教育機関へのこういう訪問は、彼ら視察の当事者たちによってどのように手配され記録され解釈されたのでしょうか。使節団員たちの旅は当初から旅程を定めぬ旅でしたから、教育機関への訪問も直前に手配しなければならないことが多かったのです。しかし、サン・フランシスコの新聞が、日本の使節団が西洋の外交・産業・貿易だけでなく教育についても関心を持っていることを報道し始めると、このニュースは合衆国ならびに世界中の新聞によって報じられました。すると、使節団が訪問するさまざまな都市で学校の門が彼らに開かれたのです。

岩倉使節団の大使秘書・歴史家・記録者として旅をする機会を得たことにより、久米は 10 以上の国々で学校、大学、士官学校、博物館、美術館、新聞社を訪問し、それらを相互に比較することができました。『米欧回覧実記』のなかの久米によるこういう訪問の記録は、おざなりなものでも義務を果たしただけでもありません。あきらかに久米は記録者としての責任を真剣に受け止めてはいました。けれども久米は、使節団の教育専門家たちの関心や訪問を記録する以上のことをしていました。久米自身が、教育——いちばん広い意味の、子供も成人もふくめた教育——という問題全般について、個人・市民・国家を発展させる決定的要因として深い関心を持っていました。久米は、日本は西洋から多くを学ばねばならないけれども、国家を建設してゆく際に日本も教育の改善を利用できるだろうと思っていました。久米がもっとも高く評価したのはアメリカ合衆国、英国、プロイセン、オランダ、スウェーデ

ン、デンマーク、スイスなどの主にプロテスタント国で、そこではもっぱら非聖職者の手で教育がおこなわれていました。とりわけ、久米がくりかえし主張したのは、教育は生まれや貧富や社会的地位にかかわらず、すべての市民に提供されるべきだということでした。

マリウス・ジャンセンがいったとおりです。「日本の現状と将来の進路とについて、『米欧回覧実記』でなされた以上に思慮深く博識な議論を想像するのは難しい。『実記』の教訓は明瞭だった。それはすなわち、日本が、教育ある国民の団結している国だけが勝利するような高度に競争的な世界のなかにすでに入っている」、というものだったのです。

(訳：鳥越輝昭)

シンポジウム当日、コルカット氏は、「報告概要」にあるとおり、久米邦武が米欧の教育に何を見、何を考えたかに関して報告をした。氏の主要な論点はつぎのようなものだった。

久米の『米欧回覧実記』では、教育に関する記述が大きな部分を占めているが、これは久米の関心のあり方を反映したものである。久米は、日本の将来の国づくりに教育が欠かせないと考え、米欧の教育の良い面を利用するべきだと考えていた。

久米は、米欧について、広い意味の市民教育がなされている点に注目した。博物館や公共図書館のような施設が人づくりと国づくりに貢献しているのを見て取ったのである。久米は、公共図書館では、書籍が市民の閲覧に供せられていることに注目し、また、古代の文献、つまりは歴史が大切にされていることにも注目した。

久米は、全体として米国の教育を高く評価したが、その主な理由は、①子供たちの教育が行き届いていること、②めぐまれない人たち（盲人や黒人）の教育にも力が注がれていること、③プロテスタント国であるため教育に聖職者が関与していないこと、だった。

シンポジウムの「報告の部」は、以上のような内容をもって終了し、休憩を挟んで、「パネル・ディスカッションの部」に進んだ。

2. 「パネル・ディスカッションの部」全記録

「パネル・ディスカッションの部」は、予定よりやや早い 15:10 に開始され、予定どおり 17:30 に終了した。パネル・ディスカッションについては、その全体を次頁以下に収録する。

国際シンポジウム「日本の文化変容と異文化―近世から近代へ―」

パネル・ディスカッション

2007 年 11 月 17 日

鳥越 お待たせいたしました。これからパネル・ディスカッションに移りたいと思います。ここから初めてご出席の方もいらっしゃるかもしれませんが、今日のタイトル「日本文化の変容と異文化」についてもう一回申し上げます。後ろの黒板に張ってあるものなのですが、少し考えがあって付けたタイトルです。今おりますところは 23 号館といって、この大学でいちばん新しい建物で、数年前だったでしょうか、にできた一種ポストモダン風の建物なんです、これも日本文化の一つの表れですし、鎌倉の建長寺のようなものも日本文化の表れで、東京駅もちろんそうです。日本文化というものも固定的なものではなくて、ずっと変化し続けてきたのだろう。それについては、いつも異文化が大きく力として働いていて、それとのかかわりのなかで日本文化というものが形をずっと整えながら……、整えているか

どうかわかりませんが、自己定義をしながら変わってきたんだろう。ただ一方ではひょっとすると変わらないものもあったのではないかな。そんな思いも込めて付けたものです。

今日はそういう話題を扱うのには本当に最適な、いまおそらく望み得る最高のパネリスト、そしてコメンテーターをお招きできたと思っております。あらためてご紹介申し上げたいのですが、今日の発表順ということでご紹介申し上げます。

いちばん私から遠いところにいらっしゃるのが、タイモン・スクリーチ先生、ロンドン大学のアジア・アフリカ研究院の教授でいらっしゃいます。江戸の視覚文化史をご専門になさっています。お隣が王勇先生、浙江工商大学日本文化研究所の所長でいらっしゃいまして、教授でいらっしゃいます。中日の文化交流史のご専門。そしてそのお隣が陳小法先生、同じく浙江工商大学の日本文化研究所の、準教授でいらっしゃいます。ご専門は明のころの中日関係史です。そのお隣が、マーティン・コルカット先生、プリンストン大学の歴史学部の教授でいらっしゃいます。日本史をご専門となさっています。それから、このパネル・ディスカッションから初めてご参加ですが、実は今朝からずっとお話を聞いていただいております法政大学の田中優子先生。社会学部の教授でいらっしゃいます。ご専門は日本の近世文学、近世文化、比較文化。会場みなさんに差し上げております冊子の表紙裏のところをご覧ください。田中先生についても、他の先生方と同じく、ご業績を先生にどうか3点に絞ってくださいとお願いして3点だけにさせていただいております。先ほど申しあげましたような世界とのかかわり、そしてアジアとのかかわりで、日本の文化をとらえるという研究をずっとなさっている先生でいらっしゃいまして、今日のコメンテーターとしては最高のコメンテーターをお招きできたと思っております。

そして今朝ほど来のお話なんですけど、まずスクリーチ先生が英国の東インド会社と日本との関係ということ、ちょっと盲点と言えそうなところをお話しになりました。英国から船で長々とアフリカ、インド、ジャワ、そして日本にやってくる、その間に積荷はどう変わったとか、図像の面から興味深いお話をしてくださいました。

そして王勇先生、倭寇というものについての中国側に残っている図像、そして日本側に残っている図像を比較検討なさってお話をしてくださいました。

そして陳先生、やはり明のころのことですけれども、中国語の漢語の意味、それが日本に入ってきてどう意味が変わったかというようなお話を伺いました。

そしてコルカット先生からは、明治になって久米邦武がアメリカに行って、その当時の教育に大変感心した。将来の日本の手本にもすべきようなものとして、アメリカの教育を見たというようなお話をいただきました。

それで、このパネル・ディスカッションの進め方なんですけど、4人の発表者の方々、たぶん言い足りないことがおありだと思います。あるいはまたこの点を特に強調したいということがおありかと思えます。それについてそれぞれの先生に15分くらいお話をいただいて、そのあとコメンテーターの田中先生からコメントをいただきながら、そして同時にそれぞれの先生に対する質問も出していただいて、その質問を受けてそれぞれの先生方からお答えをいただいて、だんだん話が盛り上がってきたところで、フリー・ディスカッションというようなところにもっていけたらなと思っております。

さっきも「報告の部」の最後に申しましたが、本当にプラトンの『饗宴』のようなシンポジウムになればなと、今日は本当になるんじゃないかと楽しみにしております。それではスクリーチ先生からお話をお願いします。

スクリーチ 今いただいた質問の答えでいいでしょうか。

鳥越 それでも結構です。

スクリーチ 実はいただいた質問が3枚ありまして、ちょうど付け加えるべきことだと思いますので。質問して下さった人の名前書いてないんですけども、ありがとうございます。一つは情報ですが、

間違えたのはわかっていたんですけれども、直す時間がなかったせいで……。バケットの絵をお見せしたときに、『受胎告知』の漢字を間違っています。たぶん見ればすぐわかったと思いますが、僕もわかっていたんですが、ちょっと直す時間がありませんでしたので、失礼しました。

それともう一つはイエズス会、あるいはガイ・フォークスがジェームス一世を暗殺しようとしたという話をしまして、その歴史的な事実があって、コックスというイギリスのカピタンがそのことについて將軍のセクレタリーに話をしたのが、おそらくイエズス会が日本から追い出された原因の一つではないかと言いました。

このいただいた質問は、なぜただの商人のことを將軍家がそんなに大事にしたか、ただのイギリス人から聞いたうわさ話を聞いて、なぜそれを信じてイエズス会を追い出したかという質問です。いい質問ですね。もちろん証拠はありません。ただそういう事実があって、その数年あとでイエズス会が日本から追い出された。一つのイギリス人の言葉で幕府の行動が変わったということはもちろんありませんでしたけれども、日本側でも少しずつ、イエズス会の人々が力を取ろうとしすぎていると考えていた。それとおそらくメキシコからもフィリピンからも情報が入って、別にイギリス人が何も言わなくても、日本側にイエズス会の人をちょっと抑えないといけないという考え方があったと思います。これはただのもう一つの情報だったでしょう。といっても、ただの商人だったかもしれませんが、やっぱりリチャード・コックスというカピタンが長い間、10年間ずっと日本に住んでいて、何回も江戸に行ったんですね。1回目、江戸に行ったときに秀忠の大広間に呼ばれた。彼は廊下に座っていて、「どうぞ入って」と言われて、入らなかったんです。遠慮して、そのまま廊下に座っていたという記録があります。それに徳川幕府が非常に感心したんですね。威張って入ってくるのではなくて、外で遠慮して、遠い国のただの商人でも礼儀正しいと。日本の記録ではないんですけれども、コックスは自分の日記で、私はこうして、そのおかげで僕の幕府に対しての株が非常に上がった、と言っています。

大使がもし日本に来たとすれば、大使の言っている言葉がもっと重視されたかもしれませんが、商人しか来なかったせいで、そういうヨーロッパの情報をわかりたいければ、商人のインフォメーションを聞くしかなかったんです。というようなぐあいです。

それと三つ目の質問は、これもいい質問ですが、絵が日本に来たということを言いましたけれども、日本で何か美術史上の影響があったかどうか、日本の絵画史のなかに影響があったかどうか。それと文学でも、英文学がそのとき日本に入ったかどうか。同じ方の質問ですが、女性、日本の妻、愛人とかそういう人がいちばんイギリス人に親しかったはずですから、そのルートでどういう情報が日本に入ったか、という質問です。

三つの質問を順番に答えようとするれば、日本の美術史上で、正直に言って、今まで影響があったという資料は見つかっていません。何十点が日本に入ったということがあって、その商館がだいたい6カ月ごとに在庫するものをリストアップするんですね。1回やって、次回にリストアップしていないなら、それは売ってしまったという意味です。絵画がリストから出てこなくなったのは売ったという意味です。あるいはプレゼントとしてあげたという可能性もあります。だから日本人がそういう絵をもらった。それ以上の情報は残念ながら、今のところ僕にはありません。もちろん日本の日記とか書簡に、この絵を買った、どうのこうのとか、それが見つかれば、すばらしい資料になりますけれども、ちょっとわかりません。

一つだけ、今ポルトガルの個人蔵になっている屏風なんですけれども、その屏風がわりと典型的な、半分が典型的な南蛮屏風です。3人くらいの、国はもちろんわからないんですが、白人が描かれています。左の半分にちょっと歌舞伎者ばい、娼婦かな、遊郭図屏風に出てきそうな日本人が出てきます。この屏風はですね、もともと一隻二双で、もう一つの屏風があるはずなんですけど、今のところ、その片方しか残っていないです。

これは西洋人と日本人の出会いで、それ以上よくわからないんですけれども、左側にカタカナでリカルドと書いてあります。コックスのファースト・ネームはリチャードですから、コックスの肖像画ではないかと思います。もちろんリカルドというだけですから、リチャードという人間、あるいはポルトガル人でリカルドという人がほかにもいたんですから、その絵が本当にコックスの肖像かどうかわかりませんが、コックスは10年間、日本に滞在しましたし、日本人の妻がいて、それに彼は歌舞伎者と遊ぶのが大好きでした。彼の日記を読むと、何回も「歌舞伎を呼んで宴会をした」という記録があります。

歌舞伎者はもちろん本当の今で言う歌舞伎の演技者ではなくて、踊り子といいますか、半分娼婦で、エンターテイナーみたいな役割をする女性です。だからそういうような屏風がもしコックスの肖像画であるとして、直接ニューイヤーズ・ギフト号が持ってきた貨物と関係があるかどうかかわからないのですが、とにかく、ちょっとだけこういうような交流があったようです。

それともう一つ、僕は今日はイギリスからのものしか話題にしませんでしたが、日本からイギリスへのものもあります。二つのグループのものです。一つは一隻目に日本に入るクロブ号ですね。1623年に日本に入った。それにはやっぱり大使も、イギリスから的大使も乗っていたんです。その大使が江戸まで行って、秀忠にプレゼントをあげました。ウールです。そのあと駿府に行って、隠居生活をする徳川家康にもプレゼントをあげて、それは望遠鏡でした。それと時計、あとは布。家康からも、海外から来たら当然何かもらう。彼が何をもらったかという、ジェームス一世に差し上げるためのプレゼントはやっぱり屏風でした。十隻の屏風です。

おもしろいことに、家康が言ったのは、「この駿府にイギリス国王にふさわしい屏風がありませんので、平戸への帰りに京都に寄って受け取ってください。」コックスは京都に行って、屏風がまだできあがっていないので、10日間くらい待っていて、やっと二条城に呼ばれて、そのジェームス一世のための屏風を受け取るんです。残念ながら画家の名前は出てきませんが、狩野派の人が作ったかもしれません。日本側の記録にもその記述が出てきます。金箔屏風と書いてあります。画題は書いてないんです。

そういう屏風がいよいよクロブ号に載せられ、ロンドンに無事に船が着いて、ジェームス一世にそのプレゼントをあげることになるんです。出入商人のサー・トマス・スミスは、国王へのプレゼントだから、チェックするんです。彼は家康からの屏風を見て、半分これは国王にふさわしいと決めて、半分がふさわしくないと。どういう基準で彼が決めたのかわかりませんが、半分ジェームス一世にあげて、ジェームス一世は大喜びした。ジェームス一世は地理学をとて熱心に勉強した人で、だいたいコックスが日本から戻ってきたら、必ず会いたいと言いました。結局コックスはイギリスに帰る途中で死んでしまいますので、対面することはできませんでしたけれども、ジェームスはその屏風を大事にしたそうです。

ただ残念ながら、あとで、今のバッキンガム宮殿ですけれども、当時のホワイトホール宮殿の火事があって、消失してしまっ、そのなかにあった絵画も残っていません。ただし、ジェームスにふさわしくない屏風を東インド会社がロンドンで競売しました。買い手の名前が全部リストアップして残っています。値段も載っています。だいたい高くは10ポンド、安くは5ポンドくらい。屏風はセットだとイギリスでも考えていて、それぞれ、だいたい5ポンドから10ポンド、題名も書いてあります。題名はイギリス人が勝手に作った題名ですから、花鳥画、軍馬図、鷹図と風景画くらいです。たぶん国王のももらったものがたくさんあったので、途中で傷まなかったものとか。それでも、たくましそうな国王に花の絵をあげないんですね、西洋では。だからそういうものはジェームズにあげなくて、売ってしまった。とにかくけっこういい値段になったんです、競売で。そういうものがただの遠くからの変なものではなくて、美術品、鑑賞する価値のあるものの値段になりますから、アートとしてのグループに

入っていた。それが一つ。

もう一つは、さっきも言いましたね、イギリス大使が日本に滞在中に、ヴェヌスの絵が彼の個室にあった、平戸の人がそれを見て感動していた。その同じ大使です。彼は平戸に滞在するうちに、春画を買いました。「ラシヴィアス・ブックス・アンド・ピクチャーズ」を買った。それは「春画」，「枕絵」の意味なんです。彼がイギリスに帰国して、ロンドンに住まいがなかったせいで、日本から持ってきた荷物は全部サー・トマス・スミスの家に預かったんです。大使はあちこちで友だちに会ったり、自分の密貿易の焼きのものを売ったり、ロンドンのあちこちの商人が集まるところに行つて春画を見せたんです。友達に見せて、売って、儲けたかもしれません。

そのことが結局サー・トマス・スミスの耳に入つて、そういういわゆる汚い卑猥物が自分の家にあるということがわかつていて、すごく怒つていて、君がそういう人なら、あなたのキャリアはこれで終わりです。その大使のセイリスが、これで彼のキャリアの終わりになったら困りますから、結局全部渡してしまうんです。スミスは、ロンドンのいわゆる株取引所みたいなところのコートヤード〔＝中庭〕のなかで焚き火をして全部焼くんです。こういう卑猥物は東インド会社は一切取り扱わない。残念ながらまったく残っていない。

残っているとすれば、それはいちばん古い春画になります。中世の日本の春画がちょびつと残っていますけれども、江戸初期のものはほとんど残っていないです。だいたい師宣以降です。それは残念です。ただし焼かれてしまう前にセイリスがあちこち見せていたんですから、たぶん人にあげたりしたかもしれません。だからどこかに残っている可能性があります。

女性のルートは非常に大事だと思います。この時代だけではなくて、出島のオランダ商館の時代もそうです。みんな日本のガールフレンドあるいは妻、ちゃんとした結婚をしていないでしょうけれども、そういう関係を結びます。オランダの出島のときになると日本側の女性はみんな娼婦、遊女ですが、この平戸商館の時代はそうではなくて、普通の市民の女性です。だからそのルートで必ずそういうことがありました。そういうイギリスの書簡とか日記を読むと彼女にこういうプレゼントをあげたとか、こういうものをもらったとか、そういうような交換があります。ときどき女友達に絵をあげたという記録が残っています。題名は書いてないんですけれども、そういうような事実があった。

鳥越 それでは王勇先生から。

王 内容の補足よりももっとメインテーマに合わせて言いたいことがございます。文化交流について故大庭脩先生は、文化は人と物によって運ばれるものだと言っておられます。それは一般論としては間違いございませんが、しかし地域によって、あるいは時代によって、一律には言えないところがございます。特に日本の場合は海に囲まれているし、人間の往来を極端に制限されている地理的な条件、あるいは日本の文化の伝統性などによりまして、日本と中国だけではなく、諸外国との交流を見ますと、人間に頼るところが非常に少ない。つまり人間よりも、物によって文化の流通、流入が行われるという特徴を指摘することができると思います。

私の専門は遣唐使時代です。日本の国際交流と言えば遣唐使、また辞書を調べても、遣唐使と言えば日本の使節ということになります。しかしよく調べますと、唐の時代、中国と交流する国家、あるいは民族は70くらいありまして、日本はそのなかの一つ、あまり目立たない一つなんです。中国と朝鮮半島はほぼ毎年1回、使節の往来がありますし、またペルシャとかアラビアなどとは少なくとも3年に1回の頻度。日本からは20年に1回しか遣唐使が出されていません。20年に1回というのは、人間による文化の伝承は不可能に近い時間的な隔たりです。

特に日本の留学生、正しくは「ルガクショウ」と言いますが、1回留学しますとなかなか帰国できませんでした。留学生という言葉自体、日本人が発明したんです。非常に悲しいイメージのつきまとう言葉です。(笑)というのは、帰れない学生、という意味なんです。「還学生」、つまり帰れる学生は幸

いです。同じ船で帰る。それで帰れない人は、泣きながらとどまって勉強する。20年に1回ですと40歳、平均寿命がだいたい40歳。それに、私は冗談で言うんですが、帰っても使い物にならない。年金生活を送らなければならない。(笑)1回、帰国のチャンスを逃したら40年です。だいたい私たちが今知っている記録で、19年以上帰れない人は日本語をしゃべれなくなる。こういう例が2例あります。遣唐使1例(円載)と、五代の、遣唐使のあとのころ(超会)、日本語をしゃべれなくなった。帰っても使い物にならない。こういうことを考えますと、学生を送っても、そういう学生が文化を伝えるというのはなかなかできない。だから日本ではこういう状況を考えますと、人間よりも、物による交流、それが特徴の一つだと思います。

物についても、また日本的な特徴が見い出されます。たとえばいつも私たちは文化交流といえばシルクロードといいます。中国と西側諸国の交流はやはり目に見えるもの、物質文明の交流がメインだったんですけれども、日本と外国との交流、特に前近代までに限ってみれば、江戸時代では商船が多くなるんですけれども、江戸時代以前は中国に行っても、商品を求めないですね。

中国の唐代の歴史書、『旧唐書』・『新唐書』というこの時代の歴史書としていちばん権威のある本を見ますと、日本人は唐王朝からもらったシルク・陶磁器を全部中国で売ってしまうんです。売って何を求めるかといいますと、「本を買って海に浮かんで帰る」と書いてあります。常識では考えられないことです。当時、中国と交流する国々からは交易使という使節が、私が調べた資料でいちばん頻繁なときには特に西側から年間十数回、平均月に1回、使節が来るんです。中国側には、外国に対して何年に1回来る、という規定があるんです。朝鮮半島は、歳貢といって毎年来なければならない。日本については、1回目の遣唐使のときに、日本は遠いから毎年来なくてもいいと。実際は20年になったんです。西側諸国はシルクの商人なのに、使節だと偽って中国に来るんです。目的は商売です。中国も知っていて、ときどき退けるんです。

こう考えますと、特に日本側と西側諸国では、中国との交流の目的が違う。求めるものが違う。同じく交流といっても、シルクとか陶磁器とか、そういうものではなくて、むしろ遣唐使時代に限ってみれば、シルクの交流は日本側が中国に大量に輸出しているんです。日本の遣唐使が中国へ持っていくお金というのは『延喜式』に書かれています。朝廷からもらう資金は全部シルクと布類なんです。ほかのものはほとんどないんです。

また円仁の日記などを読みますと、実際中国でものを買うときには布とシルクで買うんです。この本を買いたいとなると、布何尺か測って切る。だから日本が中国にシルクを輸出しているんです。日本は、そういう中国とか朝鮮半島との交流で求めるものは書物関係のものが多いです。それが他の外国と違うところですよ。

そういう書物を、しかも選択的に選ぶ。中国から輸入した本を中国人と同じように読み、四書、五経とか同じ本を読み、また日本的な理解を示して、ときどき誤解しているんです。中国の本を誤解したり、あるいは日本的な解釈をして、独自の知識体系ができたんです。それが非常に重要です。だから日本的な儒教にしても、道教にしても、仏教にしても中国そのままのものではないです。中国人から教わったものではないです。中国の本から教わったんです。本の理解は人によって違うから、日本的な理解で成り立った知識体系があるわけです。

その知識体系は日本人のなかで継承されているんです。遣唐使時代からずっと続くわけです。日本の「六国史」などを読みますと、遣唐使が帰るために「消息」を持ち帰る。「唐消息」という。中国の新しい情報を持ち帰る。朝廷に報告する。新しい情報に非常に敏感、あるいは古いものの蓄積があるから何が新しいかよくわかっている。それはびっくりするほどです。たとえば中国の皇帝の息子が何人いた、そのなかで1人は足に障害がある。そういう情報は中国の史料にもない。しかし日本人は詳細に把握しているんです。それがおそらく本日の本題にかかわる時代で言えば、鎖国時代の風説書がそれに当り、

外国の情報には非常に敏感なわけです。

独自の知識体系を築いた、しかも蓄積し継承したうえで外国の新しい知識や新しい情報に敏感に反応して、自分に合うものを摂取してきた。その摂取したものを日本的な知識体系に組み合わせるというのが、日本文化あるいは異文化とのかかわりにおいての日本文化の顕著な特徴ではないかと思います。

私への質問が一つあります。古い友人の鈴木先生〔＝鈴木陽一神奈川大学教授〕が、私が寂しくならないように質問をしてくださいました。図像と現実の関係をどう理解すべきか。特に明代の中国で日本人をリアルにとらえることができたのでしょうか、あるいは何かパターンで表現していたのでしょうか……。非常に鋭い質問ですね。要するに一つは絵画的な写実性です。もう一つは、中国の日本知識はパターンのに継承しているのか、あるいは独創的なものが明代にあったのか、という二つの考えがあったことと思います。

中国の絵画は写実的なのか抽象的なものなのか、そういうところは私は専門外でわかりませんが、しかし中国の日本知識については、中国にとって日本は基本的にはどう認識されていたかは、一つの言葉で十分に表現できると思います。「絶域」と表現されています。「絶域」というのは、要するに人間が知る限りでいちばん遠いところ、人間がほとんど行かない、行ったら帰れないところ。よく言われることですが、遣唐使時代、中国人は日本に行きたがらなかった。実は中国の本を読みますと、日本に行けば、帰る保障がゼロに近いから、そういうのです。100 人行って 1 人生きて帰れば奇跡だ。「絶域」というのは、要するに認知範囲外。そうすると日本に関する知識はほとんど古い知識の継承。これは鈴木先生がおっしゃるとおり、ずっと継承してきました。

しかし、ときには日本が重要になる。明代、強い日本が現れてきたんですね。当時は北には騎馬民族、南には倭寇、要するに中国の国家安全を脅かす重要な存在になってきました。そのとき、明代には中国歴史上、初めての日本研究のブームが巻き起こったんです。大量の著作が表れてきます。そういう明代の日本研究の著作の解題をされたのは陳さんなんです。インターネットで公開されていますが、陳さんが扱ったのは何冊くらいか、300 冊くらいあったかな、それくらいの研究書の解題をされた。これは日本、中国のみならず英語サイトでも数多くダウンロードされている。

そのなかで、日本を写実的にまじめに、等身大の日本を見なければならぬ時期が来たわけです。研究者のなかでは、日本語の勉強、カタカナ、ひらがなの勉強ではなくて、和歌の翻訳もするし、清代よりも精密な日本地図が書けたのが明代なんです。海防、軍事的な需要から日本の地図を日本の捕虜から聞き出す。日本に行った人、経験者から日本の情報を聞き出す。そういう時代に描いた図ですから、未曾有の正確さだった。ところが清代、日本との関係が緩和されると、また日本への考え方があいまいになるんです。日本は三つの島からなっている。三つの島の名前は蓬莱島とか、方壺とか、瀛州とか、こういうあいまいな知識が来るんですが、明代だけは軍事的な需要から日本の知識がかなり正確に伝えられているわけで、その背景下で描かれた倭寇図ですから、非常に精度が高いと思います。

鳥越 それでは陳先生、続けてお願いできますでしょうか。

陳 1 カ月ほど前に鳥越先生から日本文化を貫流するものについて話してくださいと提案をいただいたから、ずっと考えてきました。私の専攻は明代の中日関係史ですから、結論に触れる前に、まず明時代の中日交流史で起こった三つの代表的な文化現象を思いつきました。一つ目は渡唐天神像のことです。もし皆さんが室町時代の絵画に興味を持つものなら、必ず渡唐天神像に遭遇したことがあるはずだと思います。渡唐天神像の描いたものは、天神、つまり平安時代の文学者、菅原道真が海を渡って中国禅僧界の大立者、無準師範という禅僧に参禅したということです。

そもそものは荒唐無稽な話ですけども、室町時代の禅林でかなり流行っていたそうです。そしてこの話をもとに 14 世紀ごろ絵画化した画像がすでに出ていましたが、画像はほとんど同じパターンで、唐服をまとった隠士風の人物が頭巾をかぶって、この頭巾は東坡巾ではなく、道士のかぶった帽子みたい

な頭巾ですね。右手あるいは左手に必ずひと折の梅の枝を持っています。そして肩から斜めに頭陀袋のようなものをかけています。

今、渡唐天神像の蔵品は日本では100点を超えたと報告がありますが、ほとんど同じパターンです。若干の違いが見られますが、つまりこの梅の枝は左か、あるいは右か、そして頭陀袋は左か右かの差です。さらに画像のうえに、当時の禅僧によって書かれた賛辞がかならずあります。さっき申し上げた策彦周良も、何枚も渡唐天神の賛辞を残しています。

この画像の画題について、いったいどこから来たかを知ろうとずっと昔から試みていましたが、一つの説として、日本のお坊さんが生み出した絵空事だとずっと記載されていました。つまり想像したものだというのです。中日関係史に携わっている多くの学者はこれを疑問に思い始めています。なぜかと言えば、中国と盛んに交流した時代に、中国ではもしかして日本の渡唐天神像のようなものは、記載にあるのではないかと疑問に思いました。

実際のところ、中国の『続伝灯録』という書物に、よく似ている話が記録されています。そのだいたいの意味は、菅原道真の参禅していた師匠、先生の無準師範が、ある夜、偉人から植物の茅を授かったのを夢で見ました。翌日、寧波清涼寺というお寺から禅師の入院を懇願する便りがきました。入院して見たところ、伽藍に夢で見た天神がいるんです。その衣装、そして名前、まったく同じです。

この資料を見ると、日本の渡唐天神像と少なくとも二つのところが似ていると思います。一つ目は夢、キーワードはこの夢です。幻想と現実を結びつけるのは中国でも日本でも夢です。夢あればこそ、菅原道真が海を渡って徑山の無準師範に参禅することができたと思います。

二つ目は茅、つまり無準師範が夢で見た植物、茅。中国では茅と菅原の菅はときどきは同じ植物を指しています。ですから、以上の資料から分析すれば、渡唐天神の説話は、もともとは中国での無準師範と天神の話をもとに、渡唐した日本の禅僧によって固有名詞の菅原道真に再生されたものではないかと思えます。

二つ目の文化現象は五山文学。先ほど王勇先生のお話のなかにもちょっとありましたが、五山文学について、私は二点に分けて話したいと思います。一点は文体です。さっき私の発表でもちょっと触れましたが、この文体は中国文に似ていますが、完全な漢文ではなさそうで、日本のものがたくさん入っています。ですから、私はこれはむしろ一つの再生した中間文体ではないかと思っています。今普通の中国人は、もし日本語の背景がなければ、なかなか読みにくいですね、わかりにくいと思います。

五山文学についてもう一点は、誤読のことで。私は禅僧の日記を何冊か読んだことがあります。この日記のなかに、中国の書物を読んだ感想文がたくさん書いてあります。もちろん作者だけではなくて、友だちの感想文も自分の日記に入れています。この感想文を見て、中国人の立場から見れば、たくさん誤読あるいは間違っているのではないかと思いました。しかし、広い視野に立つてものを考えると、その違ったところは、原文を超越したのではないかと思えます。あるいは、日本人は自分の主体性を発揮しながら中国の書物を理解しているのではないかと思えます。

私のさっきの発表に出ていた「買臣」ですが、中国では買臣という人物のすばらしい精神に絞っていますが、日本に伝わってからは、この買臣という人物の背負っている柴に、物質に着眼してしまいます。この差を生む原因はただ間違いという一言で終わりそうもないと思います。

そして三つの文化現象は日本の趣味。日本のものが、明の時代にたくさん中国に輸出されて、だんだん中国の文人の一つの愛着品となってしまいます。日本が明国から持ち帰った物にいちばん多いのは銅銭ですね、お金。次は書物と生糸、そして陶磁器などもあります。また中国に輸出していたものは公と私に分けています。朝廷には主に硫黄、そして馬、これが中国に輸出した主なもの。そして個人向けの貿易品あるいは交易品は、主に工芸品の太刀、扇、漆器、螺鈿などです。もちろん妙なものもあります。たとえば春画、日本で作った春画、これは中国の一般の市場にも流れ込んでいたらしい。沈徳符

という明人が日本の春画を1枚所蔵して、国産よりずっといいと絶賛しています。

これを見てわかりますが、明代の中日文化交流は、ただ中国から一方的に日本へ流れ込むのではなくて、まさしく循環、環流しています。これこそ文化交流の持つ本当の意味だと思います。以上の三つの文化現象をざっと見たら、あまり関係がなさそうですが、実は共通性らしいものがあります。それは再生化です。中国の有名な作家、日本文化にも造詣が深い魯迅のお弟さん、周作人ですが、彼は、なぜ日本文化が再生できるのか、それは日本の国民性に何か関係があると言ったんです。彼はこのように分析しています、日本人の特性は二つあります、一つは現世思想、これは中国人にもあるものです。二つは美の愛好、美の愛好は中国人が欠乏しているものです。中国では、美を愛する心はだれも持っているという言い方がありますが、周作人の言う、日本人のこの美の愛好はたぶん普通の美意識の美ではなくて、物事を美しくする心だと私はそう理解しています。言い換えれば日本人は一方的に外来思想、あるいは異文化を受けてばかりいるのではなくて、やはり自分の主体性を発揮しながら外来文化を再生しているのではないかと思います。

現象学の有名なドイツ学者、フッサールの言葉を借用すれば、これは相互主体性あるいは間主観性だと言えます。この言葉がふさわしいかどうか、あるいは正しいかどうかわかりませんが、これが私の考えです。以上です。

鳥越 それではコルカット先生、お願いします。

コルカット いただいた質問から出発しましょうか。質問は、久米邦武と文部大臣、森有礼はどのような関係だったのでしょうか。久米と森の関係ですね……。久米と使節団がワシントンに着いた晩は1872年の2月29日だったのです。そしてボルティモアから汽車でワシントンに入って、大雪になった。もう電報でみんなわかっていたんですけれども、使節団はその晩にワシントンに着くはずでした。みんな一晩待っていたんです。アメリカ政府に頼まれた軍人で、そこからの案内の責任を持つマイラスという方はその一人だったんです。ほかの方たち、若い留学生、アマーストとかラットガーズとか、それぞれの大学から若い日本人学生がワシントンに出て使節団を待っていたんです。そのグループに森有礼もいました。

そのときに森は25歳だったんです。彼は1847年生まれで、もう20歳にならないうちに1865年、幕末ですね、イギリスへ行って、イギリスで英語と物理学と数学とかいろいろ勉強して、明治維新あたり、1868年、日本へ戻ってきて、明治政府の指導者たちとうまくいって、明治の初めを日本で過ごして、すぐそのあとワシントンへ行かされた。森有礼はまだ30歳にはなっていないけれども、ワシントンでの日本の代表でした。彼は英語が得意で、イギリスの経験もあったし、非常に明るい人で、活発で、ワシントンのブラウン大統領の外交の面倒を見たハミルトン・フィッシュと非常にうまくいったんです。フィッシュは年上で、アメリカの貴族的な家族の出身で、この若い日本人が大好きで、自分を森有礼の外交のうへのメンター〔＝指導者〕として扱っていたらしいです。

それで森は若いくせにワシントンでかなり影響力を持っていたんです。そして使節団についての情報がどんどん入ってきた、これからどうするとか。森はフィッシュに、日本の明治天皇を代表して大事なグループが来ますと、これは大切ですよと一生懸命言って、フィッシュもおそらくブラウン大統領に、これからの使節団は前のものとは違う、と言った。この使節団が非常に大切、カリフォルニアの将来の開発、アメリカのアジアとの関係のためには非常に大切という認識を、森は一生懸命働いて、高めようとしたと思います。アメリカ人もそのとおりだと感じたと思います。

それで、使節団がワシントンに入る前にアメリカの議会ではフィッシュとフランスの力を通して、使節団がワシントンに着くころに、だいたい5万ドルくらいの旅費をアメリカ政府が出すようにしたんです。もしかしたらナイアガラとかどこかのニュー・イングランドの旅に出かけたいだろうから、アメリカ政府はそれをカバーするということで、森も裏でそれをやっただけです。

そうしてワシントンに入って、はじめのほうは、かなり森と木戸と岩倉との関係もよかったらしいですけれども、だんだん冷たくなっていった。なぜかという、森は伊藤博文と一緒に話をし、不平等条約の話を真剣にやりましょうかと持ち出した。木戸は、——大久保もそうだったと思いますけれども——なるべく不平等条約の問題を大きくしないほうがいいのではないかという感覚を持っていた。それで木戸が森に対して少し批判的になった。

久米はおそらく木戸と同じような意見か、それに近いような意見を持つようになったと私は思うんです。『米欧回覧実記』を読みますと、森の名前は那一カ所、ワシントンについた晩の雪のなかの歓迎会のことしか書いてないんです。あとの久米と森の関係は、私は資料を読んでいませんから、よくわかりませんが、もしかしたら久米は木戸の影響を受けたのかもしれない。森が西洋の文化に対してちょっと弱い、日本語を捨てて英語にするんだとか、西洋の文明をどんどん日本に入れて、日本の文化を捨てるという立場なのについて、使節団のなかのある方たちはあまり賛成できなかった。木戸はその一人だと思います。ですから、もしかしたら、久米は木戸に影響されて、森に対してちょっと敬遠的な気持ちを持つようになったかと私は想像できます。

けれども、それを確かめるためには、日本へ森と使節団と久米とみんな帰ってきてからあとの、そこからの関係を調べなければなりません。久米の立場からは、『実記』だけではなくて、『90年の回顧録』という彼の個人的な日記、思い出、90年間の久米の思い出もあります。そういうものを見ないと、久米と森の関係はよくわからないと思いますけれども、『実記』段階だけでいえば、ワシントンで会ったところで、はじめのほうはよく付き合って、だんだん森に対してちょっと気をつけなければならないという気持ちが出てきたと私は思います。

陳 大変失礼しますが、私も鈴木先生から質問をいただいております。質問は、禅宗あるいは仏教界、さらには江戸では業語が流行していた。先生の挙げられた例のすべて業語と思われるので、こういう言い回し自体が中国から来たものなのか、それとも両方の業語に漢文の素養が使われたのだろうか、というものです。

私の挙げた漢語の変容あるいは変遷のなかのほとんどは業語、あるいは中国では隠語とも言います。隠語は最初必ずあるグループのなかで使われて、そしてだんだん外へ広がって、一般人にも使われるようになるのが普通のルートなんです。たとえば発表のなかにもありますが、「東坡」や「煙景」ですね。今『広辞苑』にも収録されています。最初は五山禅僧だけが、特殊な人間だけが使っていましたが。もちろん、これは特に中国起源の漢語ですから、ある程度の中国語能力がなければ、これはできないと思います。つまり先生のおっしゃるとおり、これには漢文の素養を必ず備えなければならないと思います。先生、これでよろしいでしょうか。

鳥越 ありがとうございます。それでは田中先生のコメントと各パネリストに質問をいただけますでしょうか。

田中 今日は朝から聞かせていただいて、それぞれの先生方が非常に刺激的な、それからこれからもっと深く議論をしていきたいテーマをお持ちでした。

まず私が今このテーマについて何を考えているのかということをも最初に申し上げます。法政大学に国際日本学研究所というのがあります。国際日本学インスティテュートという大学院もできています。これはどういう目的でつくられたかといいますと、今まで日本文学や日本の歴史、つまり日本のさまざまな事柄が各分野で学問として成立していたわけですが、しかしそれだけではない分野がたくさん出てきました。たとえば日本文学科で漫画を研究できるかとか、歴史といいますが、従来の歴史研究だけではなく、さらに国際的な歴史研究が必要になってきたりして、そういう動きのなかでやはり国際日本学というものが必要になってきました。

「国際日本学」という大変なあいまいな言葉ですけれども、これをどのようなものに考え、またどう

いうふうに育てていくのかということがこれからの課題だと思います。今日のシンポジウムはまさにそのような国際環境のなかで日本文化をどのようにとらえるというテーマだと思っています。

私が「国際日本学」という言葉のなかで特に今つくりつつあるのは「国際江戸学」という考え方です。「江戸学」といったときに、二つの意味がありまして、一つは江戸＝東京の都市としての江戸という意味、それからもう一つは江戸時代の学問、江戸時代全般についての学問という意味で使われていますが、私は江戸時代全般についての学問という意味で使っています。そういう意味で、江戸時代を国際環境のなかでとらえるにはどのような方法が必要かということを考えてみます。

一つ非常に重要なことは「鎖国」という言葉をこれ以上使い続けるべきかどうかという問題があると思います。江戸時代には「鎖国法」という法令は存在しません。ですから、これを今日本史の教科書などではどのように切り抜けているかといいますと、「いわゆる鎖国」という言葉を使っています。つまり、「鎖国」という言葉は本来存在しないという前提になって、「いわゆる」という言葉を付けるようになってきました。

なぜ私たちが「鎖国令」というものがあるかのように思ってしまうのでしょうか。教育のなかでその概念がつくられてきたわけですが、先ほどの久米邦武の文章のなかでもたしかに「西洋人は外交を楽しみ、東洋人はこれをはばかり。これは鎖国の虜囚のみにあらず」、という言葉が出てきましたから、もちろん明治の文献のなかでも「鎖国」という言葉はあるんです。これはなぜかといいますと、19世紀になってから、志筑忠雄という人がドイツ人のケンペルの文章を翻訳するなかで「鎖国」という翻訳語を使ったものですから、それ以来、たまに知識人が使うことがあったということがあげられます。当然ですが、開国という状況になったときに、「開国」の対立概念としての「鎖国」という言葉を使わざるを得なくなる。これはよくわかる。ですから、明治以降には使うようになります。

そうしますと、江戸時代には「鎖国令」というのはなかったという前提で見なければならぬわけですね。世界状況のなかで、では江戸時代はどういう時代だったのか。「いわゆる鎖国」というふうに名付けられるのは実際何のことかといいますと、ポルトガル船の寄港禁止令、これは段階的に出されていきます。長崎に対して発布されます。それから日本人の渡航禁止令が出る。これも段階的に出されています。合計五つくらいの法令が出されていまして、そのなかで「鎖国」という言葉は一度も使われていないのです。しかも、それは長崎にだけ発令されていますので、ほかの関係のない藩はほとんどこれについて知らない。あまり知る必要もないという、そういう状況でした。

そのようなことから、私たちはまず「鎖国」という言葉を頭の中から外さなければいけない。外して実際のところをきちっと見るということが必要になってきます。いわゆる「鎖国令」はいつごろ作られたかと言いますと、ポルトガル船の寄港禁止令と、日本人の渡航禁止令が出されたのは1630年代に集中しています。この1630年代から1640年に江戸時代らしい時代というものが成立してくるわけですね。この江戸時代らしい時代というのは何かといいますと、江戸時代的な秩序、中世とは違う秩序と価値観がこのあたりで成立してくるわけです。

システムとしていいますと、外交システムが完成する。「鎖国」が完成するのではないんです。この外交システムのなかには、朝鮮通信使のシステムや琉球使節のシステム、それからオランダ商館長一行の江戸参府のシステムなども入りますし、それと非常によく似た参勤交代が入ります。参勤交代制度と外国人との付き合いとはほとんど同じようなものだと言っていると思いますが、全体としてこれが外交システムと言えらると思います。

このようなことを行なうと、それまでの内戦状態を終結させるわけです。内戦状態を終結させるとともに、内戦の種になるようなことを取り払っていくということが政策として行われるんですが、そこから自然に出てくる事柄というのも、結果としてありました。その一つが内需の拡大、つまり国内生産が非常に発達してくるということと、それから、国内で需要と供給のバランスが取れるようになって

てくるということ。それから江戸という都市に人口が集中してくる。これは参勤交代の作用です。江戸に人口が集中してくるために、世界でいちばん都市人口が多くなってしまった。

世界でいちばん都市人口の多い都市というのはどういう都市であるのかという一つのモデルケースができてくるということです。非常に危険ですよ。都市人口が多いということで、いろいろな危険性を含んでいるわけですが、それをどのように切り抜けていくかというモデルケースができてくる。

ではどのように、国産の素材でものをつくる国に育っていったのか、そのことを考えるときに、さっき言いました国際環境というものを同時に考えないと解けない。

たとえば、典型的に江戸時代の産業と言っているものは、綿花栽培、綿布なんです。これは江戸時代に国産化が完了して、江戸時代中ずっと綿花栽培から綿の生産をしていて、明治になった途端に貿易自由化したためになくなってしまうんです。綿を織るということ自体は残ります。でも、綿花栽培はやっていけない。綿花栽培から商品まですべてのプロセスを行っていたのは江戸時代だけだということです。このようなものを見ていくと、一つひとつ江戸時代に国産化していった、経済を支えていたものを見ていくだけで、国際環境との関係がわかってくる。

今日は私の講演の日ではありませんので、これ以上踏み込んでお話ししませんが、基本的な考え方として、そのように、つまり国際環境のなかで見ていきたいと思います。それからもう一つは、今は産業の話をしましたが、江戸時代がなぜできたのかということと、江戸時代はなぜ崩壊したのか、つまりなくなったのか。このことも、国の中だけ見ていたのでは解けない課題なんです。これは国際環境のなかで見れば比較的わかりやすい。今日は、なぜできたのかとか、なぜなくなったのかというこの二つにかかわるお話を私はたくさん聞いたような気がいたします。

そこでお一人ずつの話に入っていきたいと思います。スクリーチさんは私が国際環境のなかで考えなければならぬと考えるようになっていったそのプロセスに非常に大きな影響を与えてくださっています。古い友人です。それからイギリスを中心としたヨーロッパのものが、まさにものが江戸文化のなかに入ってきて、江戸文化をどのように変えていったかということを非常に鮮明に具体的に見せてくださっています。ずっとスクリーチさんの仕事はそういうお仕事です。非常に多くの日本人がそれに影響を受けました。私もその一人です。

今日のお話もその一つだったと思うんですが、今日はさらにさまざまなことを考えさせられました。たとえばイエズス会の問題です。イエズス会がイギリスから追い出された。これが国王を暗殺しようとしたということにあって、推測ではあるけれども、その情報が日本の政策に影響を与えたのではないかということでした。私はそれを聞いたときに、イエズス会問題は、日本がいわゆる鎖国をしたという話と結びつけるのではなくて、イエズス会に対して全世界それぞれの国がどういう態度を取ったかという、そういう見方をしたほうがおもしろいのではないかと思います。

イギリスもイエズス会を追い出そうとした。日本もイエズス会を追い出そうとした。この二つが同じになりますね。これを「鎖国」という言葉で説明してしまうと台無しになる、つまりそういう比較的な見方ができなくなる。ほかのところもちろんイエズス会を追い出そうとしたとか、イエズス会を受け入れたとか、受け入れたところと追い出そうとしたところと、いろいろなところがあつたはずなんです。イエズス会というのはまさに大航海時代のシンボルでした。布教という目的で全世界に出ていったイエズス会が、それぞれの世界でどのように追い出され、拒否され、または受け入れられ、憎まれ、愛され……、またイエズス会から傷つけられた人もたくさんいるはずで、それから助けられた人もたくさんいるはずで……。どういうふうな経過をたどったか、そのこと自体が非常に重要だと思いました。

日本のことで言いますと、先ほどはもう17世紀に入って、江戸時代が始まってからのことをスクリーチさんは話してくださいましたが、現実にはイエズス会との戦いは秀吉の時代からありました。長崎

をイエズス会がもう手に入れていました。ご存じのようにキリシタン大名という人たちが増えていくプロセスというのは、つまりイエズス会が日本を制圧していくプロセスです。大名ですから、領地を持っています。年貢を取っています。そうすると、大名が自分の土地をイエズス会に寄進してしまったら、それはすべてイエズス会のものになる。そうやってイエズス会が領地を広げていったら、日本はイエズス会のものになります。こういう筋道があったわけですから、秀吉の九州制圧というのは、そういう意味でなされています。長崎を奪還するわけです。

時代は江戸時代という時代に変わりますが、——イエズス会の問題というのはカトリックの問題と言ってもいいと思いますけれども——、日本のカトリックの問題ということで言えば、問題としてはずっと江戸時代まで残って、天草の乱までいくわけです。そうすると、弾圧のことも重要です。なぜ弾圧したのか、そして天草の乱が起こったのか。これも大変大事なことです。天草の乱は農民一揆の側から見なければならぬ問題ですから。これはこれで大事なんです、もう一つ見なければならぬのは、やはり世界が……、ここにイエズス会の方がいらっしゃったら申し訳ないんですが、世界がいろいろな意味でイエズス会から迷惑を受けているというその事実はあったと思うんです。これは世界植民地化ということの一つの事例になったわけです。そういう世界状況のなかでの日本の態度というふうにして見なければならぬ。これがポルトガル船寄港禁止令、それからスペインとの国交断絶ということを行なった桃山時代と江戸時代の決断の理由だと思います。

もちろんイギリス人からいろいろ聞いたところがあると思います。オランダ人ももちろんいろいろ言っているわけなんです、イエズス会やカトリックについて。そういうことの積み重ねが、結果として、江戸時代体制というものを決定した。私はそういうふうを考えました。

それからもう一つは、イギリス側の事情。今日の4人の方のお話は全部、日本側の事情とイギリス側、または中国側、アメリカ側の事情をすべて並べて話して下さった、そういうおもしろさがあったんですが、イギリス側の事情としては、イギリス人であるということ売り込みの一つの方法にしていた。これは現代の問題でもあるんですが、ナショナリストとしての商人というのはなぜ存在しているのかというのは、大変気になる問題です。おもしろいですよね。商業はグローバリズムになっているのに、しかし売り込む商人はなぜかみんなナショナリストになるんです。

こういう不思議なねじれというか、国という単位と、商業という単位の合体、あるいは切り離すほうが便利だというときは、簡単に切り離してしまう、ナショナリストではなくなる。ナショナリストになったりならなかったりというのを、おそらくこのあたりから自由自在にコントロールできるようになっているだろう。つまり真剣なナショナリストではないんです。売り込むためのナショナリストなんです。だから商品が売れるんだったらいつでもナショナリストになるし、商品が売れるんだたらいつでもナショナリストではなくなるというような人たちが、私はこの時代にすでに出てきていると思います。それがイギリス東インド会社という会社です。オランダ東インド会社という会社です。会社と日本は取引をしているのであって、国と取引ををしていたのではないんです。

これも勘違いですよ。日蘭国交400年というのが数年前にありました。日蘭でも日英でもない。会社というだけです。グローバリズムの時代に入っている商人、そういう現代の問題ともかかわる非常におもしろい話題でした。

それから物品リスト、この船に乗っているものが何であったかということと、それが届いたか届かなかったか。リストにはあるけれども、入っていないかもしれない。これは非常におもしろいもので、証明ができない。そうすると、入っていなかったとしたら、なぜ入っていないのか、日本の商人がなぜ拒否したのかということもいろいろ考える余地があります。

私は絵画がなぜ入らなかったかということについて、一つ心当たりがあるのは、インテリアとしてそういう状況になかったということだと思います。壁がない。壁はありますけれども、皆さんが想像する

ような絵をかける壁って日本の家屋の中にはないんです。絵がかけられるとしたら、掛け軸を床の間にかけるわけなので、それ以外の方法は考えつかないんです。額に入った絵が入ってきてしまったら、当時の日本人はなんと思うだろうか、これをどうしようと思うだろうかと想像してしまいます。つまりインテリアとしての条件がない。

特にさっきも裸体画のお話が非常におもしろかったんですが、日本人は春画をどのように見ていたかというと、壁に飾ったりはぜったいにしないわけです。(笑) 普通の浮世絵も春画ももちろんそうですが、引き出しのなかに入れている。それで夜になったら……、普通の絵は昼間も見ると思いますが、特に春画は夜になったら、引き出しのなかから取り出して、行灯のもとでひそかに見る。これが春画のいちばんいい見方。そういう見方に、壁に飾る裸体画というのはどうも合わない。そういうようなことが考えられる。

もう一つは文化ヒエラルキーです。日本のなかにある文化ヒエラルキー感。これは中国が世界で最高の国なのであって、その次に日本を含めた漢字文化圏というものがある、漢字を使わない国はすべて野蛮な国だと思っています。これがヒエラルキーの問題です。野蛮の国からおもしろいものが来たただおもしろいというだけで受け入れるけれども、それが偉いというふうには思っていない。高級だというふうには思っていないんです。驚いたり、おもしろがったり、すごいと思ったりはすると思います。そういう文化ヒエラルキー感があったと思います。

それからコックスの「かぶき」の話、私はこれを遊女論とかぶき論のなかで書いたことがあって、コックスは「かぶき」という言葉を使っています。私たちの言うかぶきではなくて、「かぶき者」というふうになつきスクリーチさんが表現なさったんですが、「かぶき者」とすら言っていないで、まさに「かぶき」と言っているんです。それでときどきコックスの文章のなかでその実態が見えてくるんですが、さっきおっしゃったように踊り子という意味でもあるんです。「かぶき」たちは——「かぶき」って人間のことを言っているんです——男も女もいて、十数人で「かぶき」グループというものを組んで、あちこち巡業している状況にあります。

そういう様子もコックスの文章を見ていると見えてくる。ここに見えるのは私たちが江戸文化と言っている、歌舞伎や浮世絵があるとか何々があると言っているところから落ちている人たち、つまり歌舞伎役者は江戸三座という立派な劇場で活躍しているスターたちです。しかしそこから落ちこぼれている人たちがたくさんいて、これが踊り子や、いわゆる男女を含めた「かぶき」と言われる人たちで、これは日本国中にいるわけです。

そういう歴史から落ちこぼれている人たちをイギリス人やオランダ人が記録のなかに残しているわけですが、ただ日本の研究者はそれを拾い切れていない。拾い切れていないのは、さっきの「鎖国」と同じように、江戸時代はこういう時代だという規定概念のなかで捉えられているために、かぶきは歌舞伎としてしか見えないというふうになってしまって、こぼれている現象をこれから拾っていかなければならない。まさに神奈川大学の網野善彦さんのような仕事がまだ江戸時代についてはたくさん残っているんです。そういうさまざまなことを考えました。

あとで私がスクリーチさんに伺いたいと思ったのは、これは日本についてということではなくて、イギリス側の事情についてなんです、日本に交易しに来ようとして失敗するわけです。オランダとの争いがある、来なくなって、インドのほうがたぶん儲けが多いから、インドに入って行ったと思いますが、どうしてイギリスはそんなに熱心にインドや日本と交易しようとしたのかという謎がある。日本研究者だからイギリスについては知らない、もしかしたら言うかもしれない。それについてスクリーチさんはどのように思っているのか、あとで伺いたいと思います。

次に王勇さんの今日の発表のあとの先ほどの追加コメントも大変おもしろく聞かせていただきました。私は倭寇研究というのは本当に大事だと思っているんですが、あまり倭寇研究をしている方は日本

でもない。先ほどの倭寇のお話は大変重要だと思いました。日本側の事情と中国側の事情を並べてくださいました。しかも倭寇がどんな人たちなのかということについて、貿易との関係で話してくださいました。私はどうしてそれが大事だと思っているかといいますと、制度上の貿易、それから中国を中心とした冊封制度とは違うところに倭寇の集団というのは存在していて、14世紀くらいからいるわけです。朝鮮半島や中国に出入りしているわけなんです、結局最終的には中国の寧波の沖の舟山列島というところに拠点を構えて、そして五島列島との間を行き来することになります。五島列島の福江にも王直の屋敷があって、舟山列島の島の一つにもそういう拠点がある。

つまり国ではないんです。国という制度の外側すれすれの島を利用して、島から島へと動いている人たちなんです。これはまさに歴史的に見えるところからは外れた動きである。それがときどきザビエルとか、そういう歴史のなかに顔を出している。でも連綿としてどういう状況が流れていたか、つまり倭寇だけの歴史というのはなかなか見えてこないです。「倭寇」という言葉として成立してしまいますから、そういう言葉を残したまま日本人がどんどんいなくなっていく。先ほど王勇さんも言っていました、中国人がいて、ベトナム人とかタイ人とかポルトガル人までいる倭寇船団というものが成立していった、江戸時代直前までそれが動き続けるわけです。

非常に文化的影響が大きかった。時計を持ってくるとか、ザビエルを連れてくるとか、そういうものはすべてそうです。鉄砲もそうですね。種子島の漂着も王直の船ですから、倭寇船団です。そのような日本の文化とか技術を決定的に決めていくものとしての倭寇。では倭寇独自の歴史っていったい何なのか。海賊と言えばそのままなんです、でもそういうふうに言って横に置いておけないものとして倭寇があると思っています。これはまさに国際状況のなかの問題だと思います。

それからもう一つ、追加のお話のなかでこれはもう大変にお聞きしたいと思ったんですが、中国への輸出品がほとんど生糸と絹織物だったという遣唐使の時代があったという。ところが、そのあと急激に日本は中国からの絹織物の大量の輸入国になるわけです。ポルトガル船が運んできたものの90%は生糸、絹織物でした。オランダ船が当初運んできたものの80%、これも中国の生糸、絹織物でした。このパーセンテージが少しずつ落ちてきます。落ちてくるのは日本の国産化が進んでいるわけなんです、そうすると、先ほどの宋の時代はなぜそれほど日本ではちゃんと絹織物を作って輸出までしていたのに、輸入国に転換してしまって、しかももう一度国産化を図らなければならなくなったのか。非常に私には謎です。

それからなぜ冊封国にならなかったのか。これはずっと抱えている謎なんです。なぜ日本は最後まで中国の冊封国にならなかったのか。朝鮮半島も琉球王国も冊封国で、中国皇帝の家臣としての国王というものをもって、そして中国に毎年、冊封使節を送ることで、さっきおっしゃったように、貿易をしているわけです。非常に有利な貿易を展開できるというのがわかっているのに、冊封国にならないわけです。義満の時代に本当に短い間、義満が日本国王を名乗りますが、それもすぐやめてしまいます。

先ほど伺っていたお話で、結局あまり交易しないで本を買ってくるという話で、ああ、そうかと思ったんですが、もしかしたら日本はもともと貿易にあまり熱心でなかったのではないのか。これも国際状況のなかでの比較の問題です。ほかの朝鮮王国や琉球王国が非常に熱心に貿易を展開して、そのために冊封国になった。にもかかわらず、日本はそうでないとしたならば、案外に交易に熱心ではなかったのかもしれない。

ではなぜなのか。貿易の利益ということを念頭に置かないということは、もっと大事なものがあったのか。そういうことが非常に気になりました。もしお考えがあったら、あとでお聞かせいただきたいと思いました。

それから、先ほどの中国のさまざまなものを貰いながら日本は独自の文化をつくってきたということ、これは王勇さんのご発表でも、陳先生のご発表でもそういう話を聞かせていただいたんですが、特

に私が注目したのが、陳さんのレジメのなかの安原貞室『片言』に「味噌のからなを東坡と付けたるやうのことは」のあとなんですが、「やさしく侍る」、この文章がまさにこれは日本化していくときの意識だというふうに思いました。「やさしく侍る」というのは、唐名＝中国名の味噌に「東坡」というふうにつけたのが、すごく優雅だな、という感じです。すてきに優雅だと言っているわけです。

「かやうの境」って、なぜ境か。和漢の境、和と漢の境をこんなふうに使っていて素敵だなと言っていろいろです。まさにこの和漢の境ということをやっていると書いてきたんです。これは平安時代の文化もそうですし、『古今集』そのものが仮名序と真名序を持って、始まるわけです。そこに典型的に表れているように、和漢の境という概念を作り上げて、そして中国でもあり日本でもあり、中国でもなく日本でもない、その境目を狙っていくんですね。

狙っていくんですが、おそらくそのプロセスのなかには極端な態度を取る人がいたはずなんです。先ほどの森有礼の例を聞いていて私はすごくおもしろくなっちゃったんですが、日本語をやめて英語にしようという感覚と同じように、もう日本をやめて中国になろうとか。それから、特にこれは江戸時代には儒学者のなかにもこれがあるんですが、もう中国のほうが絶対いい、日本なんかやめたほうがいい、日本でなくなったほうがいい、全部中国になろうという、その感覚です。それを極端に言っている人がいる。

じゃあ、どうして国学というものが出現するのかというと、そういう人たちがいるからなんです。中国だという人たちがいるから、いや、日本だという人たちがバランスで出てきた。国学者というのも成立して、もう「漢心」なんかいらんと言いつつ出た。中国精神なんか邪魔者だ、日本は大和心を持つべきだ、これはもっと直心だ、素直な心だ、学問なんて要らない、というところまでいく。これはまた極端な事例です。そして徹底的に日本語を研究するわけです。

今のナショナリストと違うのは、江戸時代の国学者って日本語研究者なんです。日本語とは何か。これは中国の言葉を受け入れているという前提があって、初めて日本語とは何かということを考えるわけなので、これも国際状況のなかで考えないと意味がない。国学者は国際状況にさらされている江戸時代のなかで初めて出てくるんです。江戸時代は初めて庶民がヨーロッパ人と接触した時代、つまりオランダ商館長一行は長崎から江戸まで来るわけです。江戸に1カ月も滞在しているわけなんです。こういうオランダ人たちを見たくて、北斎の絵に出てきますが、庶民たちが長崎屋というホテルに押しかける。

朝鮮通信使と詩のやり取りをしたり、朝鮮通信使の接待をする人たちが出てくる。琉球使節たちと交流する人たちが出てくる。こういうふうには江戸時代は、日本の歴史上初めて、僧侶でも貴族でも政治家でもなく、庶民が外国人と接触する時代になったわけです。そういう状況のなかで国学者というものが出てくる。

そうしますと、両極端がいたはずなんです。この両極を抑えながら、どっちにも行かないような良識みたいなものがどこかで働いていて、和漢の境というところを狙っていくような動きになっていくんです。ぶれながらそういうことに落ち着いてくるんだと思います。これは方法なんです。和漢の境を狙う方法と言えいいんでしょうか、その方法を持ったんです。

ある意味では編集法、編集能力と言ってもいいです。外国から来るものをたくさん受け入れながら編集していく方法、たとえば秋田蘭画という秋田藩に成立するオランダ絵画、これはスクリーチさんも研究していられちゃいますが、これはヨーロッパ側から見ると、まさにヨーロッパ絵画ですが、日本側から見ると、日本画の要素、中国画の要素、そしてヨーロッパの絵画の要素、この三つの要素が渾然一体となって非常に不思議な世界を作り上げています。

それが和漢の境という感覚ですから、西洋的なものが入ってきたとしても、和漢洋の境とちょっと複雑になるだけで、この境目のところを狙って編集していくという意味では同じだと思います。そういうことを王先生、陳先生のお話に感じました。

また先ほどのコルカットさんの久米邦武のご研究のなかからも大変おもしろいことをたくさん感じま

した。教育に関心を寄せるというのはその当事者にとって何だったのかということのを思いながら聞いていまして、教育に関心を寄せるといっても、教育がないから、つまり日本に教育というものがなかったから関心を寄せているのではないわけです。

ご存じのように寺子屋、つまり手習いはものすごい数あります。幕末、一つの村に五つくらいの手習いがあつたりする水準にまでなりますので、手習いというものが存在していて、識字率という意味では調査がないのでわかりませんが、ひらがなの識字率は非常に高い。漢字の識字率は低いですが。今のうちに、漢字かな混じり文で調査できるという状況ではなくて、ひらがなを使う人と、漢字を使う人と分かれているわけなので、ちょっと複雑ですが、ひらがなの識字率ということでは非常に高いです。これはつまり手習いがたくさんあったことからです。

それともう一つ障害者、盲人たちが教育を受ける施設、これは教育というよりも職業を得るための当道座という組織がありまして、盲人たちはその組織に入ることによって小さいころから教育を受けつつ、目の開いている人はできない、つまり盲人だけが独占している職業に就くことができるわけです。この組織が明治以降なくなっていくわけですが。そのようなものがあるのに、しかしアメリカに行ったときに、教育の制度を、こうやって本当に熱心に学校を見て回って、何か導入しようとしているわけなんです。だとしたら、今まであったもの、これからあろうとするものとの違いに気がついていたので、それは何だったのかということが大変気になりつつ、大変おもしろい課題だなと思いました。

ちょっと言葉にしてみますと、おそらく江戸時代にあった教育は必要としての教育だったと思います。制度ではないんです。江戸時代には文部省はないですし、学校をつくれとだれも言いません。義務教育という制度もちろんありません。つまり制度としての教育は存在しない。でも実際の教育は存在するんです。その状況から見たときに、制度としての教育というものが見えたのではないかと思います。そういう意味での関心だったのかどうかについて、あとでコルカッさん、お考えを伺いたいと思いました。

そういう意味で日本だけではなくアジア全体の問題としてのある世界状況のなかに巻き込まれていくというのが近代化だったと思います。それぞれの近代化があったと私は思っているんですが、近代化について日本の歴史が一つ勘違いしていたのではないかと思います。それは何かというと、黒船という言葉に象徴される……、つまり眠っていたのに目が覚めたというあの言い方です。

アメリカ側の事情を考えると、ご存じのように、ペリーが来るのは捕鯨のためです。つまりアメリカは当時は捕鯨がいちばん盛んな時代で、そして直後になると、電気が発明されたりすると、それほどなくなるんですが、鯨油というのは明かりの面でも、さまざまな面で必要なものでしたから、アメリカはものすごい勢いで捕鯨をしている時期です。そうしますと、沖縄と日本が必要、つまり捕鯨船のエネルギーの供給源、それから水の供給源として必要です。沖縄のほうが大事、ペリーの戦艦にとっては。ですから日本に1回来ると5倍くらいの回数、沖縄に行っていますよね。ついでに日本も行くかというくらいだと思います。本当は中国をマーケットにしたいというのがあって、これがまさに Cotton の展開、綿布の話です。そういうマーケットも欲しいのですけれども、供給地も欲しいアメリカ側の事情というものがあつた。

アメリカ側の事情で来ていますから、それに対して日本は応えなくてもいいわけです。応えなくてもいいんですが、あのようなかたちで応えている。応えたのか応えなかったのかという問題であつて、開国させられたとか、目覚めたとか、そういう話ではないわけなので、これもまたお互いの事情というものをちゃんと見なければならぬ。これが国際状況のなかで見るとということだろうと思います。

この国際状況で見たときに、では当時の19世紀中ごろの国際状況、まさにグローバリズムのなかの商業の状況というのはどういうものだったのかという目で日本の幕末、開国というのも見えてくるはずだと思っています。

江戸時代が成立したことのひとつの話として、先ほどの陳先生のご発表のなかで神谷寿禎の話が出てきています。これも私は、ああ、そうか、やっぱり神谷寿禎の銀山の開発技術の入手には僧侶がかかわっていたのだな、五山の僧侶がかかわっていたのだなということをあらためて思ったわけですが、この江戸時代の出発ということを考えてときに、やはりキーワードになるのは銀なんです。

神谷寿禎から始まって、江戸時代に入ってもまだずっと続く銀生産、これが日本の場合には石見銀山をはじめとして生野銀山とかいくつもの銀山の開発をやって、銀をどんどん出して、一時期は世界でいちばん大量の銀を中国に対してだけ支払っていたわけなんです、ただそのときに同時に起こっていたのは、地球の裏側でスペイン人が南米に入ったことです。南米のペルーとメキシコで銀山開発が始まります。戦国時代に銀山開発をしている日本と、地球の裏側でスペイン人がペルーとメキシコで銀山開発をしているという、このことは重なってきますので、これが経済のグローバリズムなんです。

そのことが私は遠因として、江戸時代の成立と関係があると思っています。つまり簡単に言うと日本は経済力を失ったということです。日本は銀の力に頼んで戦国時代を展開していった、しかもそれがあつたために大量の鉄砲を作ることができて、大量の鉄砲があつたために秀吉が朝鮮半島に兵隊を送るわけです。これはハイテク戦争です。ところが負けて帰ってきたわけですから、これは銀の経済力が背景にある。

対外戦争、植民地戦争、当時はおそらく秀吉は植民地という考え方をもう持っていたと思います。それで失敗して江戸時代になるわけです。そうすると経済的な凋落と敗戦体験というこの二つがあつて行き詰るというのが、私は江戸時代の出発、つまりもう一つの違う価値観を持った時代をつくり上げない限り、日本は生き延びられなくなったということだと思っています。

そのようにして始まった江戸時代ですから、銀を頼んでというわけにいかない。鉱物資源はもうほとんどないんです。金もなくなった、銀もなくなった。あとは銅しかないの、オランダ東インド会社に銅で払わなければいけない。そのようにして経済的な力を失っていった日本というのは国産の時代に入るしかないわけなので、中国からものを買っているだけでは間に合なくなりますから、日本がものを作らなければならない。それも江戸時代ができていく一つの事情だと思います。それと裏返しに江戸時代がなくなるもう一つ事情というのは産業革命がヨーロッパで起こり、植民地がどんどん広がっていく。この事情が今度は開国のときには関係している。

鳥越 これでは質問をお答えいただいて今日は終了ということになろうかと思います。それではまずスクリーチ先生、英国側はインド交易に非常に熱心に…？…。

スクリーチ たぶん途中でイギリス人が自分に対して同じ質問をしたと思います。なぜここまで来ているか。オランダは先に行きますね。日本だけでなく、バンタムにもインドにも、イギリスよりもオランダは先について、オランダ人の大げさなニュースを聞いて、オランダが大もうけしているというわさがイギリスの耳に入ります。オランダがそんなにもうかれれば、われわれは同じことができるんじゃないかと思ったと思います。

それともう一つは外国に行って貿易をすることが一つのポイントでしたけれども、もう一つのポイントはポルトガル船を奪うんです、マカオから長崎に行くのを。ポルトガル船は毎年1隻、非常に大きい船が来まして、それを奪うことができれば中国まで行かなくていいんです。全部ポルトガルからとる。結局、日本で儲からないせいで平戸イギリス商館がわずか10年間あつてクローズされたんです。それとちょっと冒険旅行をしたかった人もいますね。あとはスペインがあちこちに行って、南米からたくさん銀を持ってきましたから、われもわれもという感じですね。

もう一つ付け加えてもいいですか。ケンペルというドイツ人の本から「鎖国」の言葉が訳語として日本語に表れていると田中先生がおっしゃられまして、そのとおりですが、もっと複雑ですね。ケンペルはもちろんドイツ語で書きましたけれども、ケンペルの原稿が出版されないうちに死にます。結局その

原稿はドイツの田舎の彼の実家に眠っていて、結局イギリス人がそれを買ってきて、イギリスに持ってきて英訳するんです。その英訳をした人がスイスの若い人です。スイス人のドイツ語はちょっと変なドイツ語です。それと、そのスイス人が英語はあまりうまくできませんでしたから、ケンペルが本当に書いたドイツ語とは違う、けっこうおかしい、誤解の多い英訳です。それに日本人はドイツ語が読めないので、オランダ語版が日本に来たんです。だからこういう複雑なルートで日本に戻ってきた「鎖国」という言葉ですから、それは途中でいろいろなニュアンスの間違いとか、完全な誤解が入っていると思います。

鳥越 王先生、日本と中国における絹問題というのがありましたね。

王 絹、シルクロードが古代の東アジア世界においてはあまり成立しなかったというふうに思いますが、弥生時代から、卑弥呼から中国の三国の魏に貢がれるもののなかですでに絹がいちばん重要なものになっているんです。もう日本では弥生時代からシルク類の生産が始まっている。唐の時代では、特に朝鮮半島からの渡来人、「大秦」の例に象徴されるように、渡来人がもたらした技術などによって大量生産が可能となったことです。それが一つ。

もう一つは、商売ですとコストがとれない。「人命が地球より重い」という言葉があるように、遣唐使は大ざっぱに言うと3分の1くらいの人が死んでしまうんです。3分の1くらいを死なせるまでシルクを求めるか、こういう商売はもとが取れない、コストが取れない。だからその国においても商業的な価値は成立しないです。

どうしてたくさんの方の犠牲者を出したかという点、東野治之先生の説明、解釈がいちばんまっとうかと思いますが、貿易ですと、貿易のルールでいくんです。たとえば中国に市がいつ開かれるか、いつ売れるか、あるいはいちばん短い航路は何なのか、いつごろ行けばいいのか。そういう基本的なルールで考えますが、遣唐使の航海時期がそれと違います。遣唐使にとって元日の中国側の儀式に合わせるために無理やりに出発しなければならない。悪い天気でも出発しなければならない。それは日本から出発して浙江あたり、揚子江の江都あたりに到着して、それから運河を北上して長安に至る時間を計算するんです。元日到着のチャンスを逃したら今年はやめます。来年再度挑戦することになります。だから長いときは、いい風が得られなければ1年、2年、3年、4年まで待つんです。だからこの意味では、次の問題になるんです。

遣唐使自体は商業ベースで行ったのではなくて、あくまでも政治的な儀礼的なものです。先ほどコメントターはなぜ冊封国家でなかったのかと問われました。それはまだ学会では未解決の問題です。冊封国家なのか、要するに中国の政治的なシステムに入っているのか、入っていないのか。それより大きな問題は、冊封国家と言っても一元的なものではないことです。距離的な遠近、文化の発達、高低、また関係の親疎、親しい関係なのか、どういう関係なのか、などによって内容が異なる。これが前提です。

日本は、一応元日の朝賀に出ることで、中国のシステムのなかでは冊封国家に入ります。しかし絶域です。それにまた日本では20年に1回でしょう。20年に1回という約束で来るんですけれども。だからこれは冊封体系という言葉にとらわれずにケースバイケースで考察したほうがより妥当であるかもしれません。もし冊封が否かにとらわれすぎると遣唐使は今の政治関係のように見えてくる恐れがあります。唐の対外関係のなかにもいろいろな次元がありまして、たとえば日本からの国書があったかどうかだけでも、これはまだ学会では解決されていない。国書を持って行かなければ中国では受け入れられないはずだ、そのとおりですけれども、政治的思惑が混入されると、正しい判断を妨げます。

一方、中国、唐から日本へもたらされた国書は、今はっきりわかっているのは、少なくとも二通あります。日本が持っていかに中国からもらうというのはおかしい話で。それに、いろいろな事件があって、必ずしもほかの冊封国家と同等に見るのではない、あるいは冊封という言葉を使わずに、日本独自

の中国との交流関係がある。これについては実は昨日、横浜の駅でばったり会った鈴木靖民先生と東野治之先生、お二人がNHKのテレビ番組で出した説明が妥当かもしれません。

すなわち日本の当時の対外関係は二元的で、たとえば『延喜式』を見ると、日本では中国のことを「隣国」というんです。朝鮮半島の国を「蕃国」といいます。「天子」はこういう場合に使う、「天皇」はああいう場合に使う、「皇帝」はこういう場合に使うという、そういう中国の冊封体系のシステムが、日本で存在しているんです。朝鮮半島を「蕃国」というのは西側の夷、東の夷は南東諸島、日本では小中華が成立しているんです。小中華が成立しているから、日本で独自の中華思想、冊封体系が築かれている。「六国史」を読みますと、日本では立派な朝貢圏が成立しており、新羅の人が来て、国書に「朝貢」の言葉がないと、それは退けるとかですね。日本にはそういうものがあって、逆にもっと別な朝貢圏にも入っている、あるいはそういう政治的なシステムを経験した人がいる、経験しないと自分でつくことはできませんから。だから二重的という説が大変魅力的です。

外交的には中国を中心とする政治圏に入っているし、また国内では別に朝鮮半島とか南東諸島とか、こういう国々を含めて独自の「小中華」という言葉が使われます。そこで、二重構造ということが言われています。そうすると、遣唐使はこの意味からいいますと、やはり政治的な色彩が非常に濃厚です。貿易どころではないです。

それが9世紀以後になりますと、貿易商人が発達しますと、遣唐使の歴史に終止符が打たれますけれども、9世紀以後、宋代に至るまで中国と日本の間にシルクの持続的かつ大量な交易の記録は、私は寡聞にして知らなかったんです。それはずっと江戸、近世以後になって、先ほどどなたかがおっしゃったように、銅などを通して、また別の意味でシルクが一つの貿易のメイン商品になる、そういう変化の過程はこれからもっと追究していくとおもしろい結論が出てくるかもしれません。

田中 陳先生に具体的な質問がさっき言えなかったので……。陳先生には、先ほど五山文学の文体、中国文を使った中間文体が出てきたというお話は大変興味深かったんですが、この中間文体は後の日本の文体の問題に影響を与えたと思われるかどうか。

陳 言語の専門ではないですが、たぶん後ほどの文体に影響は及ぼしたと思われます。あとの策彦周良や江戸以降のお坊さんの日記あるいは文章を見ても、この影響が残っているのではないかと思います。

鳥越 コルカット先生には、江戸のころの必要とした教育と、国家制度としての教育という問題……。コルカット 久米さんは肥前に生まれ育ち、そして彼のお父さんは大名の顧問で、久米は若いときから藩校で勉強して、そして周りの事情をよく知っていたと思います。おそらく肥前では寺子屋とかそういう組織されていないような組織があったはずで、彼はそれを認識したと思います。そこから江戸に行って、また自分の勉強を続けて、幕府関係の教育を受けて、外国へ明治4年に出かけた。だからもちろん久米の受けた自分の藩と江戸での教育のレベルは高かったんです。そして、おそらく藩と江戸での教育の可能性、——あの時代の学問はばらばらだったかもしれませんが——水準の高いところが日本にはあった、と彼は認識したと思います。

私の読んでいるところで、彼は日本人の可能性、才能をばかにすることはないです。かえって、日本人は普通の日本人でも西洋人より才能があるというところを彼は強調するところもあります。たとえばアメリカでウエスト・ポイントの軍人の学校へ行っただけです。そこでこれから軍人になる若者、18歳か20歳そこそこの若い人が練習して、向こうに的を出して、自分の鉄砲が大砲を撃って、だれも当たる人がいないんです、みんな失敗して。久米たちはそれを見ていて、『実記』を読みますと、久米は、もしこの場合日本人でしたら、おそらくみんなが当たったのではないかと、ということを書いています。要するに日本人は西洋人よりニンプルで〔＝機敏で〕、頭と指は早いとか、そういうことを彼は強調するところもあるんです。ですから日本人の可能性について、久米は絶対ばかにすることはないと思います。

す。

問題はおそらく今おっしゃったとおり、組織。日本の場合は教育はちょっとばらばらで、場合によって高いレベルの教育があるんですけども、一般の人はそこまでは届かない。またはある人は寺子屋を通してある程度仮名はできるんですけども、高い教育のレベルになっていない。それについて、西洋から具体的なプラクティカルな、日本の将来を考えていちばん役に立つような、皆さんが受けられるような教育を考えたほうがいいんじゃないか、と彼は書いています。もちろん旅をしながら田中不二磨と、ほかの5人、6人くらいや木戸とよく話をして、そういうことについて膨大な資料をおそらく集めたと思います。そのばらばらの資料よりも全体的な正論をこれから考えなければならないという全体像もあったのではないかと私は思います。

田中 この配付資料に書いてあるアメリカの学校には、もうこのときには、たとえば義務教育制度などがあったんですか。

コルカット 部分的には、たとえばマサチューセッツ州とか、ある州にはそれに近い制度ができたと思います。ほかの州はまだそこまではやっていないです。そして彼は必ずしもそういう制度をどうしてもしなければならないということを強調しないんですけども、心のなかではやっぱりそういう方向に彼は考えたのではないかと私は解釈しています。

鳥越 ありがとうございます。本当はこれから自由討論になるとますます盛り上がっていきたくらうと思います。残念ながらぼつぼつ時間が来てしましまして、本当に残念な限りですが、長時間にわたり刺激的なお話をしてくださったパネリストの先生方、本当にありがとうございました。そして、鮮やかなコメントと討論を盛り上げる質問をしてくださいましたコメンテーターの田中優子先生、ありがとうございました。

田中 シャベリすぎたために議論が……。

鳥越 とんでもありません。ありがとうございました。そして、また熱心にお聞きくださいました会場の聴衆の皆さん、そしてこれまた議論を盛り上げる質問をしてくださいました方々、本当にありがとうございました。

実は、私はイエズス会士ではないんですが、イエズス会の学校で勉強したせいもありまして、若干同情的な面もあるんですが、たしかにいろいろと問題としてはおもしろいなと思っておりまして、また機会がありましたら、今度はイエズス会を巡るシンポジウムとかそんなのでもいいかなと思ったりいたします。

というようなわけで本当に皆さんに感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。お気をつけてお帰りください。(拍手)

〔書評〕

神奈川大学人文学研究所編 御茶の水書房

『世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために——』

駒 走 昭 二 (神奈川大学)

ある集団に属するものにとって、その集団が所有する「文化」は、単なる日常に過ぎず、それは、時間・空間的にその集団に属さない人々から注視されることによって、初めて意味づけられる。従って、「日本文化」なるものも、今、日本に生きる私たちの問題でありながら、私たちだけの問題ではない。

本書は、その点を十分に意識して企画された、同題の国際シンポジウム・記念講演の内容をもとに編まれた論文集である。

前半は、国際シンポジウムでの三人の報告である。それらは、「日本文化」という大きな共通テーマこそあるものの、それぞれの著者が分析の手段として用いている材料、依って立つ理論、視座はさまざまである。

まず、メアリー・ナイトン「『パルタイ』から『スミヤキストQの冒険』へ」は、1960年代の初年と最終年に発表された倉橋由美子作品を採り上げ、文学解釈を施すことにより、また、それらが巻き起こした論争、さらには両作品の質的変遷に注目することによって、ポスト占領下の日本の近代化の動向を浮き彫りにする。そこでは、「特殊」と「普遍」、「部分」と「全体」という問題を扱うために、当時の建築界の革命的な動きであるメタボリズムとの関連づけがなされ、興味をひく。

次に、王勇「坐る仏と立つ神」は、「坐る」「立つ」という動作とそれによって生じる視点の違いを東洋と西洋の文化的特性に関連づけ、そこから日本文化の特徴を見定めようとする。それは、身体論的アプローチによる日本文化認識の可能性を示すものである。後の質疑応答でも明らかにされるように、著者の着眼点が、単なる東洋と西洋という二項対立ではなく、文化の流通を視野に入れた文化の広がりにあることも見逃してはなるまい。

三編目のシュテフィ・リヒター「『実体』としての日本か「クール」な日本か」は、これまでの「日本文化」研究をカルチュラル・スタディーズの手法に照らし合わせ、両者が生産的に結びついていない問題点を鋭く指摘する。また、東アジアにおける歴史修正主義を、単なる地域的な問題としてではなく、グローバルな視点から眺め、それに対するドイツでの取り組みを希望的に論じる。全体を通して、文化研究のあり方自体について述べた啓発的な内容となっている。

なお、この上記三編については、シンポジウムでの質疑応答・全体討論の内容も、コメンテーター鈴木彰による報告という形で紹介されており、各論文の理解を助ける。活動の拠点・分野のそれぞれ異なる論者たちがそれぞれの視点から切り込んだ日本文化と日本文化研究であるが、この三編を通して、読者は、鈴木氏の言うように「文化を複眼的に問い続けることの大切さ」を感じ取るべきであろう。

後半は、そのほとんどが記念講演の内容に基づいたものであるが、まずは、川田順造「世界の中の日本文化を考える」である。川田は、20世紀初頭の同じ年に起こった二つの出来事、すなわち日露戦争開戦とオペラ『蝶々夫人』の初演に注目し、当時の新聞記事や風刺絵も用いながら、「日本文化」は、決して固定的に捉えられるものではなく、変動する歴史的条件の中で意味づけるべきであることを明快に説く。日本と世界が、同時代においても、片や、『蝶々夫人』のように、「観念的な世界で幾重にも屈折して揺れ動いて」交わり、片や、「観念の入り込む余地のない、この上なく即物的な戦争という形」で交わっていた事実の指摘は感慨深い。

ドミトリ・ラゴージン「ロシアにおける日本文学」では、ロシアでの日本文学の受容の仕方の変遷と現状が紹介される。例えば、村上春樹ブームや俳句・連歌の盛り上がりなどである。外国の文学を翻訳・分析する作業自体が自己認識の有効な手段になりうるという、異文化導入に対する著者の主張も注目に値する。また、当論考については、コメンテーター報告として中本信幸が、ロシアと日本との歴史的な関わり、現在の日本語教育の隆盛などについて補足説明を行っている。

ヴァチスラフ・フセヴォロドヴィチ・イワノフ「ロシア人研究者の見た日本の仏教」は、日本仏教にいち早く着目して研究を行ったオットン・オットノヴィチ・ローゼンベルグについての紹介である。彼の体験重視の研究スタイルと彼が世界的な仏教研究にもたらした功績が説明される。100年ほど前に活躍したこのロシアの仏教研究者が、日本の仏教研究を足がかりにして、インド・中国・日本という地理的な伝播と通時的展開の関連性に気づき、初期仏教の体系再構築を可能にしたことは、文化研究のあり方に関して、本書の他の論考とも通じるところがある。

ドナルド・キーン「世界の中の日本文学」は、日本文学が世界とどのようにに関わり、位置づけられてきたかを通時的に概観する。また、日本特有の文学ジャンルである日記の伝統にも触れ、その文学的価値を高く評価し、現代の日本社会にもその認識を求める。戦時中、日本兵が戦場に捨てていった日記の解読を任務として課された経験を持つ著者の主張は説得力を持ち、貴重な提言として受け止められるべきであろう。

近年、日本国内において、日本文化の再評価・発信という言葉が声高に叫ばれている。その動き自体はグローバリゼーションからの逆行でもあり、順行でもあろう。しかし、それらが無自覚な積極性をもって、内側からのみ一方的に行われれば、右傾化の誹りを免れないであろう。また、それらを国際社会における地位向上のための戦術として利用することにも慎重でありたい。現状がどうであれ、本来、文化は、力の論理とは無関係であるべきだからである。

通信・交通機関が目覚ましく発達した今日では、躍起にならなくても、リアルな「日本文化」は自ずと世界に発信される。しかし、そのような時代においても、それを世界の人々がどのように意味づけるのか、その意味づけの背景には何があるのか、その意味づけが日本内部での自己評価とどのように一致し、また異なるのかは、常に問われ続けなければなるまい。

すべては、「日本文化」を常に動的なものとして捉え、尚かつ多角的に分析することによって始まる。そうすることが、「日本文化」の健全な認識へとつながるはずである。本書は、そのための手がかりを示唆してくれている。

共同研究奨励グループ活動報告

共同研究「〈表象〉としての日本—国際日本学の新展開—」

本共同研究グループは、2005年4月に学内の共同研究奨励助成の採択を受けたものであるが、2008年3月を以て3年間の活動を終了する。

以下、本年度の活動の概略を記す。

(1) 研究会の開催

① 4月25日（水）

鳥越輝昭氏：シャープレスの位置—〈蝶々夫人〉物語の倫理の中心

山口ヨシ子氏：「マダム」バタフライをこえる試み—ヨネ・ノグチの「ミス」モーニング・グローリー

② 6月20日（水）

伊坂青司氏：18世紀ヨーロッパ思想界の〈日本〉表象—ケンペル『日本誌』のインパクト

鈴木陽一氏：中国文学に見える日本

③ 11月21日（水）

鈴木修一氏：『米欧回覧実記』に於ける東西比較

④ 2月20日（水）

復本一郎氏：『羯南と子規と新聞「日本」』

岡島千幸氏：『G・サンソムと日本』

(2) 海外調査

前田禎彦氏：9月17日から20日、浙江工商大学日本語文化学院

鈴木彰氏：9月14日から20日、同

※なお詳しくは、「人文学研究所報」に調査報告が掲載される予定なので、そちらを参照されたい。

(3) 講演会

7月3日（火）

上田敦子氏（プリンストン大学東アジア学科助教授）

：アメリカにおける「日本研究」の現在

（日高昭二）

ハンガリー・カーロリガシュパール大学訪問報告

鈴木修一

訪問先：KÁROLI GÁSPÁR UNIVERSITY OF THE HUNGARIAN
REFORMED CHURCH

Department of Japanese Studies

訪問日時：2006年11月7日（火）

訪問者：鈴木修一

数日前の夜遅くハンガリー国際空港に着いたときは、吹雪まじりの小さな嵐のような天気、真冬を思わせる寒さだったが、大学を訪れたときは、それが嘘のような小春日和の暖かさだった。本学同僚の富谷先生に紹介していただき、カーロリ・ガシュパール大学日本学科の学科長ヴァッローク・イローナ先生にお会いして話を聞かせていただいた。大学はその住所（Reviczky u 4/c）を頼りに（前もって宿泊していたホテルのカウンターでおおよその場所を聞いておいたので）すぐ辿り着くことが出来た。なんとホテルから歩いて15分ほどのところに在った。校舎に入ってその三階に階段を登ると、一見雑居ビルの如き様相で、一瞬とまどったが、近くにいた女学生に尋ねると親切にも部屋まで案内してくれた。E-mailで予め連絡をとって約束していた時間より10分位前に着いたのだが、先生は既に待っていてくださり、念のためと、日本人の講師伊東先生も同席して下さった。しかし全くそんな心配がいらないう位、失礼な言い方になるが、先生の日本語は流暢で語彙も豊かで日本語の表現にも習熟されていて申し分なかった。以下うかがった要点をいただいた学科案内をも参照しつつ記す。

1. 学科の歴史

大学の設立は1885年に創立されたブタペスト改革派神学アカデミーに由来して1900年に大学となったが、この報告書の標題に記したようにプロテスタント系の宗教大学（1）である。

そして1994年に日本語の予備コースが設立され、大学の人文学部日本学科は1995年に創立された。設立の趣旨は、ハンガリー企業の日本進出、日本企業のハンガリー進出に対応するための日本語教師養成と日本社会の研究にあるということである。しかしそれにしてもブタペストには日本の東大にあたる総合大学にも日本学科があるので、少々疑問があったので、失礼にも、かつてのツラニズム（2）とは関係がないかと質問したら、「うちの理事長がツラニズムに関心をもっているので、幾分関係があるかもしれない」とのことであった。

2. 学生

日本学科の学生数は平均して毎年30人位で、その2/3以上が卒業していくとのこと、修学年限は従来5年だったが2006年度から3年になったとのこと、そして大学院の修士課程2年がある。卒業生は日本企業に就職したり、大学、高校の日本語教師になったりするが、もちろん、それだけでは就職が100%確保されるわけではないので、ダブル専攻制度をとっていて、他学部他学科の学生と同じように就職することも多いとのことである。

3. カリキュラム等

日本学科のカリキュラムとして挙げられるのは、現代日本語、日本語言語学、日本文化入門を初めとして、日本研究購読、古典日本語、漢文、日本文学史、日本史、日本宗教史、日本社会論、日本と世界、日本外交政策、日本美術史、中国文明論等々と非常に多岐にわたっている。そのためにも先ず日本語の習得が大切なので、日本語を未習で入って来る学生には、日本語の Preparatory course が設けられており、さらに Intensive course (週に 15 時間) によって、speaking, reading, writing, listening という四つのスキルの訓練を徹底的にうけることである。

このように教育の主眼は、先に触れた設立趣旨の目的を果たすために、実践的言語知識、日本社会、経済、政治、国際関係の学習に置かれているとのこと。また、そのために、大阪外語大学と最長一年を限度とする交換留学生制度が 2003 年秋から始まったとのこと。

4. 学科スタッフ等

学科長は、会見に応じてくださったヴァッローク・イローナ先生 Ilona Varrók CMs, (3) さんで、専門は現代日本文学、日本教育史。お尋ねしたら、日本文学史の講義では、奈良時代から現代までの通史をなさっているとのこと、その博覧強記には驚かされた。以下専門の分野に触れながら挙げる。敬称は略させていただく。日本美術史の Éva Cseh (非常勤)、現代日本史の Dr. Ildikó Fakas、日本社会論、日本国際関係論の Attila Gergely (政治、経済等の講義も行っているとのこと)、比較文学、辞書学の István Jano、古典語、古典文学の Zoltán Máté、日本宗教史の Dr. Péter Nemeshegyi (非常勤) 現代中国史、中国・ハンガリー関係論、中国キリスト教布教論の Dr. Péter Vámos、現代日本文学、俳句の DR. Jndit Vihar、そして日本人の Seiji Wakai と会見に同席してくださった伊東先生等である。以上カリキュラムとスタッフを一覧すれば、不十分な点は多々あるとしても、それなりに充実していると言っても過言ではないであろうとおもわれる。

5. その他

先生方の所属する研究室は写真でみていただくとわかるように長方形のかなり大きな部屋が二つあって、個別の研究室ではないようである。その壁の両側にびっしり日本語の本が配架されていて、冊数をお尋ねしたら、約 1000 冊位とのお答えだった。予算がとばしいので主に国際交流基金などの援助によって購入されているとの由。

スタッフとしては上記の他に、日本人の客員教授による講義・ゼミナール等も行われることがあるとのこと。

そして、現在、かつての辞書が古くなったので、新しい標準ハンガリー語・日本語事典（見出し 30,000 誌）の編集を 2000 年に始めて、2004 年春に完成予定だったが、今も継続中とのこと。

イローナ先生との会見を終えた後、伊東先生に校舎を案内していただき、最後に図書館を見学したいと言って連れていかれた所が、学生の図書館のような部屋で、そこを一覧させていただいたが、残念ながら、アジア関係の英語・ハンガリー語の本が少数あるだけで、少々がっかりした。

イローナ先生、伊東先生に、そして紹介いただいた富谷先生に、この稿を終わるに当たって感謝のことはをのべさせていただきます。ありがとうございました。

(1) ホテルの人に大学の場所を尋ねたとき、宗教大学と言っていた。地元ではそう呼んでいるらしい。

(2) ツラニズムとはツランと称されるウラル・アルタイ系語族を民族統合しようとする運動。

日露戦争で勝利した日本に関心をもち、日本をアジアにおけるツラニズムの代表と見なすようになったが、運動は第二次大戦後は消えてしまった。

(3) ハンガリー語での発音が残念ながらわからないので、お名前を間違えたらいけないので原語のまま

記す。イローナ先生の場合は交換した名詞にカタカナでそう記してあった。



イタリア国立ナポリ大学「オリエンターレ」訪問報告

鳥越輝昭

訪問先：Università degli Studi di Napoli “L’ Orientale” (国立ナポリ大学「オリエンターレ」) Facoltà di Scienze Politiche-Dipartimento di Studi Asiatici (政治学部アジア研究学科), Facoltà di Lettere e Filosofia-Dipartimento di Studi Asiatici (文哲学部アジア研究学科)

訪問日程：2007年3月19日、3月21日

訪問者：鳥越輝昭

イタリア国立ナポリ大学「オリエンターレ」のなかで日本学・日本語の研究教育をおこなっているのは政治学部と文哲学部に関わるアジア研究学科（ただし、イタリアの大学の通例で大学院教育もおこなう）である。イタリアの大学は一般にいわゆるキャンパスを持たず、学科ごとに市内の別々の建物に入っていることが多いが、「オリエンターレ」のアジア研究学科も、ナポリ市の旧市街スパッカ・ナポリにあるコリリャーノ館に入っている。このバロック様式、五階建ての館は16世紀に建てられたもので、かつては公爵の館であった。広場をはさんで建つ聖ドメニコ・マッジョーレ教会は、大神学者トマス・アキナスが晩年研究生生活を送った所と聞く。

ナポリ大学「オリエンターレ」の起源は18世紀（1732）まで遡り、中国で活動するキリスト教（カトリック）宣教師養成を目的につくられた神学校がはじまりである。この神学校には外国語学校が併設され、やがてそこではアジア諸地域の言語が教授されるようになっていった。19世紀末、イタリア政府の政策により神学校部門は閉鎖されたが、外国語学校部門は、東洋の諸言語のみならず、世界各国の言語・文化・社会制度などを教授する教育機関に成長、1940年に大学となった。現在は、4学部9学科を擁するイタリア屈指の文化系総合大学として12,000人の学生が学んでいる。

この大学で日本語が正式に教授され始めたのは20世紀初頭（1903）のことで、初代の日本語講座担当者はG・ガッティノーティ（『日本の詩歌』1909の著者）であった。初代日本人講師は下斗米ヒデゾウ（秀造？火山学者）、二代目は下井春吉（詩人、ダンテ研究家）であった。日本語・日本学の教育が本格化したのは1950年代、M・ムッチョリ教授（著書『日本の演劇』1962など）の下においてであった。現在、日本学・日本語教育に携わっている専任スタッフは、G・アミトラノ（日本近現代文学）、P・カルヴェッティ（日本語史）、P・カリオーティ（東アジア史）、S・デマイオ（日本近代技術史）、大上順一（言語学）、の諸氏である。また、東アジア文化史担当のA・タンブレロ教授は、日本学研究雑誌 *IL Giappone* の創始者であり編集長を務めている。

アジア研究学科の図書は、コリリャーノ館内に一括所蔵され、約23万冊の蔵書がある。日本関係書は約2万冊。文学・政治史関係の図書が充実しているが、なかでも帝国文庫版の『西鶴全集』やランゲ『テサウルス・ヤポニクス』のようなやや古い書籍の集書、『岡山県教育史』（全3巻）のような地方史の集書が特徴的であった。

わたくしは、3月19日に、政治学部所属のシルヴィア・デマイオ先生、ならびにレッツェ大学専任で「オリエンターレ」の非常勤講師でもあるカロリーナ・ネグリ先生（日本古典文学）にお目にかかり、「オリエンターレ」の日本学・日本語研究ならびに教育の歴史と現況について話を伺い、学科図書館をご案内いただいた。3月21日には、文哲学部所属の大上先生にお目にかかり、先生からも「オリ

エンターレ」の日本学・日本語研究ならびに教育についてお話を伺った。紙幅が限られているので、概略のみを記している。

現1年生の日本学・日本語専攻者は、文哲学部と政治学部とを合わせて176名である。文哲学部では、3年間60分×8コマの日本語教育を続けながら、2年次以後は日本の文学史・美術史・哲学宗教史など文化研究と組み合わせられてゆき、政治学部でも、各年次の日本語の履修時間が6コマとやや少ないのを除けば、同様に2年次以後の専門教育と組み合わせられてゆく。両学部とも学生は2言語を学習することになっており、日本語専攻者は中国語をあわせて学習するのがほとんどだという。

イタリアでは2003年に新制度が導入され、おおむね学部3年、修士2年、博士3年とってよい私たちの大学教育制度となっている。この学部3年制度は実社会への直結を目指した改革で、これにより学部水準の卒業率が従前より増え、「オリエンターレ」でも5割以上となっている由。学部を終えて修士課程へ進学するのは、政治学部では約半数、文哲学部では2割以下。早稲田大学、東京外国語大学、上智大学などとの提携関係があり、毎年10名程度が日本へ留学するとのことである。

近年、日本学を専攻する学生たちは、入学前から漫画、テレビのドキュメンタリー番組、インターネットなどで日本への純粋な関心を持っている場合が多い。卒業後は、日本留学で日本語力を伸ばしたのち、文哲学部では、通訳・翻訳業、イタリアの日本企業、日本のイタリア企業、観光ガイドなどに職を得る場合が多く、政治学部では企業の他、国際機関などに職を得る場合が多いとのことである。

イタリア国立ヴェネツィア“カ・フォスカリ”大学訪問報告

鳥越輝昭

訪問先：Università “Ca’ Foscari” di Venezia (国立ヴェネツィア“カ・フォスカリ”大学) Facoltà Lingue e Letterature Straniere-Dipartimento di Studi sull’ Asia Orientale (外国語外国文学部，東アジア研究学科)

訪問日程：2007年3月26日，3月27日

訪問者：鳥越輝昭

イタリア国立ヴェネツィア“カ・フォスカリ”大学で日本学・日本語を研究教授しているのは，外国語外国文学部の東アジア研究学科である。同学科は日本学・日本語専攻と中国学・中国語専攻の2専攻を持つ学科（ただし，イタリアの大学の通例で大学院教育もおこなう）である。イタリアの大学は一般にキャンパスを持たず，学部もしくは学科ごとに市内の建物に分散していることが多いが，ヴェネツィア大学の場合もそうで，現在，東アジア研究学科はヴェネツィア本島にあるヴェンドラミン・デイ・カルミニという名の館に居を置いている。これは，15世紀に建てられた4階建ての，元は貴族の館で，フランスの作家アンリ・ド・レニエが短期間住んだこともある。外観は簡素だが，内装は華麗さを残している。館は，狭い運河を挟んでカルミニ教会と対峙している。このあたりは観光客はめったに訪れることのない，研究と勉学に好適な静かな場所である。

ヴェネツィア大学は，19世紀後半（1868年）に，経済学・商業学を教授する王立高等商業学校として創立された。これはイタリアで最初の高等商業で，創立の目的は実業人の養成，および中等教育の「経済」担当の教員養成であった。「カ・フォスカリ」の名は，この学校が，かつてこの町の元首を出したフォスカリ家の館に置かれたことに由来している。この高等商業はその後発展を遂げ，現在は4学部，19学科を持つ総合大学となり，18,000名の学生が学んでいる。ヴェネツィア大学では創立時から外国語教育に力が注がれ，現在では40カ国語が教授されているのも特色である。

日本語は，創立まもない1873年から教授され，初代講師は吉田要作（元在日イタリア領事館通訳），二代目が緒方惟直（蘭学者緒方洪庵の子息，画家）であった。現在，東アジア研究学科の日本学・日本語専攻は，イタリアでもっとも充実したスタッフを擁し，イタリア人専任教員8名，任期制教員3名，日本人ネイティブ教員が7名である。イタリア人専任は，G・カルツァ（日本美術史），F・ガッティ（日本史，日本現代史），M・ラヴェリ（日本哲学史・宗教史），B・ルベルティ（日本演劇，近世演劇，近世文学），L・ビエナーティ（日本現代文学），R・カーロリ（日本史，沖縄史），M・R・ノヴィエツリ（日本近現代文学，日本映画），A・トッリーニ（古文，国語史，仏教史），L・モレッティ（近世文学）の諸先生，任期制教員がV・アルベリッツィ，M・デルベーネ，三宅の各先生，日本人ネイティブ教員は，河野，中山，仙北谷，鈴木，上田，植村，安田の諸先生である。日本語・日本文化を全体的にカバーしているのが特徴である。

東アジア学科の研究紀要として *Asiatica Veneziana*，外国語外国文学部の研究紀要として *Annali di Ca’ Foscari* が毎年刊行されている。また，東アジア学科を拠点として国際学会，国内学会，講演会なども多数開催されている。たとえば2006年には，イタリア日本語教育学会と沖縄研究国際学会が開催されているほか，小山聡子氏など日本人学者を招いての講演，神田山陽氏の講談，大阪文楽座による浄

瑠璃などが上演され、日本文化の紹介に意が注がれている。

学科図書館は、ヴェンドラミン館の各階にわたるもので、総開架制、日本関係書籍は1万1千冊、そのうち半数が日本語による出版物である。また97種の定期刊行物を所蔵している。蔵書は分野・時代ともにバランスの良いものである。文学については、古典から近現代まで、叢書、個人全集をふくめて集書されているし、歴史についても、古代から現代まで、政治・宗教・文化にわたって集書されている。演劇関係書籍、日本ファシズム関係書目、英語で書かれた日本関係書籍の充実しているのが興味深い。

現在東アジア学科では、全体で800名ほどの学生が日本語・日本文化を専攻している。1年生（現在200名ほど）は、週12時間の日本語の授業（イタリア人による授業8時間、日本人ネイティブによる授業4時間）に加えて、イタリア語で講義される日本史、日本哲学宗教史、日本文学、日本美術史の授業がある。2年次からは、古文の授業、および、日本語以外のアジアの言語の授業が加わる。中国語、韓国語を選択する学生が多いとのことである。3年修了コース（学士課程）を終えた学生のうち専修コースへの進学率は20%ほどだそうである。日本の大学では、東京外国語大学、早稲田大学、慶応大学と大学間交流協定がある。また、3年次後期（4月～6月）に、希望者は文化外国語専門学校、九州共立女子大学などへ日本語研修に出かけて単位が認定される制度がある。毎年40名ほどがこの制度を利用するとのことである。卒業後は日本企業、通訳、翻訳などに職を得る場合が多いようである。

わたくしは、3月27日には、東アジア学科日本文化専攻のボナヴェントゥーラ・ルベルティ教授（専攻主任）、アルド・トッリーニ教授（国際交流担当）にお目にかかり、お話を伺うとともに、多数の資料をいただいた。ここに記すのは概略のみである。また、その前日には、図書館を、カウンターでアルバイトをしている日本文化専攻の学生ヴィオットさんに案内していただいた。まだ2年生だそうだが、書棚に加藤周一『日本文学史序説』と小西甚一『日本文藝史』の伊訳があったので、尋ねてみると、どちらもすでに読んだとのことだった。勉強家らしい。

「戦前中国・朝鮮における日本租界の研究
—日本人社会の形成, 変容, 消滅にいたるプロセスの解明」
(2006 年～ 2007 年)

(1) 共同研究グループの組織と課題

詳細は本共同研究のホームページ

<http://human.kanagawa-u.ac.jp/kenkyu/group/nittsu/index.html> を参照。

(2) 研究活動の報告

本共同研究グループ（以下、租界研究会と略称）は、2000 年以降の中国の旧日本租界に関連する研究の中間成果を大里浩秋・孫安石編『中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海』（御茶の水書房、2006 年 3 月）として出版し、2006 年 4 月から新たな調査を始めた。以下、2007 年 4 月以降の研究活動について記す。

① 2007 年 5 月 23 日（水）租界史研究会例会を開催。



② 2007 年 7 月 17～18 日（水）租界史研究会—朝日新聞大阪支局・富士倉庫の戦前写真

【場所】朝日新聞大阪本社（現地集合）

【日時】2007 年 7 月 18 日（火）午前 9 時—午後 5 時

【内容】朝日新聞大阪支局・富士倉庫の戦前写真資料の調査



③ 2007 年 7 月 22～27 日（金）租界史研究会—青島の在華紡関連社宅の建築調査

【場所】中国青島（青島市档案馆、旧公大紗廠の社宅調査）

【日時】2007 年 7 月 22 日（日）～27 日（金）

【内容】(1) 青島市档案馆が所蔵する旧日本人関係の資料調査

(2) 青島の旧公大紗廠社宅の建築調査



④ 2007 年 7 月 22～27 日（金）租界史研究会—長春の旧満鉄附属地の調査

【場所】中国長春（吉林大学、吉林省档案馆など）

【日時】2007 年 7 月 22 日（日）～27 日（金）

【内容】吉林大学、吉林省档案馆などが所蔵する満鉄関連資料の調査



⑤ 2007 年 10 月 26 日（金）

ワークショップ「中国進出の日本企業とその建築―戦前の紡績業を事例として」

【場所】 神奈川大学・横浜キャンパス 1 号館 308 室

【日時】 2007 年 10 月 26 日（金）14 時～16 時

【主催】 神奈川大学・共同研究「戦前中国・朝鮮における日本租界の研究」

司会：大里浩秋（神奈川大学）

報告：

- (1) 「上海と青島の在華紡建築の調査報告」 富井正憲（神奈川大学）
- (2) 「日本の紡績建築―兵庫県を中心に」 藤谷陽悦（日本大学）
- (3) 「在華紡と中国」 富澤芳亜（島根大学）
- (4) 「近代日本の青島での紡績業及山東経済の変遷」 庄維民（山東省社会科学院）

コメンテーター：貴志俊彦（神奈川大学）・孫安石（神奈川大学）

⑥ 2007 年 12 月 13 日（木）

【場所】 神奈川大学・横浜キャンパス 17 号館法学部会議室

【日時】 2007 年 12 月 13 日（木）18 時 30 分～20 時 30 分

【内容】

- (1) 事務局打ち合わせ
- (2) 「領事裁判研究の新視点」 中網栄美子 氏（早稲田大学講師・日本法制史）

本共同研究の学内研究奨励は 2007 年度をもって終了する。租界とアジアに関連する本共同研究は引き続き活動を継続すべく学術振興会の科研費を申請中である。学内研究奨励による 2 年間の成果を今後の研究に生かすべく活発な研究活動を展開していきたい。

（孫安石）

奨励共同研究助成グループ活動報告

1. 世界の色の記号に関する実証的研究—自然・言語・文化の諸相—

2. 講演会・研究会の開催

(1) 第1回研究会（打ち合わせ会）

・2007年4月28日（土）13：00～13：40

・17-215室

・公聴会に向けて研究方針を確認した。

(2) 第2回研究会（打ち合わせ会）

・6月29日（金）12：15～14：15

・17-216室（人文学研究所資料室）

・今後の活動方針について確認した。

(3) 第3回研究会（打ち合わせ会）

・7月27日（金）13：00～14：30

・17-216室（人文学研究所資料室）

・今後の活動方針について確認した。

(4) 第1回講演会

・長井淳（東京国際大学・津田塾大学非常勤講師）

・17-215室

・〈光〉の作曲家スクリャーピン—色聴・神智学・象徴主義—

(5) 第2回講演会

・2007年12月5日（水）15：00～16：30

・17-215室

・新山春道

・『源氏』色語り—平安朝の色彩と文化—

(6) 第4回研究会（研究発表会）

・2008年1月23日（水）15：00～18：00

・17-215室

・報告者

1) 矢野博（人間科学部）

「韓国のスポーツ現場における色彩」

2) 彭国躍（外国語学部中国語学科）

「中国語の色彩語彙とメタファー」

3) 星野澄子（人間科学部）

「北欧3カ国4都市（&パリ）に見る色彩とジェンダー」

4) 三星宗雄（人間科学部）

「沖縄の色」

3. シンポジウムの開催計画 なし

4. 上記研究発表会での各発表者の報告書を添付

（三星宗雄）

出張報告

出張目的：韓国スポーツ界におけるユニフォームの色彩に関する調査。

場 所：韓国城南市第2総合運動場及びソウル市

期 間：2007年8月19日～22日

総合運動場の施設を見学したが、時期的にオフシーズンに当たり、調査対象になる事例が少なかった。

数少ない事例の中で、韓国（世界）で最強の「ショートトラック・スピードスケート」チームの練習を見学したが、ユニフォーム、練習着など日本におけるデザイン、色調と同じであり、違いを見つけることが出来なかった。

ユニフォームについては、現実的には、国際大会などのユニフォームを見ても、その大会の協賛企業の製品を使用している場合が多く、色彩的には国旗の色を基調としている場合が多い。（昨年日本で開催されたバレーボールの国際大会では、日本製のユニフォームが使用された。）

結論を出すのはまだ早いですが、日韓においてはほとんど差が見られなかった。

また、サッカーの競技場を見学したが、競技場及び諸施設などもチーム・カラーを全面に表していた。

雑感として、市街地を移動中に観た景観では、街全体がカラフルであり、原色に近い色遣いであった。なかでも戸建ての屋根、ガソリンスタンドなど青色系が多く感じられた。

公共の自動車（バスなど）は、原色が多く目立つ存在である。自家用の自動車においては、黒色が圧倒的に多く、赤系はほとんど見る事がなかった。

今後は、従来のオレンジ系のアンツーカー陸上競技場と最近増えているブルー系のアンツーカーとを比較研究をしたい。

「アンツーカーの色の違いと選手の感覚について」

・利用者の感覚として

- 1) 走った感覚……季節、時間帯、距離感など
- 2) 記録（タイム）について……向上？
- 3) 従来のアンツーカー、土との比較
- 4) 設置者、施工業者の意識、ねらいなど

矢野 博

「中国語の色彩語彙とメタファー」に関するデータ整理 ——神奈川大学共同奨励研究の中間報告——

彭国 躍

本研究は、中国語における色彩語彙のメタファー表現に関する研究である。440 枚の実用色彩カードの色彩の命名傾向を分析することにより、中国語色彩命名におけるメタファー表現の特徴とその社会的、認知的背景について考察する。以下は現段階でのデータの収集と分類の中間状況の報告である。

1. 植物によるメタファー

表 1.1 植物関連基礎データ分類表

花 (58)	137. 浅荷红, 138. 初荷红, 139. 荷红, 307. 荷叶绿, 424. 荷花白 / 431. 浅莲灰, 169. 青莲, 194. 淡莲, 195. 浅莲, 170. 青莲紫, 173. 浅红莲灰 / 102. 老玫瑰, 103. 玫瑰红, 131. 红玫瑰, 104. 深玫瑰, 154. 紫玫瑰, 155. 玫瑰灰, 140. 鲜玫瑰紫, 141. 玫瑰紫, 142. 深玫瑰紫, 100. 月季红 / 86. 淡洋水仙红, 87. 浅洋水仙红, 88. 洋水仙红 / 175. 牵牛紫, 152. 牵牛莲, 119. 玫紫灰, 177. 深牵牛紫, 178. 暗牵牛紫, 198. 牵牛花紫, 252. 牵牛花蓝 / 27. 向日黄, 378. 秋葵黄, 9. 葵扇黄 / 190. 堇色, 191. 鲜堇色 / 70. 浅石竹, 71. 石竹红 / 89. 樱桃红 / 11. 桂花黄 / 176. 鸟梅紫 / 73. 浅山楂红 / 206. 竹月 / 75. 蒲红 / 109. 山茶红 / 45. 雄精 / 130. 紫荆红 / 132. 鲜紫荆红 / 253. 鸢尾蓝 / 160. 浅凤仙紫 / 389. 芥黄 / 63. 榴花红 / 143. 鸡冠花红 / 144. 石竹紫 / 224. 浅花青, 225. 花青 / 333. 槐花黄绿
樹木 (29)	23. 黄棕, 19. 浅藤棕, 22. 咖棕, 124. 浅棕色, 156. 中紫棕, 372. 棕叶绿, 373. 棕榈绿, 386. 深桐绿 / 179. 薄藤, 204. 青藤, 168. 红藤, 426. 淡紫藤, 181. 藤紫, 186. 藤萝紫 / 354. 橄榄石灰, 362. 橄榄绿, 363. 灰橄榄绿, 344. 橄榄黄绿 / 189. 桔梗紫, 180. 浅桔梗紫, 197. 山梗紫 / 351. 浅香樟绿, 353. 香樟绿 / 215. 柏林蓝 / 375. 松烟 / 69. 深桧皮 / 123. 深苏木紫 / 187. 浅槿紫 / 6. 明槐黄,
果物 (21)	38. 浅桔黄, 48. 鲜桔红 / 51. 深橙, 53. 黄橙, 43. 粉橙色 / 49. 柿红, 44. 浅柿子色 / 84. 枣紫 / 7. 芒果黄 / 29. 杏黄, 47. 杏红 / 67. 栗壳色 / 126. 葡萄紫, 165. 深葡萄紫 / 356. 杨桃色, 357. 暗杨桃 / 388. 木瓜黄 / 313. 浅黄果绿, 314. 中果绿 / 54. 桂圆棕 / 164. 槲汁紫
草類 (18)	320. 草绿, 325. 浅鲜草绿, 326. 中鲜草绿, 327. 鲜草绿, 328. 中草绿, 358. 草灰绿, 387. 草黄, 346. 浅黄草绿, 348. 中黄草绿, 341. 深黄草绿, 381. 中草黄, 349. 黄草绿, 8. 甘草黄 / 324. 芦苇绿, 365. 芦苇黄 / 339. 浮萍绿, 340. 暗浮萍绿, 382. 苔绿, 380. 黄苔绿,
穀物 (14)	5. 麦秆黄, 376. 麦秆草绿, 317. 麦苗绿 / 379. 新禾绿, 172. 浅血糯 / 171. 芋紫 / 117. 红豆沙, 120. 赤豆, 121. 红小豆, 85. 深红豆, 105. 深豆沙, 427. 浅豆灰, 428. 红豆灰, 429. 紫豆灰,
野菜 (14)	200. 茄色, 135. 茄皮紫 / 37. 南瓜黄 / 321. 青豆灰, 52. 缸豆红, 118. 豇豆紫, 111. 扁豆花红 / 150. 苋菜红紫 / 134. 深菱红, 129. 嫩菱红, 133. 菱红 / 335. 葱绿 / 18. 姜茶, 12. 嫩姜黄,
葉っぱ (10)	308. 深叶绿, 343. 嫩芽绿, 359. 芽绿黄, 360. 芽绿, 361. 老芽绿, 367. 嫩叶黄, 368. 三号嫩叶, 369. 二号嫩叶, 370. 一号嫩叶, 383. 枯绿,
茶 (11)	355. 茶绿, 425. 茶白, 392. 茶黄, 398. 淡茶黄, 400. 浅茶黄, 404. 暗茶灰, 25. 浅茶褐, 384. 碧罗春绿, 385. 茶褐, 377. 白茶, 364. 焦茶色,
竹 (4)	291. 竹绿, 345. 箬竹绿, 289. 中竹绿, 290. 鲜竹绿,
他 (6)	166. 淡蓝紫, 188. 龙胆色, 192. 龙胆紫, 211. 靛青, 311. 丛绿, 312. 暗丛绿,

表 1.2 植物名称一覧

花	はす, 睡蓮, バラ, 水仙, 朝顔, ひまわり, すみれ, 石竹, さくらんぼ, 金木犀, 梅, サンザシ, 竹月, 蒲, 山茶, 荊 (いばら), 鶏頭 (けいとう), 鳶尾 (いちはつ), 鳳仙花 (ほうせんか), 芥子菜 (からしな), ざくろ
樹木	棕櫚の木, 藤, オリーブ, 桔梗, 山梗, 香櫨, 柏, 松, 檜, 槐, 蘇木, 槿 (むくげ)
果物	みかん, オレンジ, 柿, なつめ, マンゴ, あんず, 栗, 葡萄, 羊桃, パパイア, 竜眼, 榎 (さわら)
草類	草, 葦, 水草, 苔
穀物	麦, 稲の苗, 赤米, 薩摩芋, 小豆, 小豆あん
野菜	なす, かぼちゃ, 青豆, 豇豆, 扁豆, 苺菜, 菱, 葱, 生姜

表 1.3 植物と色

花	あか, 黄, 緑, あお, 紫, 灰, 白	野菜	黄色, 緑, 褐, 白, 灰
樹木	あか, 黄緑, 緑, あお, ちゃ, 紫, 灰	葉	黄, 緑
果物	あか, 橙, 黄, 緑, 紫, ちゃ	茶	黄色, 緑, 褐, 白, 灰
草類	黄, 緑	竹	緑
穀物	あか, 黄, 緑, 紫, 灰		

2. 程度限定詞のメタファー

表 2.1 程度限定詞基礎データ分類表

浅い	19. 浅藤棕, 21. 浅驼黄, 38. 浅桔黄, 57. 浅香雪, 44. 浅柿子色, 70. 浅石竹, 73. 浅山楂红, 87. 浅洋水仙红, 95. 浅水红, 124. 浅棕色, 107. 浅红, 137. 浅荷红, 151. 浅牵牛莲, 160. 浅凤仙紫, 172. 浅血糯, 173. 浅红莲灰, 195. 浅莲, 227. 浅蓝紫灰, 180. 浅桔梗紫, 216. 浅海昌蓝, 246. 浅海天蓝, 399. 浅水黄, 400. 浅茶黄, 402. 浅暗绿灰, 267. 浅品绿, 268. 浅湖绿, 187. 浅槿紫, 287. 浅鲜绿, 315. 浅翠绿, 233. 浅白群, 417. 浅灰黄, 420. 浅紫驼灰, 421. 浅沉香灰, 422. 浅葵灰, 427. 浅豆灰, 430. 浅紫灰, 431. 浅莲灰, 433. 浅紫头灰, 434. 浅头灰, 437. 浅暗灰, 313. 浅黄果绿, 346. 浅黄草绿, 351. 浅香橡绿, 302. 浅鲜绿, 325. 浅鲜草绿, 409. 浅水灰, 224. 浅花青,
深い	20. 深赭色, 32. 深土黄, 51. 深橙, 65. 深锈红, 69. 深桧皮, 83. 深木红, 85. 深红豆, 94. 深红, 104. 深玫瑰, 105. 深豆沙, 123. 深苏木紫, 98. 深水红, 134. 深菱红, 142. 深玫瑰紫, 163. 深红光紫, 165. 深葡萄紫, 177. 深牵牛紫, 184. 深紫, 243. 深月, 245. 深军蓝, 275. 深海绿, 284. 深青, 285. 深宝蓝, 305. 深宫殿绿, 308. 深叶绿, 226. 深青灰, 271. 深湖绿, 414. 深冬灰, 438. 深鼠灰, 298. 深飞泉绿, 300. 深铁绿, 341. 深黄草绿, 323. 深油绿, 332. 深黑绿, 386. 深桐绿,
真ん中	30. 中鹅黄, 31. 中土黄, 81. 中水红, 97. 中水红, 156. 中紫棕, 182. 中紫, 234. 中白群, 250. 中孔雀蓝, 269. 中湖绿, 289. 中竹绿, 303. 中鲜绿, 304. 中绿, 294. 中蓝绿, 348. 中黄草绿, 350. 中山鸫色, 326. 中鲜草绿, 328. 中草绿, 314. 中果绿, 381. 中草黄 / 74. 正红
鮮やか	99. 鲜水红, 132. 鲜紫荆红, 140. 鲜玫瑰紫, 162. 鲜红光紫, 191. 鲜堇色, 209. 鲜品蓝, 183. 鲜紫, 174. 鲜紫, 48. 鲜桔红, 213. 鲜蓝, 214. 鲜宝蓝, 238. 鲜靛蓝, 239. 鲜绀青, 278. 鲜绿, 290. 鲜竹绿, 327. 鲜草绿, 338. 鲜鹦鹉绿 / 33. 艳黄,
淡い	4. 淡黄, 10. 淡蜜黄, 39. 淡肉灰, 86. 淡洋水仙红, 106. 淡粉红, 194. 淡莲, 147. 淡青莲, 166. 淡蓝紫, 426. 淡紫藤, 405. 淡紫粉, 406. 淡银灰, 407. 淡冬灰, 408. 淡灰, 247. 淡灰蓝, 232. 淡蓝, 398. 淡茶黄, 410. 淡蓝灰,
暗い	68. 暗猪肝色, 158. 暗紫酱, 185. 暗紫, 178. 暗牵牛紫, 193. 暗蓝紫, 220. 暗绀青, 329. 暗草绿, 331. 暗油绿, 312. 暗丛绿, 340. 暗浮萍绿, 357. 暗杨桃, 374. 暗海水绿, 393. 暗黄茶, 274. 青光暗松绿, 404. 暗茶灰,
若い	12. 嫩姜黄, 129. 嫩菱红, 336. 嫩黄绿, 337. 嫩绿, 343. 嫩芽绿, 367. 嫩叶黄, 368. 三号嫩叶, 369. 二号嫩叶, 370. 一号嫩叶 / 359. 芽绿黄, 360. 芽绿 / 345. 箬竹绿 / 293. 娇绿,
古い	14. 老黄, 102. 老玫瑰, 322. 老绿, 361. 老芽绿 / 79. 退红 / 394. 古铜褐,
白味	42. 粉红, 43. 粉橙色, 55. 粉白, 108. 粉红, 128. 粉凤仙, 3. 乳黄色,
濃い	202. 浓蓝紫, 92. 浓红,
その他	6. 明槐黄 / 26. 浊黄 / 80. 真朱 / 138. 初荷红 / 210. 远天蓝 / 179. 薄藤,

表 2.2 程度限定詞と色

浅い	あか, 黄, 緑, あお, 紫, 茶色, 灰, 白	古い	あか, 黄, 緑, 褐
深い	あか, 橙, 黄, 緑, あお, 紫, 茶色, 灰	白みの	あか, 橙, 黄, 白
中	あか, 黄, 緑, あお, 紫, 茶色, 白	濃い	あか, 紫
鮮やか	あか, 黄, 緑, あお, 紫	明るい	黄
淡い	あか, ピンク, 黄, あお, 紫, 灰	淀んだ	黄
暗い	緑, あお, 紫, 茶色, 灰	遠い	あお
若い	あか, 黄, 緑		

3. 動物によるメタファー

表 3.1 動物の基礎データ分類表

鳥類	250. 中孔雀藍, 251. 孔雀藍, 255. 灰孔雀藍, 257. 孔雀青 / 319. 鸚哥綠, 334. 鸚鵡黃綠, 338. 鮮鸚鵡綠 / 28. 鵝黃, 30. 中鵝黃 / 390. 山鷄黃, 391. 山鷄褐 / 90. 鶴頂紅 / 153. 鴛鴦紅紫 / 218. 翁鳥藍 / 231. 鴿藍灰 / 350. 中山鳩色,
哺乳類	21. 浅駝灰, 50. 駝紅, 419. 駝灰, 420. 浅紫駝灰 / 403. 鼠毛灰, 432. 銀鼠, 438. 深鼠灰 / 2. 象牙, 397. 象牙黃 / 413. 水貂灰 / 68. 暗猪肝色 / 101. 猩血紅,
貝類	159. 青蛤壳紫, 1. 蛤粉, 59. 紅扇貝色,
其他	288. 蛙綠, 366. 蝶黃, 58. 珊瑚紅,

表 3.2 動物の種類一覧

鳥類	孔雀, インコ, ガチョウ, 鶏, 鶴(頭部), オシドリ, ウミドリ, 鳩, 山鳩
哺乳類	ラクダ, 鼠, 象(牙), ミンク, 豚(肝), 猩猩(血),
貝類	ハマグリ(殻), 帆立貝,
両棲類	蛙
昆虫	蝶
その他	珊瑚

4. 鉱物・土石によるメタファー

表 4.1 鉱物, 土石の基礎データ分類

宝石類	13. 黄琉璃, 15. 琉璃色, 217. 琉璃色, 17. 琉璃黄, 258. 玉钗蓝, 114. 尖晶玉红, 318. 玉髓绿, 34. 琥珀色, 279. 宝石绿, 241. 青宝蓝,
金属類	219. 钢蓝, 299. 铁灰, 300. 深铁绿, 352. 铜绿色, 394. 古铜褐, 60. 银朱, 72. 银红, 35. 金黄, 229. 青金色, 65. 深锈红, 221. 钛青, 412. 鎔灰, 254. 中钴蓝, 277. 青矾绿
土砂石類	16. 黄土色, 36. 土布色, 78. 朱砂, 82. 土红, 276. 石绿, 286. 玻璃绿, 306. 青磁色, 401. 黄瓦灰, 411. 灰大理石,

表 4.2 鉱物・土石の一覧

宝石類	琉璃, 玉, 琥珀, 翡翠, サファイア
金属類	金, 銀, 銅, 鋼, 鉄, チタン(钛), 錫(鎔), コバルト(钴), ジョウバン(矾)
土砂石類	土, 砂, 石, ガラス, 青磁, 瓦, 大理石,

参考文献

中国流行色協会 1991 《实用定名色卡 续 1》中国流行色協会出版

人文学研究所 共同研究奨励研究（三星グループ）

北欧3カ国4都市（&パリ）に見る色彩とジェンダー

人間科学部 星野 澄子

I 調査目的・調査期間・調査地 etc. について

昨年（2007）9月8日（土）から9月14日（金）の6泊7日にわたって、私は「男女共同参画社会先進国にみる色彩によるジェンダーの記号化（ジェンダー・カラー）の払拭状況および斬新な試み」について眼に触れ、日本の現状に新しいセンスを取り込むための手がかりを得るべく、ノルウェー（ベルゲン、オスロ）およびフィンランド（ヘルシンキ）で調査を行ってきました。

実はその前日（9月7日（金））まで、パリおよびコペンハーゲンで学内別枠予算による他の研究目的のための調査に従事しており、聞き取り調査のない日時や交通機関利用の合間をみつけてこのテーマに沿った調査も心がけてきたという事情があるところから、パリおよびコペンハーゲン滞在中に得られた調査結果も併せ、5都市分を総合的にまとめて研究報告いたします。

II 公共機関におけるトイレの表示—ジェンダーの視点から色彩およびマークを検証する

研究発表としては大きな題を掲げましたが、私がここ数年にわたって追いつけているテーマの1つは、トイレの表示をめぐる色彩面でのジェンダー研究なのです。

これから、出張中に写した写真をお示ししますので、今まで日本社会で《当たり前》と思って見過ごして来たことが、世界では少しも当たり前でないことを感じ取っていただきたいと思います。

(1) 「男はブルー／女はピンク」は1例のみ

[1578], [1579], [1580] は、9月14日（金）日本に戻ってきたときにJR三鷹駅構内で写したものです。成田空港に着いた途端に再び目にするようになった光景ですが、成田では写真を撮る時間がなく代わりに三鷹駅で写しました。女性トイレはピンク、男性トイレはブルーで色分けされています。

では、他の国ではどうなっているのでしょうか。実のところ今回の出張期間中に、日本のように男女でそれぞれ色分けしているケースを見たのは、次の1例に過ぎません。

[1002], [1003] は、パリ、オペラ座近くの中華レストランで目にしたものです（07/09/03）。

(2) 水分の摂取も排泄も有料

[1460] は、ヘルシンキにある郵便局内ムーミンショップで写したもので（07/09/12）、1ユーロ（滞在時、1ユーロ＝170円）の文字が読めます。パリでも同じく1ユーロであり、デンマーククローネでもノルウェークローネでもトイレの使用料金にはほぼ同じ金額を必要としました。

日本人は長い間、「水はタダ」と思ってきました。かつて小さい頃ヨーロッパでは「水が有料」と聞かされたときは驚きましたが、日本でも近年はペットボトルが普及し、水の有料は当たり前になってきています。他方、トイレについては一部の有料トイレを除き、日本では駅など公共施設にはトイレが完備され、無料です。「臭い、汚い」イメージだった駅のトイレも、ずいぶんきれいになりました。仕事のストレスなどから神経性の腸炎を起こしやすい体質の通勤者にとっては、どこで途中下車しても駅のホーム近くにトイレがあるのは心強い味方です。けれど不思議なことに、合計特殊出生率が2に迫る勢いで福祉が充実している北欧の都市やパリでは、ホテルやレストラン、美術館などお金を支払う施設ではトイレは利用できますが、トイレだけを使うのが目的のときはほとんど例外なく、有料なのです。運

賃を払って乗車する地下鉄や国鉄の駅などでもトイレは皆無か、あったとしても有料です。パリのメトロは、まず回転式バーと背丈まである扉という二重構えの改札口が弱者に冷たく感じられ、エスカレーター、エレベーターなし（私が見た限り1駅だけあった）、それにトイレもなし、という状態でこれに不安を感じるフランス人はいないのかと不思議な気がします。水分の摂取が有料なら、排泄も有料なのだ！と実感しました。

(3) 男女ともグリーンで統一されたトイレ

[0935], [0946] は、オペラ座通り街路樹の中に設置されている男女共用トイレです (07/09/01)。マークは男女ともグリーンで、ここでは「Toilettes / Accès gratuit」(トイレ／無料)」と記されています。

[1014] は、国鉄サン・ラザール駅で目に止まったトイレの案内板です (07/09/04)。「RELAIS TOILETTES」と書いてある「relais」は「リレー」ですが、ここでは「休憩室」という意味でしょう。男を●と▼との2つの組み合わせで、女を●と▼と▲との3つの組み合わせで表示しているところに注目してください。「男はズボン／女はスカート」という西洋服のジェンダーに由来するマークを使わずに、生物学的性差を記号化して男女を示しており、パリと北欧4都市を通して見たただ1つの例でした。これは、日本で改正点を考えるときにぜひ参考にしたいと思います。

(4) 男女&身障者用がすべてオレンジ色で統一されたトイレ

[1079], [1080], [1081] は、シャルル・ド・ゴール空港内にあるトイレです (07/09/06)。ここには、「オレンジは女性用」という発想は全くありません。子どものおむつを換えているらしい母親の姿も写っています。

(5) 男女とも茶系色のタイル貼りのトイレ

[0972] は、パリの「Palais de Justice (裁判所)」にある無料の公共トイレです (07/09/02)。日本では、男性用トイレはブルー、女性用はピンクのタイルを使ってあることがほとんどですが、パリではこのように、同じ色が使われています。

(6) 男女ともブルーで統一されたトイレ

[1037], [1038] は、パリのUNA (全国介護サービス協会) で聞き取り調査を終えて帰ろうとしたとき、ふと気づいて写真を撮ることを許可してもらい写したものです (07/09/05)。大きく書かれた文字、「messieurs (monsieur 男性の複数形)」と「dames (女性の複数形)」の横に、小さなシルエットが描かれていますが、ズボン姿の男性が「休め」の形で脚を開いているのが特色ともなっています。パリとコペンハーゲンでは、日本では今まで見たことがなかった脚を開いた立ち姿の男性のマークを数回見ました。

[1001] は、パリのホテル・ロートレックオペラのロビーで見たマークです (07/09/03)。女性のスカート丈が短く、張りすぎているのが女性らしさを強調するようで気になります。

[1139] は、ベルゲン／フレスランド空港内で見たマークです (07/09/08)。向かって左から、女性、男性、車イスのマークが同一のブルーで描かれています。

[1207] は、ベルゲンのフィヨルド・クルーズ船内で見たマークです (07/09/09)。女性、男性がブルーで描かれています。

[1278], [1279], [1280] は、ベルゲン／フレスランド空港内で見たマークです。3つともドアの色は薄めのブルー、マークは紺で統一されています。(07/09/10)。

(7) 男女とも濃いグレーで統一されたトイレ

[0971] は、[0972] と同様、パリの「Palais de Justice (裁判所)」にある無料の公共トイレです (07/09/02)。2方向から見えるよう、2枚の表示板が架かっていますが、図柄も色も少し違っていることに気づくでしょう。階段を下りようとしたときに見る方の位置にある表示板は、脚を広げた立ち姿の

男性の図柄になっています。

[1049] は、パリにあるレストラン内のマークです (07/09/05)。男性用は省きましたが、全く同じ色でした。

[1276] は、ベルゲン／フレスランド空港内で見たマークです (07/09/10)。向かって左から、ミルクびん、女性、男性、車イスが同じ色で描かれています。

[1384], [1385] は、ヘルシンキ空港内トイレのマークです (07/09/11)。上着とズボン・スカートとの間に線が入っているマークは、ヘルシンキでのみ、初めて見ることができました。茶色の木目のドアに透明の亚克力板に描かれたマークが貼ってあり、センスに新鮮な驚きを覚えました。

(8) 男女とも白いマークや文字が用いられているトイレ

白い文字のトイレの話に入る前に、[1058] の、パリの Champ-Élysées (シャンゼリゼ通り) の白っぽい建物を見てみましょう。この通りでは建物に色彩を用いることは規制を受け、文字も白で書かれています (07/09/06)。

[0978] は、パリにある小さな公園内トイレのマークです (07/09/02)。地にはグリーンが用いられていることも注目されます。

[1100] は、コペンハーゲン市役所内トイレのマークです (07/09/07)。歴史的建築物を市役所に利用しているため、木の暖かさが感じられるトイレとなっているのでしょうか。

[1046] は、パリのショッピング街にある建物内トイレのマークです (07/09/05)。地にエンジ色を用いているのを見たのは、このときだけでした。

[1349], [1350] は、オスロのムンク美術館内トイレのマークです (07/09/11)。地には藍色を、さらに3分の1幅で上部にグレイを用いており、細く赤い線を入れているところにも細やかなセンスを感じます。一応観終えてあともう少しというところで緊急警報が鳴り響き、点検のため館内から出されてしまい、ムンクの「叫び」が盗難にあったときのことを想像することにもなりました。

[1386] は、ヘルシンキ空港内トイレの案内板です (07/09/11)。男女とも胴の部分に線が入っているのは、ヘルシンキのトイレにだけ見られる特徴です。

[1410] と [1411] は、ヘルシンキの《スカンディック・コンチネンタル》ホテル内トイレのマークです (07/09/11)。ここでも服を着た人のマークは、胴の部分に線が入っているという特徴を具えています。光線の加減でしょうか、白というよりは金茶に見えます。

[1459] と [1461] は、ヘルシンキの郵便局内ムーミンショップにあるトイレのマークです (07/09/12)。マークの下に貼ってある紙には、「OUT OF ORDER (故障中)」の文字が見えます。初めてお見せしたように、このトイレを利用するときには、「1 ユーロ」が必要です。

[1560] と [1561] は、トランジットのため経由したフランクフルト空港内トイレの案内板です (07/09/13)。色は違いますが、パリで見た [1001] と全く同じシルエットで、女性のスカート丈および張り方は、女性らしさを強調しているように感じます。

Ⅲ 公共機関におけるトイレの表示—ジェンダーの視点から見た変化

(1) 人物像や男女に象徴的な歴史的グッズの図柄などが用いられているトイレ

[0981] と [0982] は、パリのリュクサンブール公園前にあるカフェテリア地下1階にあるトイレのマークです (07/09/02)。ここにもグリーンが用いられ、「POUSSEZ (押す)」と記されています。

[1178] と [1179] は、ベルゲンのフィヨルド・クルーズ船内トイレのマークです (07/09/09)。伝統的な女性らしさ・男性らしさを強調したジェンダー性の強い図柄と言えるでしょう。「KVINNER」, 「MENN」はそれぞれ、女性、男性を表すノルウェー語でしょうか。

[1262] と [1263] は、ベルゲンのグランド・テルミナスホテル内トイレのマークです (07/09/10)。

男女ともに黒っぽい、ジェンダーを強調するような西洋服を着ており、「DAMER」「HERRER」の文字が付されています。

[1307]と[1308]は、初めて夕食にreindeer（トナカイ）とcatfishのお料理を注文した、オスロのレストラン内トイレの図柄です（07/09/10）。ここにも「DAMER」「HERRER」の文字が付されています。女性用には、当時の美の基準に適合するよう身体を締め上げたコルセットが、男性用には外出時の帽子が描かれています。このような図柄を見ると、ヨーロッパ社会のトイレは、身体をきれいに整え、広義の化粧をするための場だったことが窺えます。ちなみに日本の住宅では、洗面所、風呂場が分かれて隣接し、さらに家の端の離れた場所に廁があって、その「廁」が「便所」を経て今ではほとんど「トイレ」「化粧室」「お手洗い」などと呼ばれるようになりました。「便所」を「お手洗い」や「化粧室」と呼び変えるのは、遠まわしの婉曲的な言い方なのではなく、ヨーロッパ社会の広義のトイレ（Toilets, Toiletttes, Toiletten）の構造から導かれる用語であることが、オスロでコルセットのマークを見てさらに納得できました。

[1516]と[1517]は、ヘルシンキ市内にある大聖堂内トイレの文字です（07/09/13）。「D」と「M」の文字のみが付されている無味乾燥なものです。

(2) 男性が脚を開いた立ち姿のマークのあるトイレ

[1069]は、パリのメトロ、フランソワ・ミッテラン広場（place）駅に珍しくあったトイレのマークです（07/09/06）。けれど壊れていて使えない状態でした。脚を開いた男性の立ち姿は、明確に男性と分かる良いデザインだと思います。

[1133]は、コペンハーゲン空港内トイレの案内標識です（07/09/08）。濃いグレイ地に黄色で描かれた脚を開いた立ち姿の男性と隣に並ぶ女性。一瞥して分かります。男女色分けを必要としません。

[1083]も、コペンハーゲン空港内トイレの案内標識です（07/09/06）。現代では、女性もズボン（パンツ）を着用することが多くなり、ズボン姿を男性の属性とすることには問題があります。けれどパリとコペンハーゲンで脚を開いた立ち姿のマークを目にしたときから、これならズボンを履いても男性の生物学的性差は表れていると実感しました。パンツスーツ着用の女性がこのような姿勢をとることは、ほとんど考えられないからです。女性がスカート姿らしいのはやや気になるところですが、スパッツやジーンズとスカート状のものを重ね合わせて着る《埴輪ちゃんルック》を、おしゃれと実用を兼ねて楽しむこともあることを考えると、このマークが直ちに、「女性とは、スカートを着用する人のこと」という発想には繋がらないでしょう。ほぼ2週間にわたってヨーロッパでトイレ関連の数多くの色彩とマークを観察してきて、これが最も良いアイデアであると現時点では考えています。

IV 結び

数年前まで日本社会で、学童のランドセルの色は、《男の子は黒／女の子は赤》と決められていました。けれど、赤と黒は特別な色です。スタンダール著『赤と黒』において、赤は高僧を表し、黒は軍人を表しており、野心に富んだ主人公、ジュリアン・ソレルがどちらの道を歩むのか、2つの道を暗示しています。また、黒は喪服の色でもあり、赤は警戒色、婚姻色を表すものでもあります。世界的に見てこのような特別の色を、日本社会で《男女別・色分けシステム》に用いるのは妥当性を欠くものと言わざるを得ません。さいわい、ランドセルについては2色の強制はなくなりつつありますが、トイレや旅館の風呂場の表示では今なお、赤と黒、エンジと紺などの2色によって男女を識別しています。

ピンクとブルーというジェンダー・カラーによる男女区分けシステムは、日本社会に蔓延する悪しき慣行であり、次世代の子どもたちにとって乳幼児期からの色彩感覚の発達を阻害するものであることは否定できません。男女の識別を必要とするとき、安易に2色で分ける日本的慣行が改められることを切に願うものです。



1578, 1579, 1580 : 9月14日 (金)
帰国後すぐに写した三鷹駅
構内のトイレのマーク



1002, 1003 : 9月3日 (月)
オペラ座近くの中華レストラン (パリ)



1460 : 9月12日 (水)
ヘルシンキの郵便局ムーミンショップで



0935, 0946 : 9月1日 (土)
パリ, オペラ座通りにある公共の男女共用トイレ 街路樹の間に
ある。男女色分けはない。



1014 : 9月4日 (火) 国鉄サン・ラザール駅にて
男女色分けによるジェンダーも西洋服 (男はズボン, 女はスカ
ート) によるジェンダーも持ち込まず, 生物学的性差をデザイ
ン化した最高のアイデアと思う。



1079, 1080, 1081 : 9月6日 (木)
パリのシャルル・ド・ゴール空港にて



0972 : 9月2日 (日)
パリの Palais de Justice (裁判所) にて
男女とも茶系色のタイル貼りになっている。



1037, 1038 : 9月5日 (水)
パリのUNAにて
男女ともブルーで文字のみ



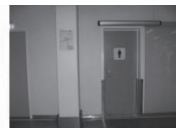
1001 : 9月3日 (月)
パリ, ロートレックオペラHロビー内



1139 : 9月8日 (土)
ベルゲン空港内



1207 : 9月9日 (日)
ベルゲン, クルーズ船内



1278, 1279, 1280 : 9月10日 (月)
ベルゲン空港内で



0971:9月2日 (日)
0972 と同様 Palais de Justice 内のトイレの表示



1049 : 9月5日 (水)
パリ, 夕食を摂ったレストランにて



1276 : 9月10日 (月)
ベルゲン空港で



1384, 1385 : 9月11日 (火)
ヘルシンキ空港で



1058 : 9月6日 (木)
パリ, シャンゼリゼ通りの白い文字



0978 : 9月2日 (日)
パリにある小さな公園内のトイレ



1100 : 9月7日 (金)
コペンハーゲン市役所で



1046 : 9月5日 (水)
パリのショッピング街にある建物内のトイレのマーク
エンジ色の地はこれだけ



1349, 1350 : 9月11日 (火)
ムンク美術館内



1386 : 9月11日 (火)
ヘルシンキ空港で



1410, 1411 : 9月11日 (火)
ヘルシンキのホテル (コンチネンタル) 内で



1459, 1461 : 9月12日 (水)
郵便局ムーミンショップにて。このトイレの使用には1ユーロ
が必要 (でも, OUT OF ORDER の貼り紙が…)





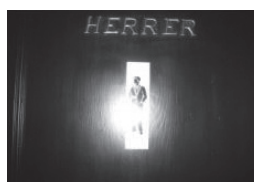
1560, 1561 : 9月13日 (木)
トランジットのフランクフルト空港で



0981, 0982 : 9月2日 (日)
パリのリュクサンブール公園前にあるカフェテリア地下1階にあるトイレのマーク「POUSSEZ (押す)」の文字が。



1178, 1179 : 9月9日 (日)
ベルゲン, クルーズ船内



1262, 1263 : 9月10日 (月)
ベルゲンのホテル (グランド・テルミナス) 内で



1307, 1308 : 9月10日 (月)
オスロのレストラン 男性用 (左) 女性用 (右)



1516, 1517 : 9月13日 (木)
ヘルシンキ市内の大聖堂にて



1069 : 9月6日 (木)
メトロ, F. ミッテラン広場駅で。ただし故障中。



1133 : 9月8日 (土)
コペンハーゲン空港内のトイレの案内標識



1083：9月6日（木）コペンハーゲン空港内トイレの案内標識
男性が脚を開いた立ち姿
パリとコペンハーゲンの何箇所かで見た。この男性と女性のマークが一番すぐれていると思う。

出張報告

沖縄の色

三星宗雄

＊この報告書の内容は1月23日（水）に開催された第1回研究発表会での発表内容に基づいている。また同名の題目で、人文学研究所報第41巻に投稿した。したがってここでの報告は最小限度に止める。

今回の調査の目的は、沖縄における自然環境および建築物等における色彩の特徴を抽出し、それらと沖縄の歴史および文化との関連性について明らかにすることであった。基本的には写真撮影によった。重要と思われる部分については、持参した「JIS色名帳（系統色名）」を用いて測色した。また必要に応じて測色時の照度を持参した照度計（ミノルタ T-10）を用いて測定した。

以下結果について記す。図表、画像についてはこの巻に掲載されている論文を参照して欲しい。

1. 沖縄の自然環境

(1) 植生

フクギ（福木）に注目した。フクギはフィリピンや台湾原産の常緑高木で、沖縄では家の周りに植えられ、防風林、屋敷林として用いられている。光沢のある、肉厚の緑の葉は冬でもボリュウムがあり、その存在感を感じさせた。5月ごろクリーム色の小さな花をつけ、その花が落ちて、庭と垣根を越えて外側の道路を埋め尽くす。うっすらと黄緑色に変わった道路はじゅうたんのようで、土足で歩くことが躊躇されるほど軟らかいという。実は6月ごろにでき、直径6cmぐらいで、熟するとちょうどカキに似ているという（安間、2007）。ぜひ一度体験したいものである。

ススキの多さが目についた。沖縄のススキは、関東近辺でみるものに比べやや灰色がかっており、花の形もやや異なるようだ。沖縄のススキがこのような蔓延しているとは予想外であった。ススキは沖縄本島よりもさらに南の石垣島でも、原を形成するほど繁茂している（安間、2007）。チガヤも多い。またリュウキュウマツ（県木）もそこいらに見られた。私たちにはなじみ深いブーゲンビリアやハイビスカスなどの花はいたるところに見られた。沖縄を代表する特産物であるパイナップルとサトウキビの花は、残念ながら時期的に見ることができなかった。いずれも花の色は白である。

こうした植生は以前訪れたアマゾン河流域とは明らかに異なった印象であった（三星、1993）。熱帯と亜熱帯という気候帯の違いがあるかも知れないが、沖縄の植生は明らかに日本とのつながりを強く感じさせた。11月下旬で少し早かったせいか、山には紅葉はほとんど見られなかった。ハゼノキのような紅葉する落葉樹もあるようだが、目立っていない。

こうしたススキ、パイナップル、サトウキビの白い花、および屋敷林としてのフクギの緑色は明らかに沖縄の風土色となっている。ちなみに那覇市都市計画部都市デザイン室によると、市民によるアンケート調査から、那覇市の「まちの色」を白と定めているという（山川、1999）。

(2) 沖縄石灰岩とサンゴ

植生以外で目立つ自然環境では、やはり同じ白の沖縄石灰岩とサンゴの死骸からなるビーチであろうか。石灰岩は純粋な白ではなく、黄白色と言われる、黄色と白とが微妙に入り混じった、ややデコボコがある材質である。水底に積もった動物の殻や、骨などが素材となり、長い時間をかけて形成されたとされる（村山、1999）。建築物ばかりでなく、家屋を囲む石垣や道路の材料として用いられる。ただ今日建築される家屋は99%コンクリート造であるという。しかし、その外壁の色は明らかに沖縄石灰

岩の黄白色を志向している。

沖縄を象徴するあの白い砂浜は実は「砂浜」ではなく、「サンゴ（の死骸）浜」であった。こちらの白は「真っ白」である。

2. 建築物

(1) 赤瓦

沖縄の街並みを彩る色は赤瓦の赤である。瓦屋根が平民に許されたのは明治以降であり、しかも最初は灰瓦が多かったという。しかし現在では赤瓦が主流である。赤瓦と言ってもその色には、赤～黄赤まで多少幅がある。

高層とまではいかないが、いくつかなり高いマンションを見た。しかし、街中と郊外を問わず、必ずといっていいほど、屋根が、しかも赤瓦またはそれを志向した赤い屋根をいただいていた。その光景は必ずや見る人の目を和ませているに違いない。建築物の高さに対するある種の補正となっているようだ。

首里城から那覇の街並みを見下ろすと、赤瓦の色が散在するのが見える。赤瓦で埋め尽くされているわけではないが、360度にわたって視界に入ってくると、そこにはやはり統一感が感じられる。

(2) シーサー、ヒンプン、石巖当、亀甲墓

これらは風水思想によるものとされるが、筆者には造形物として、ある種のアート性、遊び、精神性が感じられた。それらは昨夏ロンドンで見た、アート性の強い橋桁や欄干の橋や彫刻のある、道路端の「単なる」ベンチを思い起こさせた。上に述べた瓦屋根などもアート性を含んだ造形物である。ある大きな警察署で、そのエントランスになだらかな曲線を描いた、唐破風状の「向拝」をいただいているのを見た。しかも建物全体がうすい青色なのである。遊びどころ十分である。

風水思想はその空間表現に関して、地を女体・母胎として見立てた大地母神的な信仰から生まれたとする説がある。そうした造形物から醸し出される優しさ、おおらかさ、ゆとりのようなもの。著者にはそれこそが沖縄を象徴する風土と思われるのである。

1. 共同研究奨励金グループ名

二重プロセス理論に基づく総合的な人間行動の理解とその応用に関する実験的研究
～学際的学問分野の開拓と現代社会問題解決のための政策分析の実践～

2. 研究会の開催

第1回研究会

日時・場所：2007年4月19日 神奈川大学 17号館401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

THE ORIGINS AND CONSEQUENCES OF DEMOCRATIC CITIZENS'POLICY
AGENDAS: A STUDY OF POPULAR CONCERN ABOUT GLOBALWARMING.

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Attitudes toward climate change: major emitters in southwestern Kansas

第2回研究会

日時・場所：2007年4月26日 神奈川大学 17号館401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

THE ORIGINS AND CONSEQUENCES OF DEMOCRATIC CITIZENS'POLICY
AGENDAS: A STUDY OF POPULAR CONCERN ABOUT GLOBALWARMING

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Understanding public complacency about climate change: adults' mental models
of climate change violate conservation of matter

第3回研究会

日時・場所：2007年6月14日 神奈川大学 17号館401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

VISCUSI et al. (2006) "The perception and valuation of the risks of climate
change: A rational and behavioral blend", Climate Change77, 151-177.

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

KEAENEY (1994) "Understanding global change: a cognitive perspective on
communicating through stories, Climatic Change 27, 419-441

第4回研究会

日時・場所：2007年6月21日 神奈川大学 17号館401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

Bier (2001) On the state of the art: risk communication to the public

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Seacrest, S., Kuzelka, R. & Leonard, R. (2000)
"Global climate change and public perception"

第5回研究会

日時・場所：2007年6月28日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

I, Lorenzoni, N.F. Pidgeon, R.E. O'Connor (2005) "Dangerous climate change: The role for risk research"

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Sheppard, S.R.J. (2005) "Landscape visualisation and climate change"

第6回研究会

日時・場所：2007年7月5日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

"Do natural science experience influence public attitudes towards environmental problems?"

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

"Experienced-based and description-based perception of long-term risk"

第7回研究会

日時・場所：2007年9月27日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

J. Baron (2006) Thinking about global warming

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

THE GENERATIONAL DIVIDE SUPPORT FOR ENVIRONMENTAL POLICIES: EUROPEAN EVIDENCE JONI HERSCH & W. KIP VISCUSI (2006)

第8回研究会

日時・場所：2007年10月4日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

Leiserowitz (2006) Climate change risk perception and policy preference: the role of affect, imagery, and values

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Lorenzoni, I. & Pidgeon, N. F. (2006). PUBLIC VIEWS ON CLIMATE CHANGE: EUROPEAN AND USA PERSPECTIVES

第9回研究会

日時・場所：2007年10月11日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

Communication and mental processes:

Experimental and analytic processing of uncertain climate information

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Pelling, M. & High, C. (2005). Understanding adaptation:
What can social capital offer assessments of adaptive capacity?

第10回研究会

日時・場所：2007年10月18日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

Public perception of global warming: united states and international
perspective Bord, Fisher, O'Conner (1998)

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Niemeyer, S., Petts, J., & Hobson, K. (2005).
Rapid Climate Change and Society: Assessing Responses and Thresholds

第11回研究会

日時・場所：2007年10月25日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

M.H. Bazaeman (2006) Climate change as a predictable surprise

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Anthony A. Leiserowitz (2005).
American Risk Perceptions: Is Climate Change Dangerous?

第12回研究会

日時・場所：2007年11月1日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

I. H. Langford (2002) An existential approach to risk perception

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Jeffrey K. Lazo, Jaspn, C. Kinnell, and Ann Fisher? (2000).
Expert and Layperson Perceptions of Ecosystem Risk

第13回研究会

日時・場所：2007年11月8日 神奈川大学 17号館 401会議室

議題：アンケート調査の枠組みの検討について

第14回研究会

日時・場所：2007年11月22日 神奈川大学 17号館 401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）

M.T. Boycoff, J.M. Boycoff (2004)
Balance as bias: global warming and the US prestige press

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）

Joe Smith?(2005).

Dangerous News: Media Decision Making about Climate Change Risk

第15回研究会

日時・場所：2007年11月29日 神奈川大学 17号館401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）：温暖化リスク認知

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）：調査デモグラフィック項目

松本 安生（神奈川大学）：政府による温暖化対策

第16回研究会

日時・場所：2007年12月6日 神奈川大学 17号館401会議室

発表者：杉本 崇（神奈川大学非常勤講師）：アンケート調査の質問項目

大高 瑞郁（神奈川大学非常勤講師）：調査デモグラフィック項目

3. 活動内容

メンバー：

松本安生（人間科学部 人間科学科 准教授）

三星宗雄（人間科学部 教授）

坪井雅史（外国語学部 准教授）

渡辺照洋（経済学部 教授）

柴田直子（法学部 准教授）

今年度の研究内容

(1)二重プロセス理論に基づく人間行動の総合的な理解に関する理論的研究

①分析的・理性的な人間行動の解明：これまで主に経済学や社会心理学などの分野で論じられてきた分析的・理性的な人間の意思決定について、既存研究のレビューを行い、その知見を整理した。これらの結果を次年度以降の総合的な人間行動モデルの構築における重要な基礎的知見とする。

②直感的・感情的な人間行動の解明：近年、心理学や社会学、倫理学などの分野で論じられてきている直感的・感情的な人間の意思決定の側面について、既存研究のレビューを行い、その知見を整理した。これらの結果を次年度以降における総合的な人間行動モデルの構築における重要な基礎的知見とする。なお、これらの既存研究のレビューは非常に多岐な分野に及ぶため、効率的な整理のためには、それぞれの分野における専門家の協力のもとで行った。

(2)人間行動の総合的な理解に基づいた、現代社会問題解決のための政策分析に関する実験的研究

①喫煙行動に関する実証データの収集：喫煙行動に関する実態とその意思決定要因について、また現在のたばこ政策がそれらに及ぼす影響について実証的なデータの収集を行った。このため、神奈川大学横浜キャンパス学生を対象としたアンケート調査を行い、その結果について分析を行った。これらの結果を、総合的な人間行動モデルの構築において、それを補完あるいは修正する実証的データとして利用すると同時に、次年度以降に行うたばこ規制政策の設計とその効果を検証するための社会実験における基礎的データとする。

②温暖化防止行動に関する実証データの収集：個人の温暖化防止行動に関する実態とその意思決定要因について、また現在の温暖化防止政策がそれらに及ぼす影響について実証的なデータの収集を行った。このため、一般市民を対象としたアンケート調査を行い、その結果について分析を行った。これらの結果を、総合的人間行動モデル構築において、それを補完あるいは修正するための実証的データとして利用すると同時に、次年度以降に行う温暖化防止政策の設計とその効果を検証するための社会実験における基礎的データとする。なお、これらの市民アンケートについては、回収数及び回収率を確保するために、調査会社のモニターの中から属性に応じた抽出を行い、インターネットによるアンケート調査を行った。

以上

講演会要旨

1. 開催日：2007年5月24日（木）16時20分～17時50分まで
2. 会 場：23号館309講堂
3. 講演者：多賀敏行氏（元バンクーバー領事，現東京都儀典長）
4. テーマ：「外交官が見た日本外交」
5. 要 約：外交官としてヨーロッパ諸国や国連で30年近く活動した多賀氏は，外交官として実際に遭遇した日本と諸外国の慣習をよく理解しないことから生じる軋轢，押しが強い日本外交力の弱さなどをあげ，これらの問題を論じた。そのためには日本をよく知らなければならない。経済発展途上国を援助している日本の資金貢献はアメリカに次いで世界第二位であることなど以外と知られておらず，そういったことを認識すること，ヤマト運やペリカン便，至る所にある自動販売機などは世界のどこにも見られないこと現象であり，日本は世界に稀な安全な国であるとの象徴である。自国をよく知り，外国と上手に付き合う必要性を実感させられた講演であった。

（石井美樹子）

講演会要旨

1. 開催日：2007 年 6 月 27 日（水）
2. 会 場：17 号館 401 号室
3. 講演者：尹慧瑛（一橋大学 COE 研究員）
4. 演 題：「北アイルランドという〈場〉——ポスト植民地主義／紛争の諸課題」
5. 要 約：本報告は、講演者の近著『暴力と和解のあいだ——北アイルランド紛争を生きる人びと』（法政大学出版局、2007 年 3 月）を題材としたものである。本書は、現代社会における暴力と対立を生きるなかで私たちが遭遇する「平和」や「和解」をめぐる問題を、北アイルランドという〈場〉に根ざしながら、とくにマジョリティであるユニオニストの経験を通して考察することを目的としている。

北アイルランドは、イギリスによるアイルランド植民地支配の結果が凝縮された〈場〉であると同時に、30 年以上にわたる紛争によって社会が著しく分断された〈場〉でもある。暴力と分断の克服が課題となってきた一方で、歴史と記憶をめぐる対立や相互不信が「和解」の困難さをことあるごとに示してきた、という。

こうした観点から、報告者は、とくにユニオニズムに注目し、そのマジョリティとしての心性と居場所を確保するためのアイデンティティ・ポリティクスについて議論した。さらに、ポスト植民地主義／紛争の課題として、紛争が終わらない状態のなかで、「平和」が模索されるという現実のなかでの人びとの苦悩、そして移民が存在するなかでのコミュニティ関係のあり方の複雑な様相について議論された。

（文責：永野善子）

共同研究グループ活動報告（2007 年度）

日中関係史

グループ員を中心にして昨年から学内共同研究助成を受けて行ってきた「戦前中国・朝鮮における日本租界の研究」は、今年も引き続き中国現地での調査をし、ワークショップを開催した。詳しくは共同研究の報告を参照していただきたい。また、従来科研費を得て行ってきた中国人日本留学史の共同研究は、06 年で受給が終了したあとも関心を日本人中国留学史へと広げて継続しており、今年は『中国研究月報』07 年 8 月号、9 月号の「中国人日本留学史・日本人中国留学史特集」に論文を発表した。グループ員に限って論文名を上げると次の通りである。

川島真「日本占領期華北における留日学生をめぐる動向」（8 月号所収）

孫安石「戦前の外務省の中国への留学生派遣について—明治・大正期を中心に—」

大里浩秋「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」（以上 9 月号所収）

以下は今年開いた講演会の一覧である。

1. 4 月 25 日、楊曉氏・遼寧師範大学教授「中国教育史研究の現状および中国人日本留学について」
2. 6 月 12 日、今井美樹氏・二胡奏者、藤枝貴子氏・アルパ奏者「二胡とアルパ 2 つの音色」演奏と講演
3. 6 月 20 日、早川秀樹氏・多文化まちづくり工房代表、本学中国語学科卒業生「外国籍住民と共に生きるまちづくり—横浜いちょう団地からの報告」
4. 7 月 4 日、張玉娟氏・上海浦東新区駐在日本経済貿易事務所所長、元本学研究員「上海浦東新区の経済発展計画について」、半澤健市氏・本学歴史民族資料学博士「財界人の戦争認識について」
5. 11 月 21 日、楊中美氏・本学非常勤講師「中国共産党第 17 回大会と日中関係の今」

（大里浩秋）

文化のかたち

活動内容：

今年度は、メンバー各自が自身の研究対象に対する調査・考察を深めていった。2 月（あるいは 3 月）に研究会を行い、今年度の各自の成果を報告する予定である。

今後さらに研究活動を活発化させ、叢書としての『文化のかたち』第二弾をまとめていく方針である。

（堤 正典）

西洋文化の受容 ――思想と言語

1. テーマ：近代日本における西洋文化受容の総合研究
2. 代表者：鈴木修一
3. 活動内容：5年間をかけて読み続けてきた『明六雑誌』の成果を、本研究所叢書 20 号『明六雑誌』とその周辺――思想と言語』として出版した。(2004 年度)
その後、新たに近代初期の洋学資料を読む計画をもっているが、本年度は休会という状態であった。来年度は、再出発を期している。

(鈴木修一)

物語研究

1. 研究テーマ：物語の構造分析，歴史叙述と文学
2. 代表者：日高昭二
3. 活動内容：昨年の活動報告にも記したが，研究会のメンバーの大半が 2005 年に学内で採択された「共同研究奨励助成」と重なるため，研究会等は開かれていない。今年度も，共同研究「〈表象〉としての日本」の研究会への参加を呼びかけてきた次第。それも 2008 年 3 月で一応終了するので，2008 年 4 月以降の計画については，メンバーとあらためて協議したうえで，活動を再開したい。

(日高昭二)

2007 年度【各国地方史の比較史的研究】

本共同研究グループは世界史を現存する国家，民族，文明というレベルで考察するのではなく，地方史という地域概念から見直すことを研究テーマとして取り上げ，年に数回の研究会を開き，中国研究者と他分野研究者の発表を行なうことを目指している。

しかし，今年度には十分な例会活動を行うことができず，1 回の例会を開催できたのみである。

(1) 2008 年 1 月 17 日 例会

1. 「スイスで見た地方史」 吉田隆（元神奈川大学職員）
2. 「中国について考えていること」 小林一美（元神奈川大学教員）

2007 年度で神奈川大学 21 世紀 COE プログラムと学内共同研究「中国における日本租界」が終了するので，2008 年度には休眠状況を脱け出し，活動化させたいと思っている。

(孫安石)

人文研究所共同研究グループ活動報告

1. 自然観研究班

2. 2007 年 9 月 26 日 (水), 17-216 室,
岩崎豊太郎・神奈川大学名誉教授による「ワーズワスと自然」という演題での研究発表。
4. 2000 年度から, 毎年 1, 2 回の講演会を開催してきたが, 07 年度から各メンバーによる研究発表を
始動させた。9 月の研究発表の後で, 研究班の今後の活動予定について, 活発な意見交換がなされ
た。叢書へとまとめて行く総意が再確認され, 当日の出席者全員のそれぞれのテーマが明示され
た。
2008 年度は何人かの研究発表会を実施し, 叢書として実現される方向へ進みたい。
以上 (文責: 佐藤夏生)

共同研究グループ活動報告

1. 色彩と文化
2. 当研究グループは, 2007 年度奨励共同研究助成金を得 (課題名 世界の色の記号に関する実証的
研究—自然・言語・文化の諸相—), 活動の本拠をそちらに移した。テーマもメンバーもほぼ重な
っているため, 「色彩と文化」の研究活動報告については割愛したい。
(三星宗雄)

横浜研究

1. 横浜研究—横浜における多文化共生社会の創出に関する研究
2. 活動内容
本年度は研究成果をまとめる活動に専念した。2008 年 2 月に, 人文研究所叢書として刊行予定で
ある。
(横倉節夫)

研究グループ: 言語変異研究

代表: 彭国躍

研究活動:

1. 資料収集: 『国家図書館蔵敦煌遺書』(25 ~ 43 巻), 『俗文学叢刊』(継続), 『冊府元龜』(宋)(12 巻)
2. 講演活動: 「近代中国語の敬語と人間関係」講師 Daniel Zoltan Kadar (Eotvos Lorand University)
3. 執筆活動:
「現代上海の路名と社会—命名の社会言語学」
「日本語の概念カテゴリーの習得と誤用—中国語による認知構造の母語干渉」
4. 研究発表:

「中国語社会語用論の通時的研究—「年齢質問」発話行為の事例分析」(2007 年度日本語用論学会)
「上古中国語の副詞型敬語の研究『神奈川大学言語研究』(特別号)(2007 年度)
「漢代鄭玄が訓釈した古代中国語の対人関係機能について—歴史語用論のアプローチ」
『語用論研究』(2007 年度) 日本語用論学会

ジェンダー・ポリティクスのゆくえ

メンバー同士で共通テーマを模索する討議を行ったほか、以下のような研究会を開催した。

①「ニキ・ド・サンファルと増田静江——DVD『わたしのニキ』を観て」

日時：2007 年 5 月 30 日 (水) 16:30 ~ 19:00

場所：20 号館 113 教室

内容：期待される女性として生きなければならなかった上流階級の暮らしを捨てて、おおらかな作品を創作した、イタリアの造形作家ニキ・ド・サンファルに魅せられた増田静江さんが、94 年に那須の別荘地に建てたニキ美術館と、ニキと同じような境遇だった増田さんが描かれている DVD を観て、話し合った。

②「ワーキングガールから遺産相続人へ——Laura Jean Libbey のロマンスをめぐる」

日時：2008 年 1 月 23 日 (水) 17:00 ~ 19:00

場所：17 号館 22 号室

報告：山口ヨシ子 (外国語学部)

内容：生涯に 80 冊以上の小説を書き、1000 万部から 1500 万部を売りつくしたベストセラー作家 Laura Jean Libbey (1862 ~ 1924) の作品のうち、とくに女性が賃金労働につくことを讃えた小説群に着目し、労働者階級向けのワーキングガールを主人公とするロマンスがどのような影響のもとに生みだされたかを検討した。さらには、厳しい労働に長時間耐えていたワーキングガールがどのように読まれ、受け入れられていたかを、同時代の小説や自伝などを手がかりに考察した。

(入江直子)

1. 共同研究グループ名：コミュニケーション研究会

2. 活動内容

メンバー：

三星宗雄 (人間科学部 教授)

古屋喜美代 (人間科学部 教授)

松本安生 (人間科学部 准教授)

坪井雅史 (外国語学部 准教授)

富谷玲子 (外国語学部 准教授)

師岡淳也 (外国語学部 准教授)

杉本 崇 (人間科学部 非常勤講師)

大高瑞郁 (人間科学部 非常勤講師)

活動内容：

直感的・感情的な人間の意識と行動は、利己的・合理的な前提に基づいて想定されている人間社会においてポジティブとネガティブの両面で様々な影響を及ぼしている。近年の教育からマーケティングまでに及ぶコミュニケーションの研究はこうした多面的な人間の意識と行動を理解し、それらを前提とした方法論の構築が求められている。この共同研究グループでは、こうした背景のもとで、コミュニケーションに関連する学際的な既存研究における到達点を明らかにするとともに、今後の課題と方向性を明らかにすることを目的とする。

このため、研究会ではメンバー及び外部の研究協力者とともに、毎回のテーマに沿った既存研究のレビューを行い、その結果をもとにそれぞれの研究の位置づけやその特徴、独創性、先進性などについて議論を行った。

(松本安生)

植民地近代性の国際比較

本研究グループは本年度に発足した新しい研究組織である。本年は以下の2回の研究会を開催した。

第1回研究会：

開催日：2007年5月27日（水）

場所：17号館401号室

報告者：尹慧瑛（一橋大学COE研究員）

報告テーマ：「北アイルランドという〈場〉——ポスト植民地主義／紛争の諸課題」

第2回研究会：

開催日：2007年12月5日（水）

場所：17号館401号室

報告者：泉水英計氏（神奈川大学経営学部）

論題：「1970年：沖縄と障害者による二つの反「復帰」思想について」

(文責：永野善子)

新購入主要文献解題

山本実彦旧蔵・川内まごころ文学館所蔵

「改造」直筆原稿の研究

付録・DVD版「改造」直筆原稿 画像データベース

紅野敏郎・日高昭二編

雄松堂出版 2007年10月

1999年に、改造社の創業者・山本実彦の遺族が、「改造」関係の直筆原稿約7千枚（90名の作家・文学者・思想家の236点にわたる作品など）を、実彦の出身地である鹿児島県の薩摩川内市に寄贈した。寄贈を受けた川内まごころ文学館は、「収蔵資料展」を開催するとともに、展覧会の監修者であった早稲田大学名誉教授・紅野敏郎氏のもとで直筆原稿の研究プロジェクトを立ち上げた。本書は、その成果として刊行されたものである。その内容は、改造社の出版活動と、直筆原稿の改題およびその原稿にかかわる研究論文からなる。

また、付録としてDVD版も同時に刊行されている。発見された直筆原稿のデジタル画像と、それらの発表誌における活字媒体が比較対照される仕組みになっている。これほど多量・多彩な原稿をみる機会は、おそらく今後ないものと思われるが、筆記された個性的な字体、および削除・加筆の具体から、どういう情報を読み取ることができるか。西洋では、すでに生成研究として知られているとはいえ、日本ではまだまだ未開拓の分野である。「文学・思想研究」における新しい方法論の試みが、ここからはじまるといえよう。

（日高昭二）

新購入主要文献解題

1. 『新色名事典』

2. (財)日本色彩研究所編

3. 日本色研事業株式会社

4. 2002年9月(第5版)

5. 日本色彩研究所が開発したPCCS(日本色研配色体系)の中から、PCCS系統色名区分にしたがって配列した色見本帳である。系統色名数は432あり、それぞれ色票が貼付してある。各系統色名の範疇に入る代表的な固有色名または基本色名が、主に和、中、英、仏、独、伊語の中から取り上げられている。その数は約1400語に上る。残念ながら、固有色名または基本色名の1つ1つには色票がついていないが、その命名の元となった動植物のイラストが描かれていたり、またその色名のいわれやそれに関する短い歴史の記述があり、「物語」としても楽しいものである。

ちなみに「新橋色」を見てみると、PCCS系統色名では「明るい緑みの青」であり、「明治中期に、化学染料が用いられるようになって、着物にあざやかな青緑色が使われるようになり、当時花柳界の新興勢力であった新橋の芸者衆が好んだ色として、一般にもその色が流行したので、新橋色という色名が生まれたといわれている。新橋の芸者屋が金春新道にあったところから「金春色」とも言われた」とある。

筆者が今一番興味を持っている「緑」(PCCS系統色名で「鮮やかな緑」)についてはこうある。「たいていの言語で、緑は最後に原色の仲間入りをした基本色彩語であったと考えられている。日本語のみどりは、瑞々(みずみず)しいということ、おそらく草木の新芽と関係があると考えられている。やはり多くの言語で青と緑は意味の範疇において未分化であり、二つの独立した色彩語が成立しても、日本語や中国語では緑に色づくことが青いと形容される習慣が続いた。万葉集には緑が使われた歌が2首あり、延喜式では緑も青緑も記載されているが、襲の色目をはじめ、当時から青と記されている色はたいがい緑か青緑を表している可能性が高い。英語のグリーンも成長するグロウ(Grow)あるいは草のグラス(Grass)と関係づけられて、植物の生成現象を概念の基礎としていたと考えられている。」

(三星宗雄)

辛亥革命史資料新編（全8巻）

国家清史編纂委員会

湖北長江出版集団・湖北人民出版社 2006年刊

1911年10月に勃発した清朝打倒の辛亥革命について、それを準備する過程から革命が起こった後の状況に至るまでの重要資料を編集した資料集として、かつて『辛亥革命』全8巻（中国近代史資料叢刊の1種、1957年刊）が出版されたが、今回出されたのは、編者の序言によればその続集ではなくて、先の『辛亥革命』の欠点を補うべく資料の選択に極力主観性を排し、また1つ1つの資料の全貌を留めるようにつとめ、さらにはこの間に収集した多くの資料を取り入れたものだという。なお、8巻の配列は資料の内容やその来源によって、1巻は「時人文集」、2巻は人物年譜、伝記、日記、3巻は遼寧省档案、4巻は浙江、江蘇、吉林、雲南4省档案、5巻はシンガポールの新聞『中興日報』、『南洋総匯新報』の関連資料、6巻は日本外務省档案、7巻はフランス外交部、陸軍部档案、8巻はイギリス外交部档案で、外文資料は全て中訳されている。

『辛亥革命』を利用して研究を始めた者としては、より充実した資料集を手にすることができたのはまことにうれしいことである。

（大里浩秋）

所員の自署紹介

『イギリスの王室』

著者：石井美樹子

河出書房新社 2007 年 8 月 20 日（136 頁）

イギリス王室の祖先を、バイキングとアングロ・サクソン時代からノルマン征服を経て現在のエリザベス二世にいたるまでのイギリス王室の通史であるが、出来事のみならず、登場人物の性格や容貌など、人柄などにも触れ、歴史上のヒロインやヒーローの人物実像にも迫る特異な通史となっている。早くから立憲主君制を発達させたこと、人民と共に歩むというイギリス王室の伝統が、ヨーロッパ全土を襲った共和主義と民主主義の波を泳ぎ切り、第一次、第二次大戦後生き延びた。イギリス王室は長い伝統を誇るヨーロッパで唯一の王室であり、イギリスの文化や伝統は王室の存在と切り離すことはできない。



『色の心理学』

著者：人間科学部 三星宗雄

マックローリン出版 2008 年 1 月（200 頁）

色についての概説書である。私たちは色によって取り囲まれて生活している。白黒も色と考えれば色のついていない空間はない。色は元来事物の目に見えない内部の状態を教えてくれるものとして備わったと考えられる。例えば「顔色が悪い」というような場合、顔の色そのものというより、それを手がかりにして（目に見えない）身体内部に何か異常があるのではないか、という推測をしていることになる。あるいは、「赤」という色を考えてみると、ある種のチョウの幼虫はいかにも毒々しい赤色を頭部にいただいている。その色によって、実は恐ろしい毒または武器を内部に持っていることを周囲の天敵に教え、結果的に生き

延びる確率を高めている（警告色と呼ばれる）。また発情したメスザルのおしりが赤くなるのは、その色によって、生理的に（内的に）発情していることを周囲のオスザルにアピールし、結果的に自己の遺伝子を残す確率を高めている（婚姻色と呼ばれる）。そういう意味では、赤という色は両義的な信号を発している大変面白い色である。いづれにしても、まず色は生物（動植物ともに）の生き残りのための戦略として大変重要な役割を果たしている。

しかし私たち人間はそれにとどまらず、人工的に色彩を作り出し、それを積極的に多くの場面で利用している。知覚的な面の応用では、あの赤いネットに入ったミカンである。ネットを通して見ると本当に赤く見えるが、中のミカンを取り出してみると驚くほど黄色かったり、あるいは黄緑色だったりする。緑色のネットに入ったオクラも同じ応用例である。まさに天才的な色彩による商品戦略と言わざるを得ない。

本書では、色覚が進化の過程で備わった理由、または色の持つ本来の機能を強く意識した。「色が見えることによって、どのようなメリットがあるのか」という視点から、多少目的論的に、色のさまざまな側面を扱った（つもりである）。その試みが成功しているかどうかは読者の判断にお任せするしかない。

その書名を『色彩心理学』ではなく、『色の心理学』としたのは、狭い意味でのいわゆる色と心理との関係を扱っただけでなく、さまざまな感覚の特徴、形の知覚（ゲシュタルト心理学）と物体の認識、遠感覚としての視覚が持つ奥行き知覚、脳の構造、感情などについても含めたからである。この点についてもその功罪については読者の判断を仰ぎたいと思う。



『ヘキュバのために！——シェイクスピアの
主人公に与えた選択肢——』

著者：橋本 侃

欧友社 2007 年 9 月（323 頁）

平成 4（1992）年から 19（2007）年までに執筆したシェイクスピアと演劇についての論文をまとめたものである。ギリシャ悲劇から現代アメリカ演劇に至る悲劇の系譜を縦糸に、シェイクスピア悲劇を横糸に、岐路に立たされた主人公がする選択行為を主題として、演劇という発表手段で描かれた人間の生き方と人生を主人公たちに共通する表現方法である比較級構文から注目し、一つの実験に至るまでの言動を文学的に考察した。

確かに、主人公がする一つの重大な選択をする場面に口にする思考方法がヘレニズム・ヘブライズムに基づいた比較対照なのである。西洋の文化を支えてきた、ものの考え方の根本に「A か A でないか」というのと、「A か B か」という疑問文がある。前者は対象そのものの本質を問う古代ギリシャの遺産であり、後者は絶対的価値観＝神意に照らしての比較をする古代ヘブライ文化のそれである。シェイクスピアが活躍したイングランドはヘブライ文化を引き継ぐプロテスタンティズムの世界にある。興味深いことに、市民の娯楽であった演劇舞台の上で、西洋文化の伝統の根源にある思考方法を主人公がするのである。

この論文集は外国文学を研究する外国人学究の存在のあやうさから始まり、演じることの意味を自国の古典文学＝古事記・日本書紀に見出し、その意味を、時空を超える劇作家シェイクスピアが捉えた人生観に重ね、現代アメリカの平凡な一市民が抱えた悲劇の意味を最後に捉えた。

No.	名称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	叢書
1	日中関係史	近代以降、現在までの日中関係の諸問題	1. 各自の関心に基づく講演会、研究会の開催 2. 中国人日本留学史と日本人中国留学史に関する調査研究 3. 中国における日本租界史の研究 4. 1945年直後における日・中・韓・三国間の戦時・戦後に関する論調比較	大里	大里・中島(三)・松本(安)・日高・山口(建)・鈴木(陽)・影・孫・村井(寛)・(非)吉川(良)・(非)楊(中)・(非)渡・(非)呉・(学外)小林(一)・(学外)李・(学外)川島・(学外)並木・(学外)木山・(学外)田畑(学外)三好・(営)實志	21	2009年 検討中
2	文化のかたち	21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい「知の地平」拓く。	2005年に叢書「文化のかたち。言語・思想・くらし」を刊行したが、第二弾を出版するを目的として活動する。すでに第二弾の企画がいくつかメンバーから出ているので(日本とロシアの文化の様々な側面における交流や両者の文化比較をテーマとする、など)、本年度は研究報告等の研究活動を行っている中で調整しながら、叢書の具体的な内容について検討していく。また、研究報告会の他にも、メンバーにおいて計画が整えられれば、シンポジウムなども開催したいと考えてるので、検討していきたい。	堤	水野・岩本・羽佐田・小馬・鈴木(修)・堤・大須賀・石井(美)・ヒル・細田・駒走・マコヤマ・小林・鈴木(幸)・(非)八島・(非)米重・(学外)湯田・(学外)赤坂・(学外)中本・(学外)秋山・(学外)佐藤(江)	19	2008年 検討中
3	西洋文化の受容—思想と言語—	日本の近代化に際しての、ヨーロッパ及びアメリカ文化の受容の	『明六雑誌とその周辺』を刊行後、共同研究グループとしての活動はしばらくブランクが続いているが、各自の個別的活動は、「表象としての日本」に再統合されたたり、新学科「国際文化交流学科」の授業に回ってなされている。しかし本年度は、再び共同研究としてテーマを再考の上、定期的に活動を始めたと思う。	鈴木(修)	鈴木(修)・伊坂・岡島・中島(三)・佐藤(夏)・孫・(法)吉井・(経)池上・(学外)高野・(学外)岡野(哲)・(学外)浅山	11	2003年 出版
4	物語研究	物語の構造分析 歴史叙述と文学	1. 研究会を4回程度開催ただし、今年度はメンバーが「共同研究奨励助成」とダブっているのので共同で開催する予定。 2. ニュースレターを発行。ただし不定期。 3. 講演会の開催。 4. 叢書については、前記「共同研究」とも重なっているにで、2008年度に刊行を予定し、物語研究のメンバーにも執筆の依頼をしたいと考えている。	日高	日高・伊坂・鈴木(修)・鈴木(陽)・小馬・鈴木(彰)・鳥越・村井(ま)・山口(ヨ)・坪井	10	2008年 検討中
5	各国地方史の比較史的 研究—新編中国地方志叢書を中心として—	世界史を現存する国家、民族、文明ではなく、地方史という地域史的観点から見直すことを目的とする	年に4回の研究会を開き、各国、中国研究者と他分野研究者の発表を行うことを目指している。2007年度にも、引き継ぎ研究会を開催し、活動の充実を図りたい。	孫	孫・大里・岡島・村井(寛)・(経)柳沢・(営)廣田・(学外)佐々木・(学外)谷川・(学外)小林(一)・(職員)吉田・(職員)額賀・實志(営)	12	検討中
6	自然観の研究	自然観の変遷と展望	1. 哲学、文学、環境学など異なる分野から「自然観」を追求している。昨年度から開催の研究会を通して、研究班としての共通軸を確立する。 2. その上で、叢書としてまとめるための構想を練る。	佐藤(夏)	佐藤(夏)・伊坂・岩崎・奥田・鈴木(修)・松本(安)・坪井・(営)復本	8	2008年 予定
7	東アジア比較文化研究会	日本、中国、朝鮮等の言語・文学、歴史、民俗などの伝承文化の比較研究	研究会と講演会を適宜開催していく。	山口(建)	山口(建)・福田・中島(三)・日高・大里・影・鈴木(陽)・孫・小馬・前田(穂)・(経)佐野・(経)河野・(営)田畑・(営)廣田	14	未定

〔名〕名誉教授 〔非〕非常勤講師 〔学外〕学外研究者

人文学研究所共同研究グループ一覧

No.	名称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	叢書
8	色彩と文化	世界の色の記号に関する実証的研究	1. 原則、月1回の研究会を開く。 2. 年、数回講演会を開催する。 3. 比較言語学、色名の知覚的ゆらぎ、ジェンダー、景観等、色彩と文化及び色彩と自然との関わりについて実験、調査する。	三星	三星・彭・堤・尹(亭)・新木・星野・バ久保・小林(工)山本(営)加藤(薫)	10	2010年 検討中
9	横浜研究	横浜における多文化共生社会の創出の研究	昨年度は出版に向けて研究会を行ってきた。又、研究会として3回目的国際シンポジウムも開催した。今年度は成果として、出版を実現したい。執筆予定者の原稿もすでに準備が出来ている。	横倉	横倉・後藤(政)・永野・寺沢・孫・平井・尹(亭)・大里・富谷・福島(経)・後藤(晃)・〔経〕兼子・〔法〕阿部〔学外〕福元	14	2007年 検討中
10	神々のコスモロジー	世界と日本の各国・各地の神々・宗教の研究	今年度4回の研究・報告会を予定している(すでに一回は開催)。前期中にすべてのメンバーの発表をすませ、後期は叢書刊行へ向けて原稿作成期間として予定している。『神々のコスモロジー』刊行は2008年度前半を予定している。	寺沢	寺沢・小馬・鈴木(彰)・山口(建)・尹(亭)・新木(営)新垣(学外)湯田	8	2008年 予定
11	言語変異研究	1. 地域文化と言語変異 2. 時代変容と言語変異 3. 社会階層と言語変異 4. 社会意識と言語変異	1. 研究テーマに即した研究調査を行う。 2. 講演会・研究会を開催する。	彭	彭(非)・浅井・澄民・加藤(非)・陶・松村(非)・山村入江・河上・山口(三)・笠間・村井(ま)	6	
12	ジェンダー・ポリテイクスのゆくえ	従来の二項対立という図式をこえるような形でジェンダーという「差異」のポリテイクスを各自の専門分野から浮上させていく。	1. メンバーと外部研究者による研究会を開催する。 2. 叢書に向けて各自テーマにしたがって論文を執筆する。	入江	松本・三星・坪井・古屋・富谷・福島・師岡(非)・杉本(非)・大高	5	検討中
13	コミュニケーション研究会	多面的な人間の意識と行動についての理解と、それに基づにしたコミュニケーションの方法論について	研究会のメンバー及び外部の研究協力者で、既存の研究についてレビューを行い、それぞれのテーマについて議論を行う。	松本	永野・小馬・笠間・後藤・村井(寛)・〔経〕的場・〔営〕泉水(非)・中林	9	
14	植民地近代性の国際比較	「植民地近代性 (colonial modernity) という概念を軸として、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の政治・社会・文化・歴史の比較研究を行う。この概念は、植民地的要因が植民地時代に限定されて存在するのではなく、植民地後にも残滓として各社会の底辺を形づくっている点について考察することができる。また、時間軸を越えて複数の国民国家や社会の比較が可能となる	年2回～3回の研究会(読書会)を実施し、植民地近代性の研究についての現状を把握する。	永野		8	

〔名〕名誉教授 〔非〕非常勤講師 〔学外〕学外研究者